

福岡市西区

# 四箇周辺遺跡調査報告書

(2)

福岡市埋蔵文化財調査報告書第47集



1978

福岡市教育委員会

福岡市西区

# 四箇周辺遺跡調査報告書

(2)

福岡市埋蔵文化財調査報告書第47集

1978

福岡市教育委員会

## 序 文

四箇周辺遺跡は、日本住宅公団四箇田団地の建設に伴う、埋蔵文化財の発掘調査で、縄文時代から古墳時代に至る貴重な遺跡が、埋蔵されていることが確認されたため、福岡市教育委員会では、四箇周辺地域の開発に伴う緊急調査を、国庫補助事業により昭和51年度から継続して実施しております。

この報告書は、昭和52年度に実施した縄文時代から古墳時代に至る調査報告で、報告書に見られるように、多くの成果をあげることができました。

本書に収録された資料が永く保存され、市民各位の文化財保護思想育成に活用されますとともに、学術研究の分野において役立つことを願うものであります。

調査に際しましては、多くの方々のご理解とご協力をいただきましたことに、厚く謝意を表わす次第であります。

昭和53年3月31日

福岡市教育委員会

教育長 戸田成一

## 例　　言

- 1 本書は四箇周辺地域における宅地造成等の開発事業に先行して埋蔵文化財の事前調査を行なうことを目的とし、国庫補助を受けて昭和51年度に実施した四箇周辺地域内緊急調査の報告書である。
- 2 事業は福岡市教育委員会文化課が行なった。発掘調査・資料整理・報告書の作製は柳田純孝・二宮忠司が担当し、事務は三宅安吉・国武勝利が担当した。
- 3 本書の執筆は主に柳田が行なったが、土器のうち弥生～古墳時代関係（第2章P.9、第4章P.54・56・66）は力武卓治・石器関係（第2・4・5章の石器の項）は橋昌信・二宮忠司の指導助言を受けて渡辺和子が執筆した。
- 4 遺構図は柳田・渡辺が実測した。出土遺物のうち土器は柳田のほか力武・宮内克己・谷芳樹が実測し、石器は二宮・渡辺のはか一部を八尋実が実測したものである。遺構実測図および土器実測図のトレースは柳田が行ない、石器は二宮がトレースした。
- 5 遺構の写真は柳田・二宮・渡辺が撮影し、遺物のうち土器は柳田、石器は二宮が撮影したものである。
- 6 本書は柳田が編集した。
- 7 出土遺物・実測図・写真は四箇遺跡現場事務所に収蔵・保管している。
- 8 昨年度調査したJ-10区出土の枕・木製品の樹種について鳴倉巳三郎先生の報文をいただき別冊に収録した。

# 本文目次

iii

第1章	本年度調査地点と調査の経過	1
第2章	J-10 h・11 a・12 a 地点の調査	4
1	J-10 h 地点	4
2	J-11 a 地点	5
3	J-12 a 地点	7
4	J-10 h・11 a・12 a 地点の出土遺物	7
(1)	縄文時代後期	7
(2)	弥生時代中期、後期	8
(3)	古墳時代	12
(4)	石 器	12
第3章	J-10 i 地点の調査	16
1	土層と遺物出土状態	17
2	遺 槽	20
(1)	住居址	20
(2)	土 塚	21
(3)	溝	21
(4)	Pit	22
第4章	J-10 i 地点の出土遺物	24
1	包含層の土器	24
(1)	縄文時代後期（後半）	24
	精製鉢形土器	24
	磨消縄文土器	24
	沈線文・刺突文土器	31
	無文土器	35
	精製浅鉢形土器	38
	注口土器	41
	小形の精製土器	42
	精製土器の底部	42
	粗製深鉢形土器	44
	粗製浅鉢形土器	50
	粗製土器の底部	50
(2)	その他の縄文土器	52

(3) 弥生時代	54
2 遺構の土器	59
(1) D-2 の縄文土器	59
(2) Pit-14の縄文土器	59
(3) Pit-19の縄文土器	59
(4) その他のピットの縄文土器	64
(5) 遺構の弥生土器	66
3 包含層の石器	69
石 鐵	69
石 錐	70
つまみ形石器	70
尖頭器	76
彫器・楔形石器	76
サイド・ブレード	76
刃 器	78
縦長剥片	82
石 鍤	82
削器・搔器	82
サヌカイト製剥片石器	88
搔器・石核	88
磨製石器	92
磨 石	92
石 刈	92
砥 石	95
4 遺構の石器	95
第5章 まとめ	103

# 挿 図 目 次

v

第1図	四箇周辺の遺跡	(縮尺1/25000)	X
第2図	緊急調査地点位置図	(縮尺1/2500)	1
第3図	緊急調査地点と四箇周辺の遺跡	(縮尺1/15000)	2
第4図	J-10 h 地点平面実測図	(縮尺1/100)	4
第5図	J-11 a 地点平面実測図	(縮尺1/100)	5
第6図	J-11 a 地点土層実測図	(縮尺1/40)	6
第7図	J-10 h・11 a・12 a 地点出土土器実測図-1	(縮尺1/3)	8
第8図	J-10 h・11 a・12 a 地点土器実測図-2	(縮尺1/3)	10
第9図	J-10 h・11 a・12 a 地点上器実測図-3	(縮尺1/3)	11
第10図	J-10 h・11 a・12 a 地点石器実測図-1	(縮尺3/5)	14
第11図	J-10 h・11 a・12 a 地点石器実測図-2	(縮尺1/3)	15
第12図	J-10 i 地点平面実測図	(縮尺1/200)	16
第13図	J-10 i 地点土器出土状態実測図	(縮尺1/20)	18
第14図	J-10 i 地点石器出土状態実測図	(縮尺1/100)	19
第15図	J-10 i 地点住居址実測図	(縮尺1/40)	20
第16図	J-10 i 地点土塙実測図	(縮尺1/40)	21
第17図	J-10 i 地点溝断面実測図	(縮尺1/40)	22
第18図	J-10 i 地点 Pit-19 実測図	(縮尺1/20)	23
第19図	精製土器実測図-1	(縮尺1/3)	26
第20図	精製土器実測図-2	(縮尺1/3)	27
第21図	精製土器実測図-3	(縮尺1/3)	28
第22図	精製土器実測図-4	(縮尺1/3)	29
第23図	精製土器実測図-5	(縮尺1/3)	32
第24図	精製土器実測図-6	(縮尺1/3)	33
第25図	精製土器実測図-7	(縮尺1/3)	34
第26図	精製土器実測図-8	(縮尺1/3)	36
第27図	精製土器実測図-9	(縮尺1/3)	37
第28図	精製土器実測図-10	(縮尺1/3)	39
第29図	精製土器実測図-11	(縮尺1/3)	40
第30図	精製土器実測図-12	(縮尺1/2)	41
第31図	精製土器実測図-13	(縮尺1/3)	43
第32図	粗製土器実測図-1	(縮尺1/3)	45
第33図	粗製土器実測図-2	(縮尺1/4)	46
第34図	粗製土器実測図-3	(縮尺1/4)	47
第35図	粗製土器実測図-4	(縮尺1/4)	48

第36図	粗製土器実測図- 5	(縮尺 1 / 3 )	49
第37図	粗製土器実測図- 6	(縮尺 1 / 3 )	51
第38図	その他の縄文土器実測図	(縮尺 1 / 3 )	53
第39図	弥生土器実測図- 1	(縮尺 1 / 3 )	55
第40図	弥生土器実測図- 2	(縮尺 1 / 3 )	57
第41図	弥生土器実測図- 3	(縮尺 1 / 3 )	58
第42図	Pit - 14出土土器実測図	(縮尺 1 / 3 · 1 / 4 )	60
第43図	Pit - 19出土土器実測図- 1	(縮尺 1 / 3 )	61
第44図	Pit - 19出土土器実測図- 2	(縮尺 1 / 4 )	62
第45図	Pit - 19出土土器実測図- 3	(縮尺 1 / 3 )	63
第46図	Pit 出土縄文土器実測図	(縮尺 1 / 3 )	65
第47図	Pit 出土弥生土器実測図- 1	(縮尺 1 / 3 )	67
第48図	Pit 出土弥生土器実測図- 2	(縮尺 1 / 3 )	68
第49図	石錐実測図- 1	(縮尺 2 / 3 )	71
第50図	石錐実測図- 2	(縮尺 2 / 3 )	72
第51図	石錐・つまみ形石器実測図	(縮尺 2 / 3 )	73
第52図	尖頭器・彫器・楔形石器実測図	(縮尺 2 / 3 )	74
第53図	サイド・ブレイド I 実測図	(縮尺 2 / 3 )	75
第54図	サイド・ブレイド II 実測図	(縮尺 2 / 3 )	77
第55図	刀器 I 実測図	(縮尺 2 / 3 )	79
第56図	刀器 II 実測図	(縮尺 2 / 3 )	80
第57図	刀器 III 実測図	(縮尺 2 / 3 )	81
第58図	刀器 III・縦長剥片実測図	(縮尺 2 / 3 )	83
第59図	縦長剥片実測図	(縮尺 2 / 3 )	84
第60図	石匙・削器・搔器実測図- 1	(縮尺 3 / 5 )	85
第61図	削器・搔器実測図- 2	(縮尺 3 / 5 )	86
第62図	削器・搔器実測図- 3	(縮尺 3 / 5 )	87
第63図	サヌカイト製剥片石器実測図	(縮尺 2 / 3 )	89
第64図	搔器・石核実測図	(縮尺 2 / 3 )	90
第65図	磨石・磨製石斧・他実測図	(縮尺 1 / 2 )	91
第66図	磨製石斧・打製石斧実測図	(縮尺 1 / 3 )	93
第67図	砥石実測図	(縮尺 1 / 2 )	94
第68図	石錐・楔形石器・つまみ形石器他実測図	(縮尺 2 / 3 )	97
第69図	刀器・縦長剥片実測図	(縮尺 2 / 3 )	98
第70図	刀器・打製石斧実測図	(縮尺 2 / 3 )	99
第71図	刀器・縦長剥片実測図	(縮尺 2 / 3 )	100
第72図	石庖丁・他実測図	(縮尺 1 / 2 )	101
第73図	削器・磨製石斧実測図	(縮尺 1 / 3 · 1 / 6 )	102

## 図 版 目 次

目  
本文对照頁

P.L. 1	(1) J-12a 地点発掘風景.....	7
	(2) J-10h 地点AT全景.....	4
P.L. 2	(1) J-11a 地点AT土器出土状態.....	5
	(2) J-11a 地点CT(溝)全景.....	5
P.L. 3	(1) J-10i 地点全景.....	16
	(2) J-10i 地点2・4区全景.....	16
P.L. 4	J-10i 地点の遺構(1住居址 2・3 土塁).....	20
P.L. 5	(1) J-10i 地点の溝(M-1) 全景.....	21
	(2) J-10i 地点の溝(M-2) 横断面.....	22
P.L. 6	J-10i 地点土器出土状態.....	17
P.L. 7	(1) Pit-19の土器出土状態.....	22
	(2) 粗製土器出土状態(P-1050).....	18
P.L. 8	(1) 粗製土器出土状態(P-1350).....	18
	(2) 石器出土状態.....	19
P.L. 9	精製鉢形土器(磨消縦文土器-1).....	24
P.L. 10	精製鉢形土器(磨消縦文土器-2).....	24
P.L. 11	精製鉢形土器(沈線文土器).....	31
P.L. 12	精製浅鉢形土器.....	38
P.L. 13	小形の精製土器.....	42
P.L. 14	精製無文土器.....	35
P.L. 15	(1) 粗製深鉢形土器(P-1050).....	44
	(2) 粗製深鉢形土器(P-1350).....	44
P.L. 16	(1) 粗製浅鉢形土器(P-924).....	50
	(2) 弥生時代壺形土器(P-1492).....	54
P.L. 17	J-10i 地点出土弥生土器.....	54
P.L. 18	J-11a 地点出土弥生土器.....	8
P.L. 19	石器(縮尺2/3).....	69
P.L. 20	サイド・ブレイド(縮尺2/3).....	76
P.L. 21	刃器(縮尺2/3).....	78
P.L. 22	刃器(縮尺2/3).....	78
P.L. 23	刃器・綫長剣片(縮尺2/3).....	82
P.L. 24	つまみ形石器・石核・他(縮尺2/3).....	70
P.L. 25	剣片石器(サヌカイト)・削器・搔器(縮尺3/5).....	88

## 本文对照頁

P L. 26	剥片石器（サヌカイト）・削器・搔器（縮尺1／2）	88
P L. 27	磨製石器（縮尺3／5）	92
P L. 28	砥石・磨製石斧・打製石斧（縮尺1／2）	95

## 表 目 次

ix

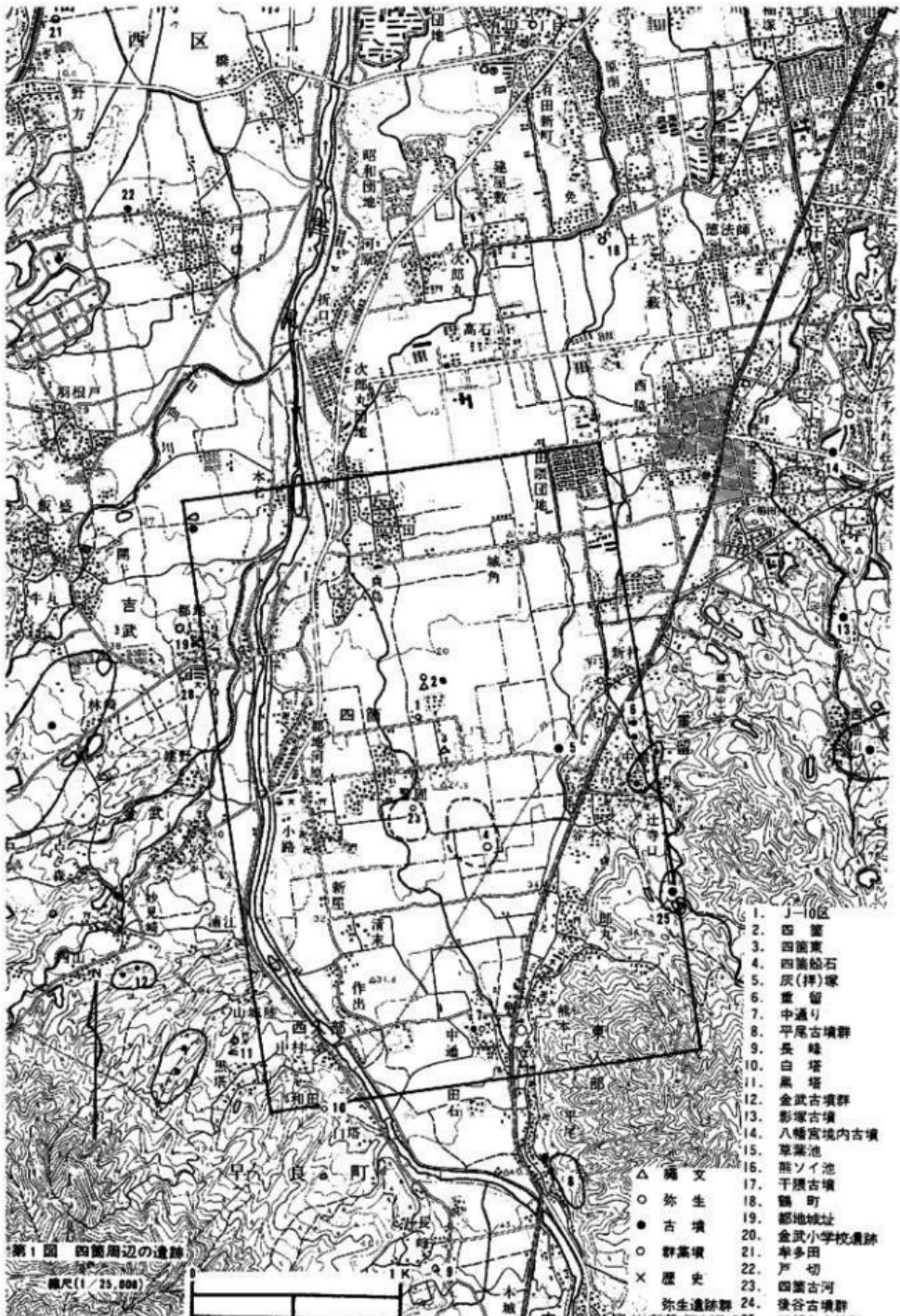
第1表 J-10 h・11 a・12 a 地点出土石器一覧表.....	13
第2表 J-10 i 地点出土土器一覧表.....	69

## 付 表 目 次

付表-1 ピット計測一覧表
付表-2 J-10 i 地点出土土器計測一覧表
付表-3 J-10 i 地点出土石器計測一覧表

## 付 図 目 次

付図-1 J-10 i 地点(IV区)遺物出土状態実測図(縮尺1/30)
--------------------------------------

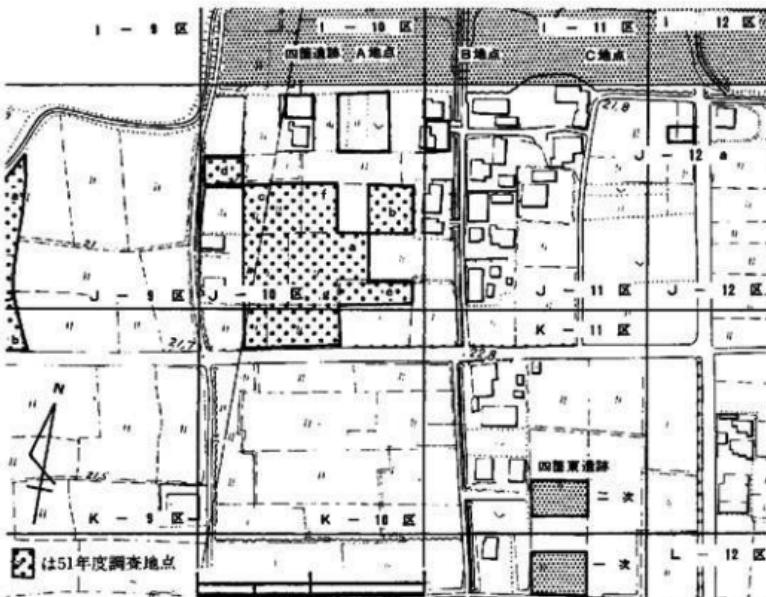


## 第1章 本年度調査地点と調査の経過

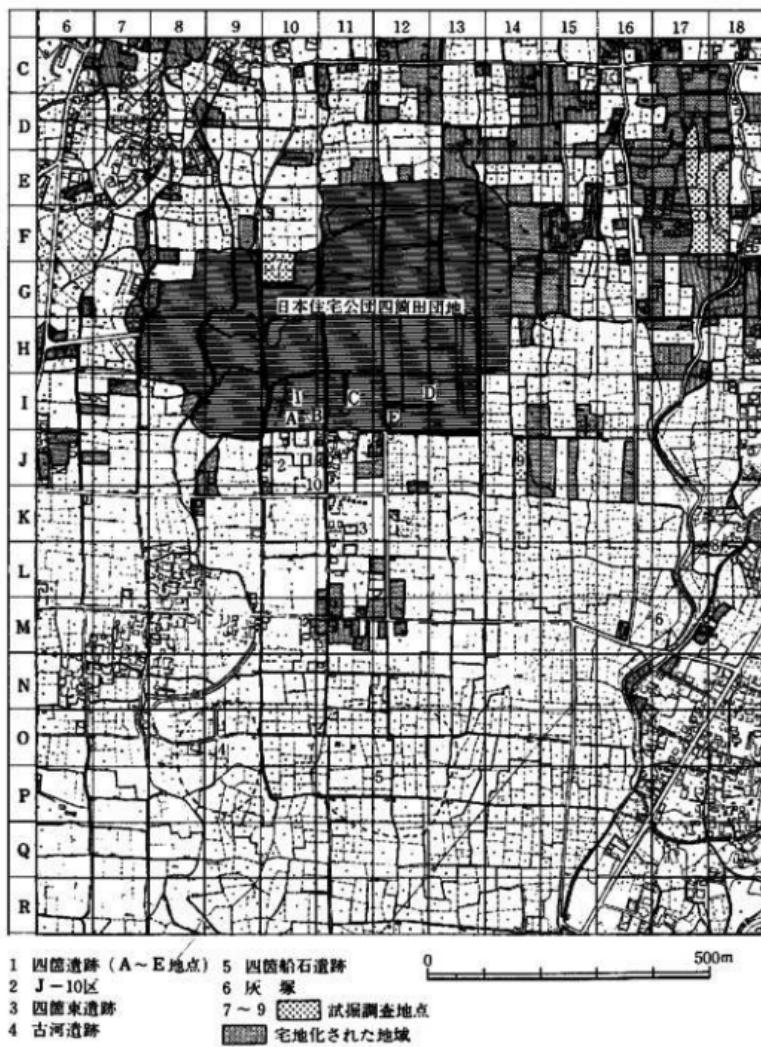
日本住宅公団四箇田団地の建設に伴ない四箇田周辺地区は急速に宅地化されつつあり、本年度もその傾向は強まっている。51年につづき本年度四箇田周辺地区において緊急調査したのは次の4地点である(第2図)。

J-10 h 地点	四箇505-5	200m <sup>2</sup>	発掘面積	50m <sup>2</sup>
J-10 i 地点	四箇505-2	145m <sup>2</sup>		
	四箇505-8	317m <sup>2</sup>		450m <sup>2</sup>
J-11 a 地点	四箇505-3	165m <sup>2</sup>		36m <sup>2</sup>
J-12 a 地点	四箇517-3・4	255m <sup>2</sup>		45m <sup>2</sup>

いずれも個人住宅の新築・増築工事に先行して調査したもので、四箇田団地内の調査によつて明らかになった四箇A地点・B地点の南側に近接したところである。



第2図 緊急調査地点位置図 (縮尺1/2500)



第3図 緊急調査地点と四箇周辺の遺跡（縮尺1/5000）

J-12a 地点の調査は8月23日には開始し、引きつづきJ-11a 地点、J-10b 地点を9月1日まで発掘した。J-10i 地点は11月18日から約2週間の予定で調査をはじめたが、出土遺物が多く53年1月19日によく終了した。

このほか本年度四箇周辺地区における開発行為に先行して試掘調査を行なったのは第3回のG-10区(52年4月)、L-17・18区(5月)、J-14区(7月)、K-10区(12月)の4地点である。K-10区は病院建設予定地で、J-10a・f 地点と関連する遺構が検出されたため来年度緊急調査の対象とした。G-10区(3492m<sup>2</sup>)はスバーマーケット、L-17・18区(1343m<sup>2</sup>)、J-14区(1950m<sup>2</sup>)は宅地造成が原因であるが、いずれも遺構が検出されず本調査の必要はなかった。このほかE・F-17・18区の市住宅供給公社重留団地は51年4月・7月の2度試掘調査を行なったが遺物は少量出土するものの遺構は確認されず、本調査しなかった。しかし、四箇遺跡の調査をはじめた昭和49年前後から宅地造成が急増し試掘調査も行なわれずに宅地造成されているところが多い。特に四箇田団地の東北側に集中しており、最近は四箇田団地の南側にこの傾向が及んでいる。四箇東遺跡の南側に近接したM-12区の個人住宅の建設もその一例で、四箇東遺跡の広かりをとらえるために試掘調査の要請されるところであるが、対応しきれないままに終った。また金屑川や田村川の河川改修工事、農道つけ替え工事などの公共事業も少なくなく、緊急調査の度合が強まっている。

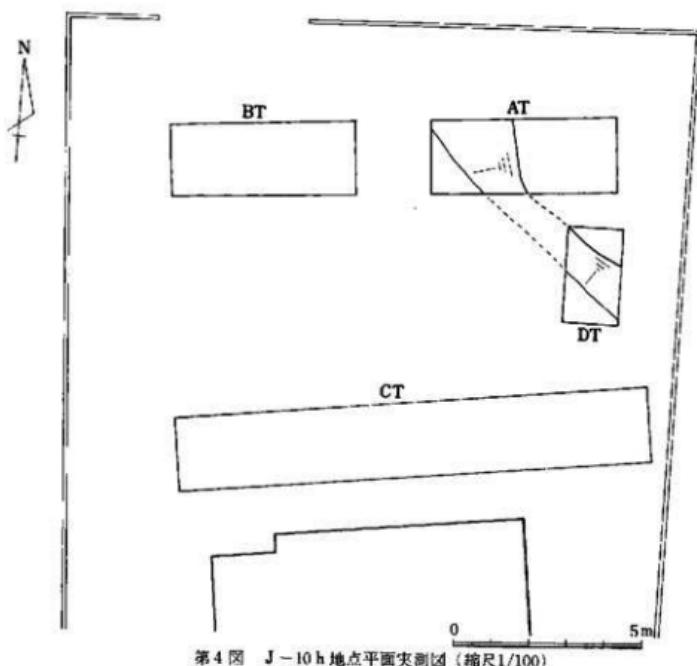
本年度の発掘調査から資料整理にいたるまでには多くの人々の協力を得た。関係者は次の通りである。

調査担当	福岡市教育委員会文化課埋蔵文化財係				
事務担当	清水義彦	三宅安吉	国武勝利	窪田千恵子	
発掘担当	柳田純孝	二宮忠司	渡辺和子(調査補助員)		
資料整理	橋 昌信・谷 芳樹・八尋 実(別府大学)	宮内克己(九州大学)			
	力武卓治(市文化課)				
	上野厚子	岡部直美	亀井康子	坪田満子	鶴田芳子
	長野由美子	上生裕子	原田順子	深見まさ代	藤崎文江
	柳沢チサヨ	山崎由美子	山田雪代	楠根和枝	
調査協力者	白水 広	谷 義康	谷中いね	広田義美	真名子正行
	真名子重一	牛尾準一	萩田重美	柳 光雄	坂本曜之助
	尾崎八重	金子ヨシ子	菊地栄子	菊地キミ	菊地ミツヨ
	萩田オリエ	萩田洋子	柳 ツイ	下郡フミ子	正崎由須子
	谷 ヒサヨ	谷 フミエ	野田部コト	又野栄子	松隈ゆきの
	真名子ゆきえ		稻尾産業KK	福島建設	

## 第2章 J-10 h・11 a・12 a 地点の調査

### 1 J-10 h 地点

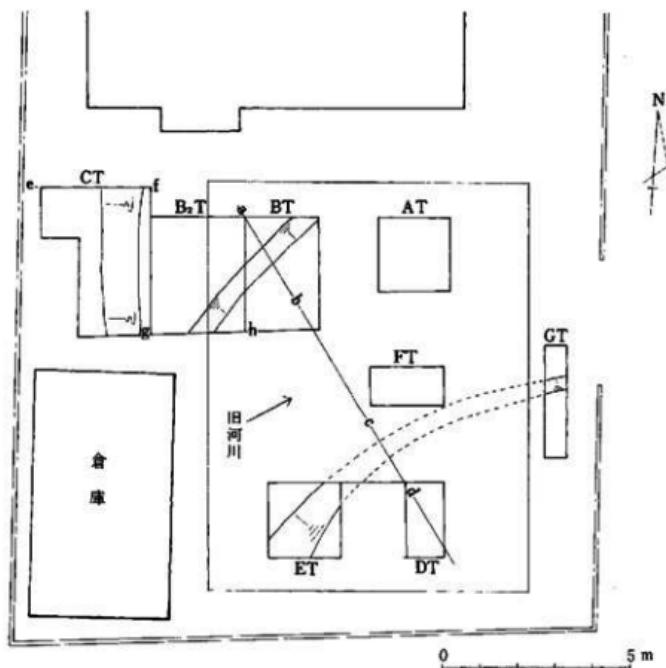
J-10 h 地点は個人住宅の庭先で増築計画に先行して試掘調査を行なった。200m<sup>2</sup>の範囲に AT～CT を設定した。AT の東側は地表より15～20cm で礫層に達し、微高地であることが認められ、礫層上には弥生土器が出土した。AT の中央から西側へは急に低くなり、微高地から低地へ移行している。BT は低地にあたり、あらい砂の層が堆積している。CT も BT 同様低地で、AT 中央で検出された微高地端部を確認するため DT を設定した。第4図のように A T～D T の調査により微高地の端部が北西から南東方向にのびていることがわかり、AT 東側



の微高地の標高は 20.50m で、BT の最も低いところは標高 19.60m を測り、微高地との比高差は 0.90m である。DT の最も低い南西隅の標高は 19.77m である。北東隅の微高地の標高は 20.30m で比高差は 67cm である。

## 2 J-11 a 地点

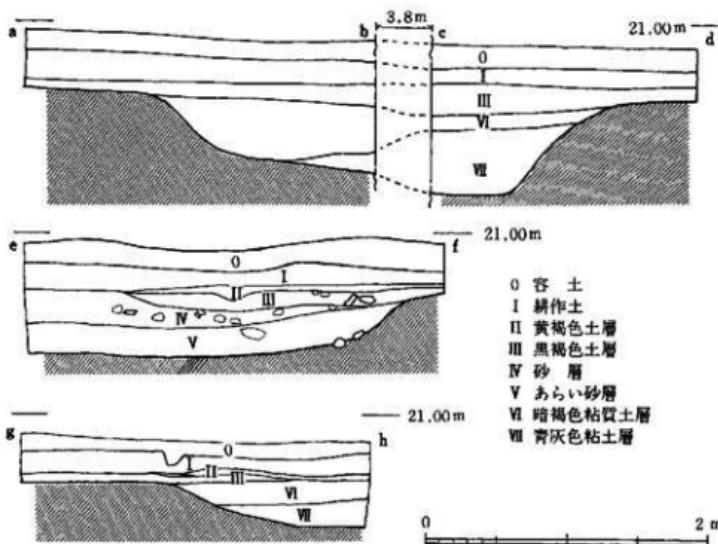
J-11 a 地点も個人住宅の敷地内で家を新築するというので、この地点を緊急調査することとなつたが、新築工事の日程に追われ全掘することはできなかつた。第5図のように新築予定地内に AT～GT の小トレンチを設け、遺構プランの検出に努めた。AT の旧地表より -20cm のところに弥生時代後期の一括資料が出土した (PL. 2) が、AT は低地に位置しており、流れ込みによる二次堆積したものである。BT から B<sub>2</sub>T にかけて微高地の端部が検出され、北東から西南方向へつづいている。CT は微高地の上に位置し、北から南方向へ弥生時代の溝が検出



第5図 J-11 a 地点平面実測図 (縮尺1/100)

された。溝の西端は隣家の敷地内にあり、溝の幅は不明である。この溝は四箇遺跡A地点の都市計画道路の調査で検出された2つの弥生時代溝の内の一つである。C Tの溝は更に南へつづいているが、倉庫があるので発掘できなかった。E Tでも微高地の端部が検出され北西側へ落ち込んでいる。E Tの微高地端部をおさえるためF Tを設定したが、F Tは低地になっている。更にG Tを発掘し、微高地と低地との境を検出した。その結果第5図のようにE TからG Tにかけて微高地の端部がつづき、B T・B<sub>2</sub>Tの微高地端部と相対していることがわかり、その間が旧河川であったことをしめしている。それはa-b、c-d断面図にしめた（第6図）。

aの基盤砂層は標高20.45mで、旧地表より-20cmである。dも微高地で標高20.45m、旧地表より-10cmと同レベルである。a-b間の低地下端の標高は20.00m、c-a間の下端の標高は19.80mである。a-d断面の旧河川の上端幅は6.6m、下端の幅は5.5mを測り、微高地との比高差は最大65cmとなっている。従って幅6m、深さ60cm程度の川ということになる。A Tの土層をみると、最下層の標高は19.94mで、青灰色砂層、泥炭、あらい砂層の順に堆積しており、流木も含まれている。川の流れで砂が堆積したり、よどみのようなところに泥炭層が形成された状況がうかがわれる。旧河川の中央部にあたるF Tでは標高19.27mの基盤砂層上に厚さ50cmの砂まじり泥炭層が堆積している。B Tの南東隅も旧河川に面した低地でここにも流木が認められた。C T北側の上層図（e-f）は溝の横断面図である。東側の微高地端部の標高は20.40



第6図 J-11a 地点土層実測図（縮尺1/40）

m、溝の中央部下端は19.93mで、溝の深さは47cmであるが、微高地は削平されており、本米の溝の深さを知ることはできない。溝の下部にはあらい砂（V層）が堆積し、その上に円礫を含む砂層（IV層）があり、弥生時代中期の甕・器台などが包含されている。溝の幅は不明であるが、溝の横断面図（e-f）をみると2.5m以上の広がりをもっている。今回の発掘調査地点と四箇遺跡A地点との間にある住家の下にも遺構が広がることは確実で、改築時には調査しなければならないところである。

### 3 J-12 a 地点

J-12 a 地点は弥生時代の杭列が発掘された四箇遺跡E地点の南に位置しており、宅地造成に先行してE地点と関連する遺構の有無を確かめるため試掘調査を行なった。耕作土の下には黄褐色土・青灰色粘質土が堆積し、地表より80~110cmで基盤疊層に達する。疊層上面の標高は東端で20.05m、西端では20.37mと東から西へ傾斜しており、南北方向では北から南へわずかに傾斜している。遺物包含層は認められなかった。J-13区では本年度水路の取付工事（西区農林課）が行なわれているが、工事中の断面観察では遺構は検出されていない。

### 4 J-10 h・11 a・12 a 地点の出土遺物

各地点とも発掘面積が小さく出土遺物は多くないので一括して記述する。

J-10 h 地点は微高地の端部をおさえるための小発掘となつたため遺物が出土したのはAT東側の微高地の部分だけで、弥生土器が数点出土している。11 a 地点のBTとB<sub>2</sub>Tは微高地端部にあたるトレンチであるが、微高地から縄文土器と弥生土器が少量出土し、縄文時代・弥生時代の遺構面であったことをしめしている。CTでは四箇遺跡A地点からつづく弥生時代の溝が検出され、溝から縦形土器の口縁部や底部などが出土している。時期はいずれも弥生中期のものである。ATは低地に位置しているが、旧地表に近い上層から弥生後期の壺・甕・高杯・器台などが一括出土した。旧河川によって南北方向から流されてきたものであろう。いずれも弥生終末期のものである。他のトレンチは低地で出土遺物はない。

J-12 a 地点は低地で遺物包含層は認められず、石斧（第11図）が3点出土した以外に出土遺物はみられなかった。

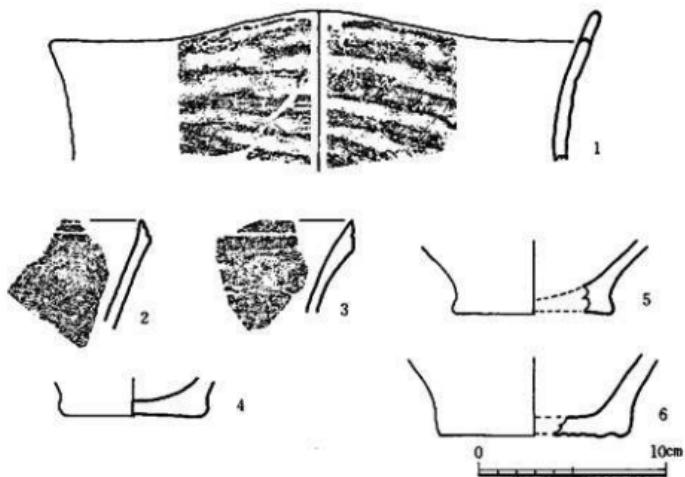
#### (1) 縄文時代後期

J-11 a 地点から縄文土器が少量出土した。いずれも小片で図示できるのは第7図の6点である。2・3は精製土器の口縁部片で、口縁端部に1~2条の沈線文を施すが縄文ではない。胎

土に砂粒を含むが器面は内外とも研磨され、焼成は良好。全形は山形口縁をなす鉢であろう。3は精製土器の底部片で中央部がわずかに凹む。底径8.0cmである。1は粗製土器の口縁部で口径は30.0cmを測る。口縁部が外反し、2つの低い山形口縁を有する。内外ともヨコ、斜め方向の指ナデがみられる。5・6は粗製土器の底部片で、5の底部径は8.6cm、6は10.2cmである。6の底部には種子の圧痕と思われるスタンプが認められる。最も大きなものは1cm内外で、ほかに4×5mm前後の圧痕が数箇みられる。底部の種子圧痕はJ-10 i 地点の粗製土器にも多数認められる。

## (2) 茎生時代中期、後期

**變形土器** (第8図1~4) 1は内傾する胴部上端に断面三角形の粘土を接合して口縁部がつくられている。口縁外端部は上下から強く横ナデされており口縁上面は平坦でない。口縁内端部は小さく突出しており、外端部は丸くおさめて刻み目を施している。刻み目の間隔は不均一で彫りも浅い。口縁部の小破片のため全形は知りえないが胴がやや張る型式のようである。胴部外面は横ナデ後に幅約1.2cm 7本程度を1単位とするハケ目調整がなされている。胎土に小砂粒を含む。内外ともに白灰色を呈し焼成は堅緻である。2の口縁部は外側に著しく伸びており、いわゆる鶴先状の断面をなす。口縁外端部は丸みがなく内端部も小さく突出して稜をもつ。この突出部の下は横ナデで強く押されて凹状をなしている。口縁上面は平坦でなく丸く突出している。全体的に磨滅がはげしく外面の調整方法は不明。胎土の砂粒含有はごく少量で



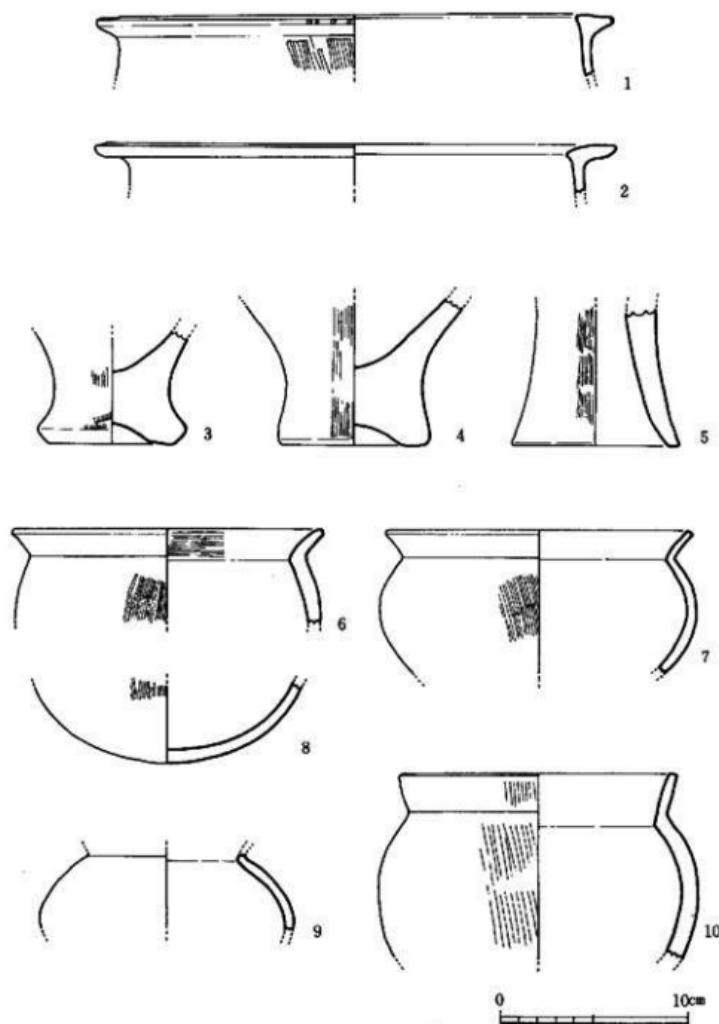
第7図 J-10 h・11 a・12 a 地点出土土器実測図-1 (縮尺1/3)

ある。内外面ともに白灰色を呈しており、焼成は良好である。3と4は變形土器の底部でいすれも上げ底である。3の上げ底は指で押えて整えており、外側も面取り状に整形しており縫がつく。胴部へは大きくくびれて移行する。外面は縫のハケ目後に横ナデ調整をしている。胎土に1~2mmの大砂粒を含んでおり、灰褐色を呈している。4の上げ底は3ほど深くないが同じように強く押している。外側には縫はなく、胴部への移行部はあまりくびれない。外面は縫のハケ目調整を施す。胎土は多量に小砂粒を含んでおり内外面ともに露出している。外面は灰茶褐色、内面は灰黒色を呈する。

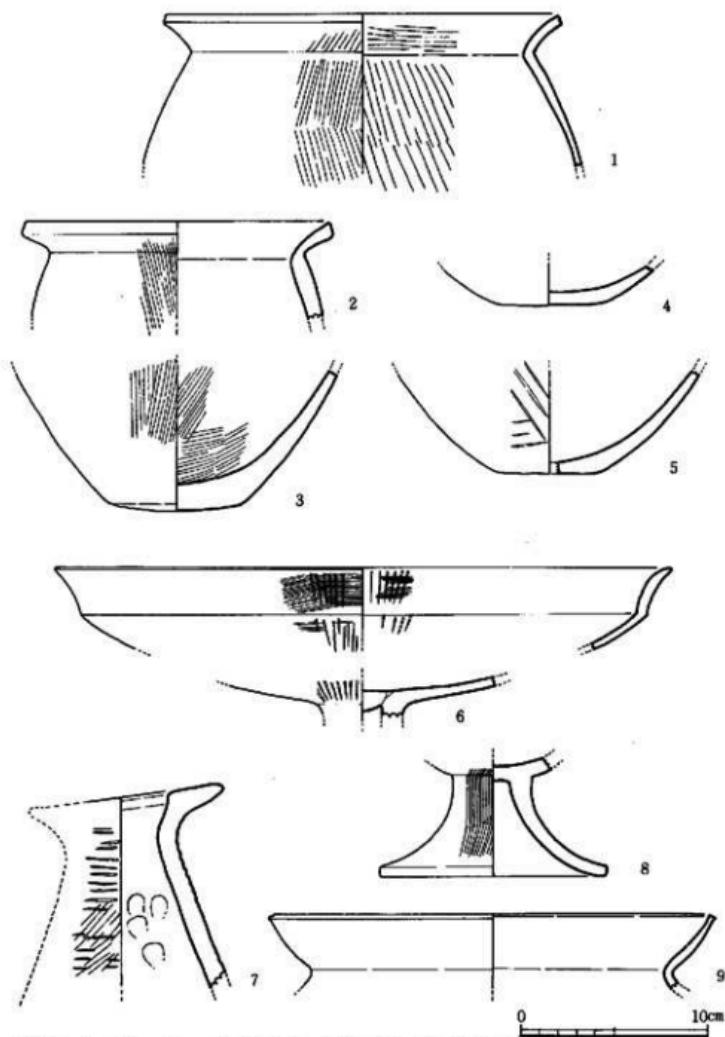
**器台(第8図5)** いわゆる手づくねの厚い器壁をなすものとは違い全体的にうすいつくりをなす。上半部を欠いているがあまりくびれない筒形の器形となるのであろう。内外面とも灰茶褐色を呈し、胎土に砂粒を含む。外面は細かい縫の刷毛目調整。内面はしづら痕が見られ下端部は内外面とも横ナデされ内面はやや段をなしている。

**變形土器(第8図6~10)** 6~9は同じような器形をなすが部分的には異なる点も多く指摘できる。6は球形の胴部から急に外寄りに外反する短い口縁部がつくものでくの字形をなしている。口縁端部は丸みがあり、屈曲部内側にはよい稜がつく。内外面とも茶褐色で胎土に砂粒を含有し、堅密な焼成をなす。内面の調整は口縁部が粗い横ハケ目、胴部は横ナデ。外面の調整は胴部が縫のハケ目で口縁部は横ナデ。調整痕は内外面ともに顕著に残る。7の胴部も球形であるが胴部最大径の位置は中位よりやや上にある。くの字形口縁の屈曲は6ほどではないが、内側はするどい縫をなす。口縁端は丸みがなく凹状をなしている。胎土に小砂粒を含むが表面にはほとんど露出しない。内外面とも暗茶褐色で焼成は堅密である。ナデ、横ナデなど全体的に丁寧な調整が施されており、胴部外面にはわずかにハケ目の痕跡を残している。8は丸底の底部で6と同一個体をなすものと思われる。内外面とも茶褐色で底部外面には黒斑が見られる。調整は内面がナデ、外面上部は縫ハケ目が残る。9は口縁部と胴下半部を欠いているが中位に最大径がくる球形の胴部をなす。内外面とも灰褐色でナデ調整。10の口縁部はくの字形ではなく直立気となり端部も丸みがない。胴部は球形ではなくやや長めの胴となる。内外面とも白灰色を呈し、胎土の砂粒は少ない。全体的に磨減している。

**變形土器(第9図1~5)** 1は胴部より急に外反するくの字形口縁をもつ。屈曲部の内側は縫があり、外反する口縁は直線的ではなくやや外寄る。器壁は胴部に移行するにつれかなりうすくなっている。内外面とも黒褐色で、粗いハケ目調整。外面には煤が付着している。2は口径の小さい變形土器で口縁部はくの字形に外反する。胴部の器壁はかなり厚く、調整は外面が縫ハケ目、内面は横ナデ。口縁端部は凹状となりやや跳ね上がり気味の特徴をもつ。内外面とも茶褐色で一部に煤が付着している。3~5は丸底気みの底部で、3は4・5に比べて胴部への立ち上がりが大きい。3の調査は外面がハケ目、底部は横ナデ、内面は縫、横のハケ目を繰り返している。4は内外面ともにナデ、5は外面が粗いハケ目の上から横ナデを加えてい



第8図 J-10h・11a・12a 地点出土土器実測図-2 (縮尺1/3)



第9図 J-10h・11a・12a地点出土土器実測図-3 (縮尺1/3)

る。底部外面にも横ハケ目を施している。いずれも胎土に砂粒を含み、暗褐色を呈している。

**高杯形土器（第9図6）** うすい器壁の杯部はゆるやかに内脣しながら伸び、直立気味に屈曲し、わずかに外脣して端部は小さく外反する。調整はきわめて丁寧で杯部は外面とも縦のヘラ磨き、口縁部は外面が横ハケ後に縦のヘラ磨き、内面は横ナデ後に縦のヘラ磨き。胎土は小砂粒を含むがわりに精良。外面とも赤褐色を呈している。

**器 台（第9図7）** 頭部が一方に突き出た杏形の器台である。上面はほぼ平坦で卵形の穴が開いている。体部は横の粗い叩きの後に粗い斜めのハケ目を加える。頭部上面にも叩き痕が見られる。内面は指頭の押さえ痕が残る。器壁はかなり厚く胎土に砂粒を含み茶褐色を呈する。

**脚付土器（第9図8）** 脚部のみで上部の器形を知りえないがおそらくは鉢形土器が付くものと思われる。内外面とも褐色を呈し、堅緻な焼成をなす。外面は縦のハケ目調整である。

### (3) 古墳時代

**甕形土器（第9図9）** 9はくの字形口縁で、内脣しながら伸び、端部は内・外側へわずかに突出するという微妙な特徴をもつ。内外面とも灰褐色で焼成は堅緻である。福岡市牟多田遺跡、湯納遺跡、四箇遺跡J-10 a 地点出土例と類似しており、器壁のうすい球形の胴部に丸底の底部がつく器形をなすものと思われる。

### (4) 石 器

J-10 h・11 a・12 a 地点から出土した石器の数は第1表の通りであるが、そのほとんどが流れ込みと考えられ所屬時期は明らかではない。これらの石器の技術、形態等から縄文時代に比定できるものも含まれているが時期決定の明確さを欠く。

第11図-1 調整打面をもつ黒曜石の縦長剥片を素材にした刃器である。a面に粗雑な剥離を加え、b面にはバルバスカーが残る。後は強度ではないがローリングを受けていて両側辺に使用痕と判断される痕跡が観察できる石器でバテナも進んでいる。

第11図-2 J-10 h 地点出土、黒曜石の縦長剥片の両側辺に粗雑な加工を施し抉りこみをつけ折り取っている。打面側も折られたのか断面にリングが残る。両側辺に使用痕があり削器としても利用された可能性をもつ、つまり形石器である。

第11図-3 不定期形で厚みのある黒曜石の剥片を素材にした削器である。末端は折断され両面は粗雑な剥離がなされて素材の面を大きく残している。

第11図-4 打面が平坦でバルバスカーも残っている黒曜石の縦長剥片が素材の刃器である。両面ともに擦痕が多くバテナも進んでいて両側辺には使用痕もみられる。

第11図-5 黒曜石の平坦な自然面を打面とする不定形な搔器である。

第11図-6 黒曜石の幅広い剥片を素材にした石器で、平坦な自然面を打面とし a面右側辺

に僅かな調整を行ない側辺と末端に使用痕を残す縦長剥片である。

第11図-7 サヌカイト質安山岩の縦長剥片を利用し両面に素材の剥離面を大きく残して直線的な一邊にステップフレーリングを利用して画面から階段状の加工を施して尖頭状に整えている石器であるが基部は破損している。

第11図-8 サヌカイトの幅ひろ剥片を素材にし縁辺部に両面から入念に加工を施しさらにつまみの部分にも両面から加工を行ない断面を菱形に整えていて石錐の要素を含んだ横型の石錐と考えられる。

第11図-9 黒耀石の小石核である。b面に自然面を残し全面から剥離を行なっている。剥取された剥片はいずれも短く不定形なものである。両面加工の石器と類似しているが剥離面の大きさから石核と判断できる。

第11図-10 残核を利用して黒耀石のコンケープ・スクレイバーで内側した二辺が刃部として使用されている。

第11図-11 黒耀石の小石核で一部に自然面を残し、上・下両方向から剥離が行なわれ、剥取された剥片はいずれも短く不定形なものである。

第11図-12 やや大形の角礫を原材とした黒耀石の石核で剥離作業は一面のみで他は自然面を残している。剥片は平坦な自然面を打面として剥離される。

第12図-1 比較的大形で厚めの剥片を素材にした安山岩の扁平打製石斧で周辺より大小の剥離を施して全体の形を長方形に整えている。

第12図-2 全面に表皮を残している安山岩にノッチ状の剥離を加え分割、分割部分に剥離を施した石器で各々が単独で使用されたのか、あるいは一つの石器なのか判別できない。

第12図-3 J-12a 地点出土の安山岩の打製石斧未製品で、大まかで粗雑な剥離にとどまり主要な刃部形成までにはいたっていない。

第12図-4 J-12a 地点出土の安山岩製の扁平打製石斧片で半分以上欠損していると考えられ確実な形態は知りえない。

第12図-5 安山岩の打製石斧片である。石斧の一部が剥落したものである。

第11図1・3・4~12、第12図2・5はJ-11a 地点出土である。

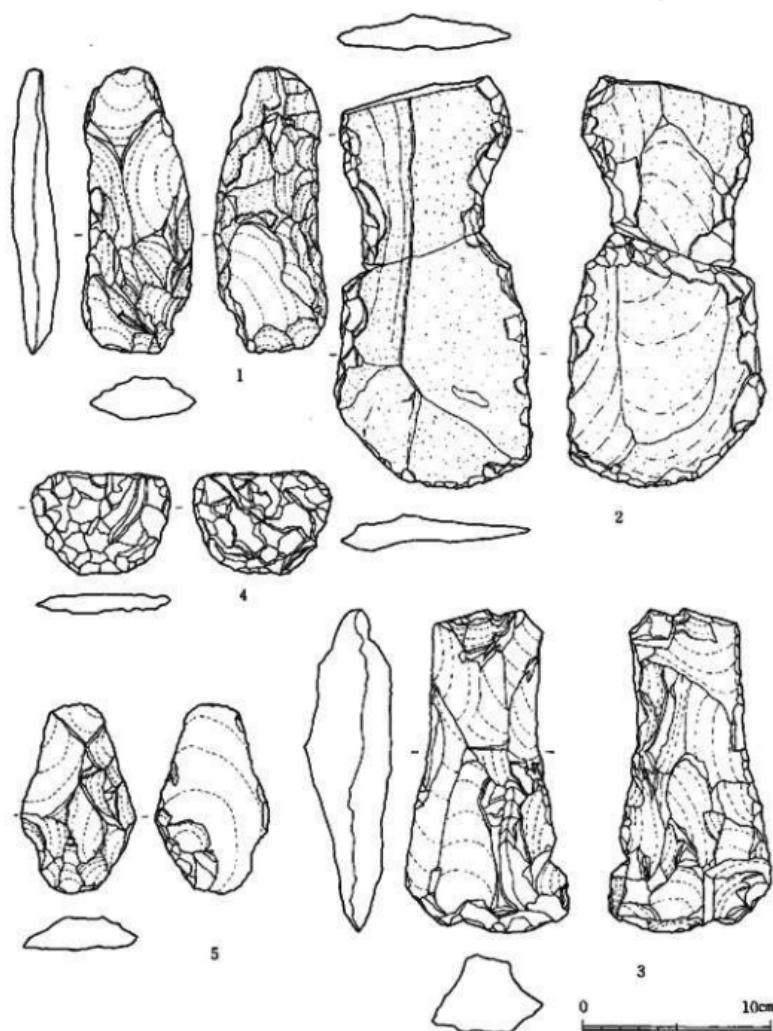
地点 石種 器種	J-11a		J-12a	J-10h	計		
	a b	サヌカイト	安山岩	a b	安山岩	a b	
つまみ形					1	1	
縦長剥片	8		1			9	
打製石斧			1	3		4	
石 錐	1					1	
刀 器	8	1				9	
石 杣	5					5	
削器・搔器	2	1				3	
剥 片	9					9	
碎 片	39		1			40	
Total	71	3	2	1	3	1	81

第1表 J-10h・11a・12a 地点出土石器一覧表



第10図 J-10h・11a・12a 地点出土石器実測図-1 (縮尺3/5)

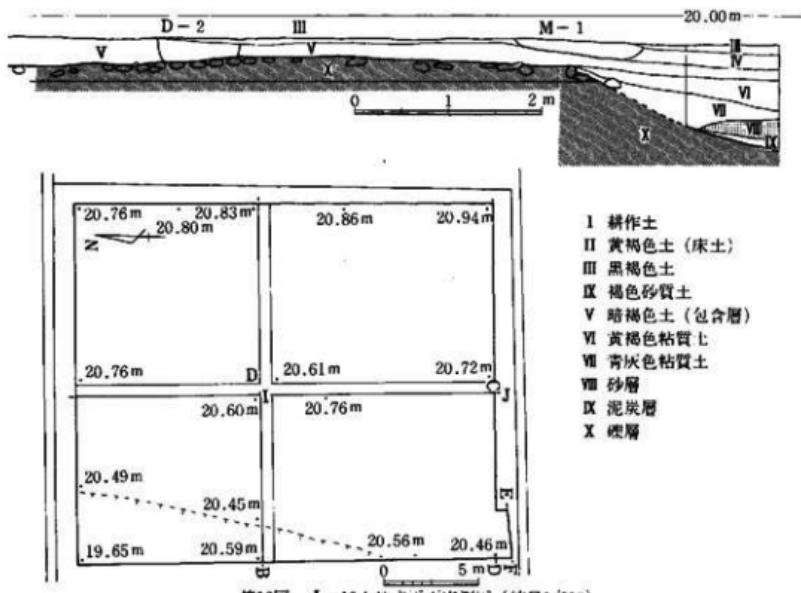
0 5 cm



第11図 J-10b・11a・12a 地点出土石器実測図-2 (縮尺1/3)

### 第3章 J-10 i 地点の調査

J-10 i 地点は第2図に示したようにJ-10 h地点とJ-11 a地点の間で、四箇遺跡A地点の南側に隣接している。耕作土のすぐ下に基盤を構成する硬層があり、微高地の上に位置している。従って、四箇遺跡A地点とは同一の遺跡であり、A地点がJ-10 i 地点まで広がっていると考えたほうがわかりやすい。宅地化される23×20mの範囲を4区に分けて全面発掘した。J-10 i 地点の北側（四箇遺跡A地点の都市計画道路部分）の調査では旧地表のすぐ下に硬層があり、遺構や出土遺物が少なかったため、当初短期間の調査で終了すると考えていたが、予想以上に遺構や出土遺物が豊富で予定より大幅に遅れることになった。最近まで平坦な水田面の下になっていたところであるが、遺構や出土遺物の残存状態は近接した地点でも著しい相異があり、ここでも低地遺跡調査のむずかしさを痛感させられた。



第12図 J-10 i 地点平面実測図（縮尺1/200）

## 1 土層と遺物出土状態（第13～15図、付図-2、PL. 3・6）

各区の基盤疊層上面の標高は第13図の平面図の中に記入したが、2区の南東隅が最も高く、20.94mを測る。これより北へは徐々に低くなり1区の北東隅は21.76mで比高差は18cmである。1区の南西隅では22cm低くなり、4区の南西隅は20.46mで48cm低くなっている。中央部の東西方向をみると、西側の微高地の端部は東より38cm低くなっている。北壁でみると1区の北東隅より西側の微高地の端部は27cm低い。また中央の南北方向をみると両端が20.72mに対し中央部は12cm低くなっている。西側の微高地上面の標高はほとんどかわらない。全体をみると南東隅より西側の凹地に向って傾斜しており、中央部にあさい凹地のあることがわかる。西側の微高地の端部と凹地との比高差は84～86cmで、縄文時代には池のように水をたたえていたと思われる。第12図の土層図をみると下層に泥炭層が形成されているが、その中心部は西側隣接地内にあり、今度の発掘地点からはずれている。

土層断面図は中央部の東西方向を第12図に、南北方向と南側の東西方向を付図-2にしめた。中央部の浅い凹地では弥生時代の包含層（VI層）があり住居址が残っているが、東側及び西側は削平され残っていない。付図-2のC-D断面でも弥生の包含層はカットされてない。1区南側では疊層の上に縄文時代の包含層（V層）が認められるが、15～20cmと浅く上部は耕作土で削平されている。G-H断面では20～30cmの包含層が残っているが、10cm前後と浅いところもあり、旧地表は平坦でなく凸凹のあったことをしめしている。付図-2の出土遺物が少なく空白になった部分は疊層が高くなつたところで、包含層が削平されている。J-10 i 地点の中央部から3区にピットが多いのはこの地点がわずかに低くなつておらず、遺構・遺物が比較的残りやすかったためであろう。2区ではPit-18周辺の浅い凹地状の地点に出土遺物が多い。また、4区南西隅のPit-19の遺物の残存状態が良好であったのも旧地表に沿つて低くなつたところに深いピットを掘り込んでいるため削平がここまで及んでいないことをしめしている。

付図-2は遺物の最も多かった4区の出土状態をしめたものである。G-H及びI-J断面でわかるように包含層が20～30cmと他より比較的深かったため予想以上に遺物が多かった。○で囲んだ数字は%の実測図の番号であるが、出土遺物は特に⑩に集中しており西側へ広がっている。P-1050の北及び南側の空白部分は疊層が高くなり、包含層がカットされている。出土遺物のうち大半は縄文時代後期の土器と石器であるが、それ以外に縄文時代前期・中期・後期中葉・晩期・弥生時代前期～後期の土器が含まれている。J-10 i 地点には縄文後期と弥生中期以外の包含層や遺構は検出されていない。更にこれらの土器はいずれも小片で、まわりが磨滅したものが多く、縄文後期の包含層に流れ込み混在したものである。石器にもローリングを受けたものがある。J-10 i 地点は平野の中の低地に面した微高地で、たびたび洪水などの被害を受けることがあったと考えられる。四箇遺跡A地点の縄文後期の泥炭層は縄文晩期の

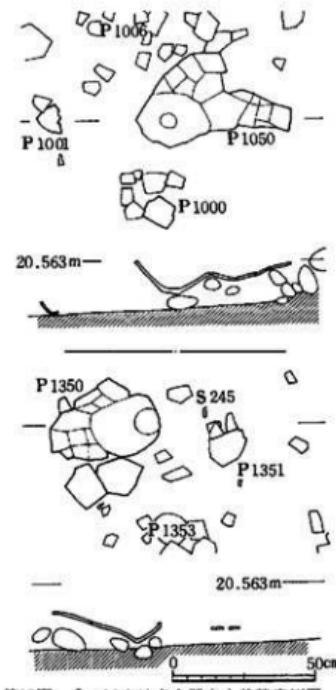
## 1 土層と遺物出土状態

土器を含む土砂で埋没し、その上に弥生中期の遺構面がある。51年度調査したJ-10a・f地点の旧河川に面した弥生中期と古墳時代の杭列遺構は土砂の流失により被害を受けたことが認められている。從って縄文後期の出土遺物も多くは、他の時期の遺物とともに本来の位置から動いていると考えなければならない。4区の出土遺物は⑩の東側に密で、西へ広がっており、旧地表は南東隅から西へ傾斜していることと考え合わせると、旧地表に沿って南東から西へ流れ込み、散乱したことがうかがわれる。

しかし、多くの出土土器の中には大型の破片でもとの位置からあまり動いていないと思われるようなものがある。⑨のP-1050は口縁部から底部までつゝく粗製深鉢形土器である。第13図のような出土状態をしめす。口縁部を北にし、口縁から底部への傾斜角度は73度である。埋立かとも考えられるが穿孔はない。下に面した全体の3/4が残り上半分を欠く(第35図-2 PL. 7-2)。⑩のP-1350(第13図)は粗製の深鉢形土器(第34図-2 PL. 8-1)でP-1050同様口縁部を北向きにしている。下に面した全形の3/4が残っている。掘り方は検出されず埋立かどうかは不明。傾斜角度は64度である。

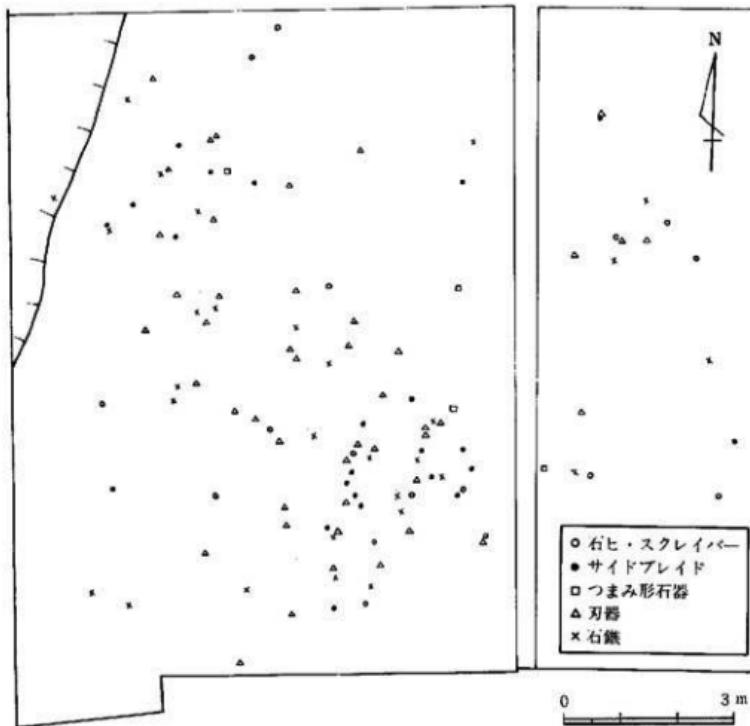
⑪の点線で囲んだ約1mの範囲内には精製土器の破片が散乱しており、この中のP-316、P-911~P-913は同一個体である。これを接合し復元すると第28図-5 PL. 14-5のような精製無文の深鉢形土器となり、全形の3/4が残っていた。

このほかにも⑫のP-827・836・906や⑬のP-872・873のような大きな破片があり、残り具合も良好である。小形の土器では⑭のP-1001、⑮のP-1382のように完形に近いものが出土している(第30図-3・4 PL. 12-4・5)。以上のように出土遺物が多く、中にはあまり動いていないと考えられるものも含まれていることから、すぐ近くに遺構があったことがうかがわれる。J-10i地点の縄文後期の遺構は十姫とピットしか残っていないが、主要な遺構はP-1050周辺のように微高地の高くなっていたところに存在していたと考えられる。低地跡跡のため高い部分の遺構は削平されて残存しない。



第13図 J-10i 地点土器出土状態実測図  
(縮尺1/20)(上P-1050, 下P-1350)

石器の出土状態は付図-2に土器といっしょにしめしたが、このうち出土量の多い器種を抽出して出土位置を図示したのが第14図である。第14図にしめした石器は5器種だけで全体の40%を占め、石器も4区に集中していることがわかる。中でも刃器は全出土量の50%が4区から出土している。出土地点をみると南東側が特に多く、北西方向へ帯状の広がりをみせる。これは土器の出土状態と対応しており、4区の南東方向から北西方向の凹地に向っての流れ込みがあったことをしめすものであろう。北西隅の微高地の端部から凹地へ落ち込んだ石錐がみられるのはこれを裏付けるもので、縄文時代以降の擾乱によって凹地へ流されたものであろう。一方、5器種以外の石器を含めると4区から出土した石器は全体の50%を占める。



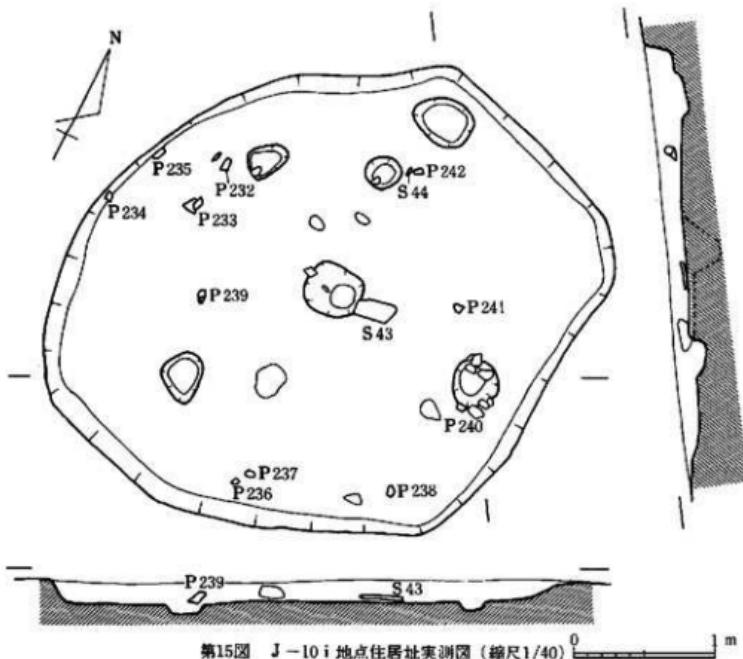
第14図 J-10 i 地点石器出土状態実測図（縮尺1/100）

## 2 遺構

J-10 i 地点から発掘された遺構は住居址、土塁、溝のほかピットがある。

### (1) 住居址 (第15図, PL・4-1)

J-10 i 地点のほぼ中央部に位置している。住居址は不整な円形プランで、南北は 3.6m、東西が 3.5m を測る。床面は平坦で、床面より 15cm の高さまで残っている。付図-1 に図示した住居址内の Pit-107・117 は住居址の下から発見されたピットであるが、出土遺物がなく時期は不明である。住居址の中には 6 個のピットがある。中央部に 38×34×23cm の隅丸方形のピットがあり、南側のピットの間隔は 2.10m、東側では 1.90m とはほぼ同じ距離にある。西北側のピット間は短かく北辺で 1.40m、西辺で 1.70m と短かい。この 4 つが住居址に付属する柱穴と考えることができよう。住居址に伴う上器は甕の口縁部・器台で第48図-2・6 に図示した。



第15図 J-10 i 地点住居址実測図 (縮尺1/40) 0 1 m

石器では中央のピットからノミ形石器（第72図-5 PL. 27-2）、中央ピットの横から砥石（第73図-8 PL. 28-6）が出土している。

### (2) 土 塚 (第16図, PL. 4-2・3)

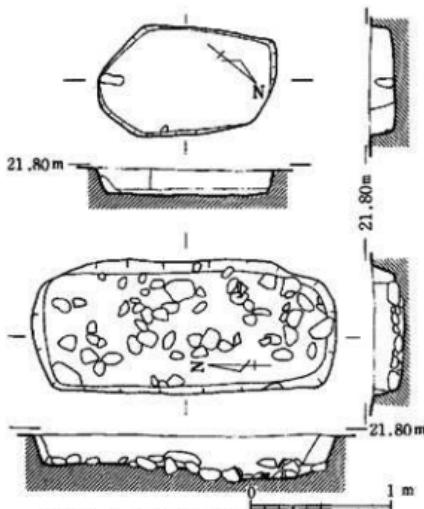
土塚と思われる遺構が2つある。3区のD-1はほぼ長方形を呈するが、一方がやや広がっている。1.26×0.75mで、幅の最も広いところでは80cmを測る。床面は平坦で、深さは18cmである。長軸の壁に沿って円環が1個みられるだけで、出土遺物はなく時期不明であるが、D-1の下に弥生時代のPit-112があるので、弥生時代よりも新しい時期の土塚である。D-2は長さ2.17m、幅0.94mの隅丸長方形を呈する。疊層に掘り込まれており、床面は平坦でなく、中央から北側は深さ20cmと浅いのに対し南側は30cmと深い。弥生土器は土塚上面に小片があるだけで土塚内の土器は縄文土器に限られており、縄文時代の土塚と考えられるものである。縄文土器はいずれも粗製土器で、第33-35図のような粗製深鉢の胸部片と底部がある。出土位置は北側に少なく、南側に多い。石器では楔形石器（第68図-7）とサイドブレイド（第68図-13）、磨製石器（第73図-6）がある。長軸は北向きである。

### (3) 溝

(第17図、付図-1, PL. 5)

2つの溝が検出された。M-1は3・4区の西端に沿ってつづいており、北側の端は丸く終わっている。溝の幅は北側で1.2m、中央部がやや広くなり1.6m、4区の中央部で1.0mを測る。4区の中央部で二つに分かれしており、4区の南西隅ではM-2を切っている。従って弥生時代よりももっと新しい時期の溝ということができる。4区南断面では土師の小片などを含むが溝が浅く出土遺物が乏しいため時期は不明である。溝の深さは中央部で20cm、両端で16~18cmである。

4区の南西隅に認められた溝(M



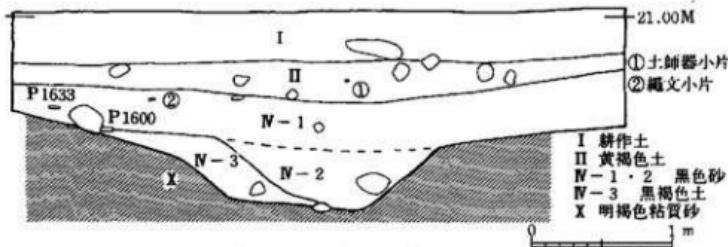
第16図 J-10 i 地点土塚実測図 (縮尺1/40)

～2)は南東から北西方向へのびているが、長さは3.5mしか発掘できなかった。昨年度調査したJ-10b地点と第2章で記したJ-10h地点の微高地の端部をむすぶ線が微高地と低地の境であるが、これには平行するようついている。溝の横断面図は第17図にしめしたが、溝の上端幅は1.9m、下端の幅は0.95mを測り、逆台形状を呈する。溝の深さは40cmで、溝中央の底面の標高は19.62mである。溝の中からは広口壺・甕・器台などが出土しており、これを第47図-5、第48図-1・5・8・10に図示した。石器では磨製石剣(第72図-6)が出土している。

#### (4) ピット(第18図、付図1、PL. 3・7-1)

ピットは大小合わせて157ある。最も大きなものはPit-14の250×230×12cmで、最も小さいのはPit-119である。深さは20~30cm前後のものが多く、最も深いのはPit-95の55cm、浅いものにはPit-126やPit-131のように5cm以下のものがある。形状は円と梢円形のものが大半をしめるが、そのほかに不整なものが少数ある。付図-1ではピットを縄文時代、弥生時代、出土遺物があるが時期が決められないもの、更に出土遺物がなく時期不明なもの4つに分類した。縄文時代のPitと考えられるものが27と最も多く、弥生時代のピットは15である。他に縄文土器や弥生土器が出土するが、いずれも磨滅した小片で流れ込んだと思われるものが31ある。しかし伴出遺物がなく時期不明なものが84で大部分をしめる。

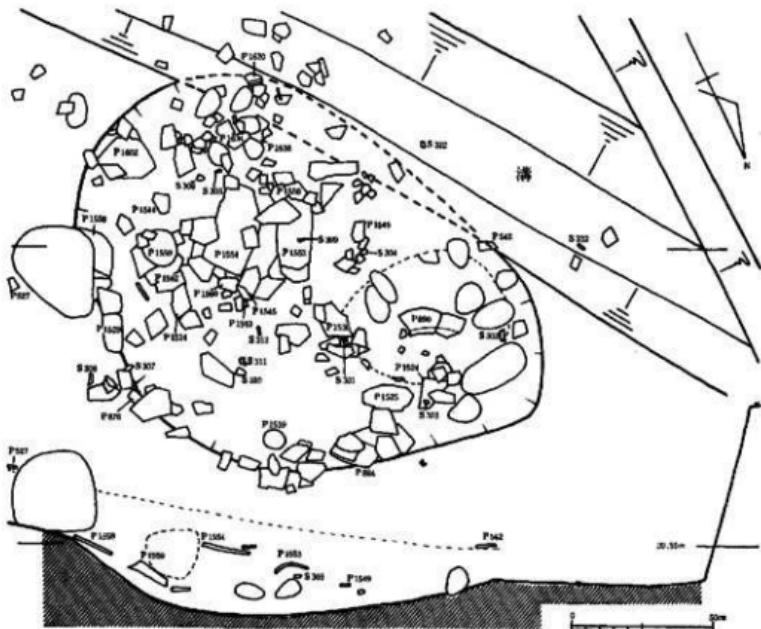
縄文時代のピットはPit-14・19を除けば小ピットである。グリッド別にみると1・2・4区に少なく、3区に集中している。Pit-14は特に大きく不整な円形を呈する。付図-2のPit-145・149・150は縄文土器を出土するピットでPit-14と関連すると考えれば、Pit-14が浅皿状の断面を呈するところから堅穴状の構造かも知れない。ピット内の底面には炭化物も認められた。しかし、上面を削平され全形を知り得ないのでピットとして取扱った。ピット内のPit-142・143・146~148はPit-14よりも新しいものである。Pit-14からは縄文時代の精製



第17図 J-10i 地点溝断面実測図(縮尺1/40)

土器7、粗製口縁部18のはか胸部・底部があり、出土量が多い。このうち8点を第42図にしました。第47図-1もPit-14に混入した弥生土器である。石器は刃器（第69図-7）、削器（第73図-2）、磨製石斧（第73図-7）の3点が出土している。

Pit-19は4区の南西隅にあり、西側は溝（M-2）でカットされている。1.25×1.80mの楕円形で、深さ30cmである。第18図の断面をみると弥生土器片は縄文土器より上層にあり、小片が数点認められる程度で、ピット内の遺物は縄文時代に限られている。精製土器ではP-884とP-890のように接合でき全形の%を残すものがある。粗製土器にも大きな破片が含まれており、ピット内の残存状態は良好である。ピットの床面には炭が多く、年代測定の試料とした。床面の土を水洗してみると炭化物のほか獸骨も含まれていた。南及び西側は今度発掘できず周囲のピットとの関係が明らかではないが、遭構の可能性も考えられる。Pit-19出土の土器は第43-45図にしました。石器ではつまみ形石器（第68図10・11 PL. 25-14）、残核（第68図-16）、刃器（第69図9・第70図9 PL. 25-16）、打製石斧（第70図10）、縦長剣片（第71図-1・7・8 PL. 28-11）が出土している。



第18図 J-10 i 地点 Pit-19実測図（縮尺1/20）

弥生時代のビットは1・3区の北側に多いが、Pit-3・11のように縄文時代には池状の凹地となっていた上に掘り込まれており、凹地は弥生時代には埋って平坦になっていたことがうかがわれる。Pit-16・20・30・95は長楕円形の大きなビットで、形はD-1の土壙に類似したものがあり、土壙の可能性もある。出土遺物がなく時期が決められないビットの中にはPit-107・108のように住居址の下にあり、弥生時代の住居址より古い時期のものと、Pit-92・135のようにM-1より新しい時期のものが含まれている。Pit-14に類似したものに3区のPit-18周辺がある。Pit-7・17・18・40~42・159付近は浅皿状に凹んでおり、堅穴状の遺構かと思われるが、Pit-17以外に縄文時代のビットと断定できるものが多く、明確な掘り込みも認められなかったので個別のビットとして取扱った。

## 第4章 J-10 i 地点の出土遺物

### 1 包含層の土器

#### (1) 縄文時代後期(後半)

包含層の出土遺物のうち大半を占める縄文時代後期後半の土器は精製土器と粗製土器に大別され、精製土器には鉢形土器と浅鉢形土器があり、粗製土器には深鉢形土器と浅鉢形土器がある。その他精製土器には小形のものや注口土器が出土している。

#### 精製鉢形土器

磨溝縄文土器(第19~22図 PL. 9・10) 第19・20図は磨溝縄文土器の口縁部、第21・22図に胴部を図示した。口縁部には波状口縁を呈するもの(第19図、第20図-1)と平縁のもの(第20図-2・3)がある。山形口縁のものは頂部に押点を施すのが特徴で、山形頂部の下には第19図-4のように粘土をはりつけたものもある。器形は頸部から口縁にかけて大きく外反し、口縁の端部は内側に粘土をはりつけて肥厚させ、文様帶をつくる。口縁端部の内面には第20図-3のようにあさい沈線文のめぐるものがあるが、数は少ない。第19図、第20図-1のように内面の接合部は丸味をもつものが多い。口縁部の肩には第19図-1、第20図のように稜線をもつものと第19図-3・4のように退化して丸味をもつものがある。

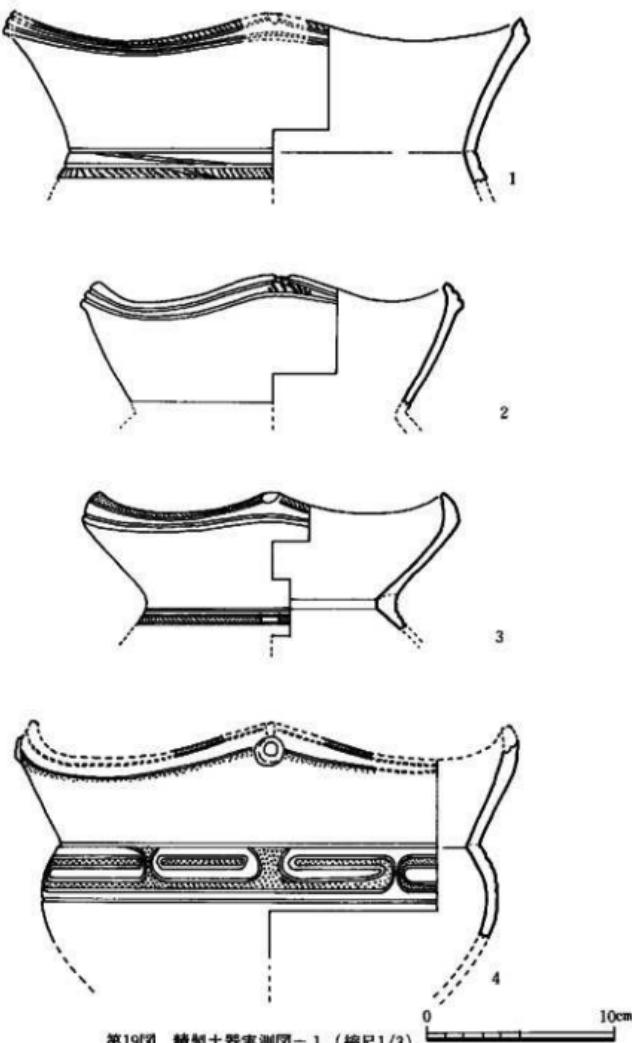
胴部の形態には第19図-4、第20図-3、第21図-1・2のように球形胴部に近いものと第21図-3~5のように胴部最大径が「く」字形に屈曲するものがある。胴部が屈曲するものは外側に粘土をはりつけて肥厚させ稜をつくっている。

文様帶は口縁端部と胴部上半に二分されている。口縁部の文様は2本の沈線文をめぐらし、口唇部から上の沈線文の間と下の沈線文と肩の稜線の間に縄文が残り、沈線文の間は磨消されているものが多い。第19図-4、第20図-1・2がこの例で、口唇部から上の沈線文の間にだけ

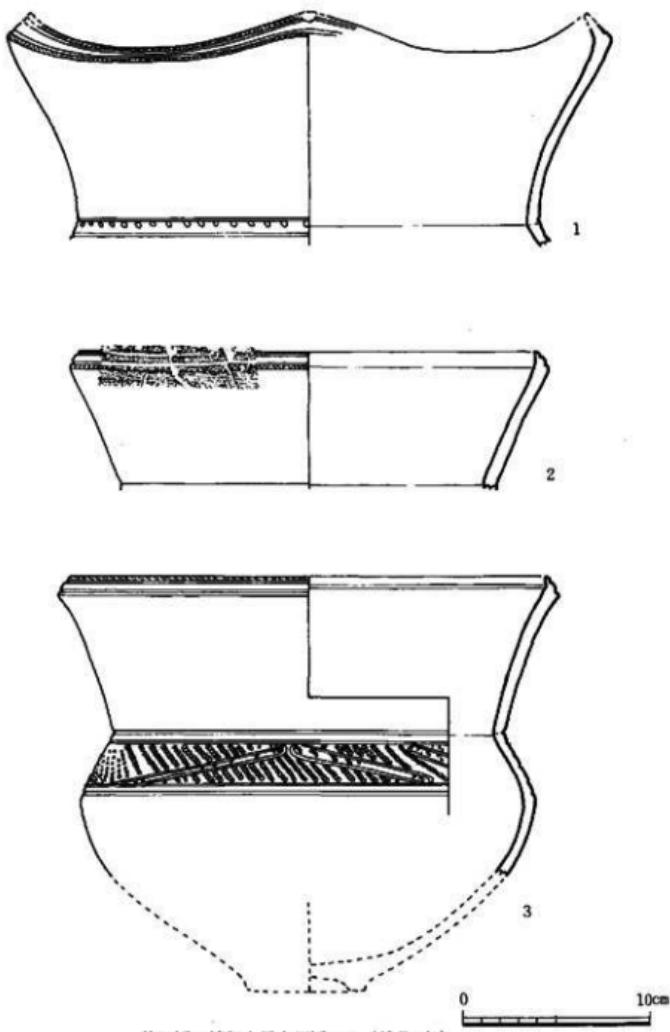
縄文が残るものとして第19図-1・3、第20図-3がある。第19図-2は山形口縁の頂部にだけ縄文が残る例である。第19図-3の頸部は接合部の内面を著しく肥厚させ、平坦面をつくりだしている。

胴部の文様帶は頸部の沈線文と胴部上半に位置する胴部最大径の上をめぐる沈線文によって区画されている。第20図-3は頸部と胴部に2本の沈線文をめぐらし二段撚りの縄文を施し整然とした文様を構成している。縄文の間には2本の沈線を斜め方向に左右対称に配し、両端を丸く連続させて一つの文様とし、全体を4区分している。第19図-4は頸部と胴部の沈線文の間に団のように山形頂部の左に沈線文を長椭円形にめぐらせ中に縄文を残す。その外側を沈線文で囲み、その間は研磨されている。これを頸部の沈線文の下から連続した沈線で左右を囲み、3つを単位とする文様を構成している。胴部の張りは弱く丸味をもつが、第20図-3のように球形胴部ではない。第19図-3は頸部に3本の沈線文がめぐり、山形頂部の部分で上下の沈線を区画し、沈線文の間に縄文が残る。第19図-1には2本の沈線があり、沈線文の下に縄文がある。第20図-1は頸部の2本の沈線の間に刺突文がみられる。第21図-1は頸部に2本、胴部最大径の上に1本の沈線をめぐらして文様帶をつくる。その間は左側に2本の沈線を平行させ中央で丸く連続させる。右側は下の沈線文に平行した沈線を折り返さず、そのまゝ上の沈線につないでいるため左右対称の文様構成となっていない。胴部が強くはり出し球形胴部を呈する。第21図-2は胴部上半に5本の沈線文をめぐらしており、まん中の沈線をエ字文で区切り上下に分けている。上から2本目の沈線はエ字文の右から上へあがって上の沈線文につながり文様の亂れがみられる。第21図-3は頸部に2本、胴部最大径の上に2本の沈線文をめぐらしその間に更に2本の沈線を入れている。第21図-4は胴部上半に4本、5は胴部最大径の上に2本の沈線文がめぐらしている。3・4・5は胴部最大径の部分が強く張り出し屈曲する。2は上の2本の間とエ字文の下の間が磨消され、3は上と中と下と一つおきに磨消されている。4はまん中の沈線文の間が磨消され、下から2本目の沈線は中央で半円状の刺突でおさえられ、下から細沈線が斜め方向にのびている。

器面はいずれも横方向に研磨されている。胎土は精製されたものが多いが、中には3~5mm前後の砂粒を含むものがある。焼成は良好なものが多い。第19図1~3の胎土は精製され焼成良好で、1・2は黒褐色、3は赤褐色を呈する。4は2~3mmの砂粒を含み焼成は普通で暗褐色を呈する。第20図-1は大形の土器のわりに器壁はうすい。胎土にはところどころに3~5mm前後の砂粒を含む。暗褐色で焼成は普通。2は暗褐色を呈し焼成良好。3は頸部から口縁部のつくりに対して胴部の器壁はうすいが、暗褐色の焼成良好な土器で、堅緻である。胎土は精製され1mm以下の砂粒と金雲母片を含む。第21図1~5も2mm以下の砂粒と雲母片を含むが焼成は良好である。1・2は暗褐色、3は赤褐色、4・5は黄褐色~灰褐色を呈する。3~5は胴部最大径の部分に粘土をはりつけて屈曲させるため、器壁が厚くなっている。胎土に砂粒と

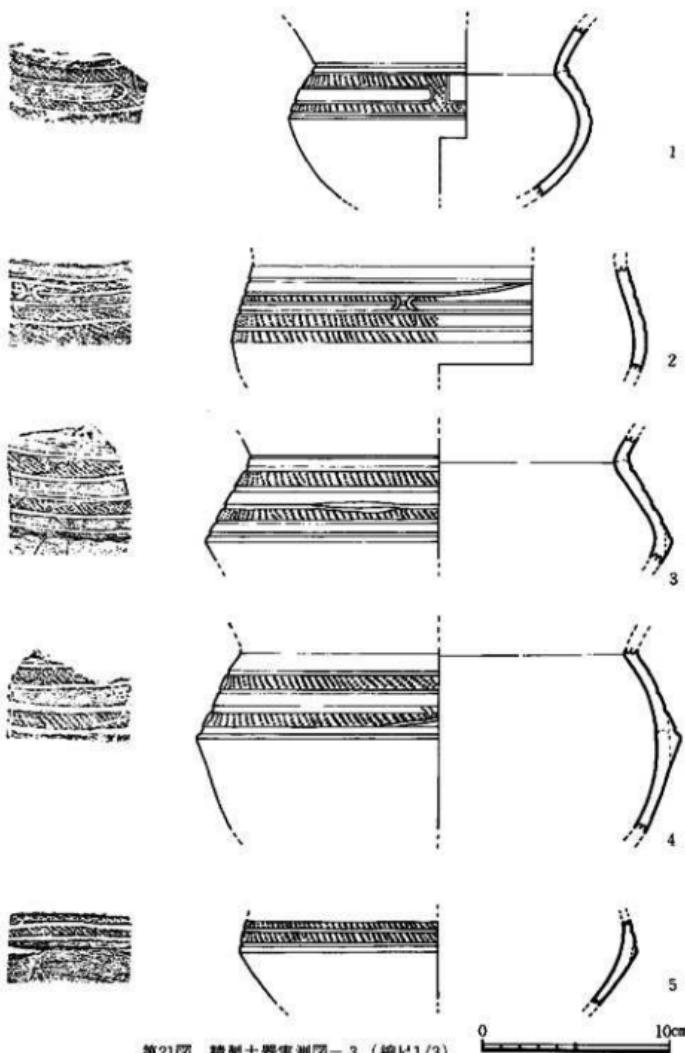


第19図 精製土器実測図-1 (縮尺1/3)

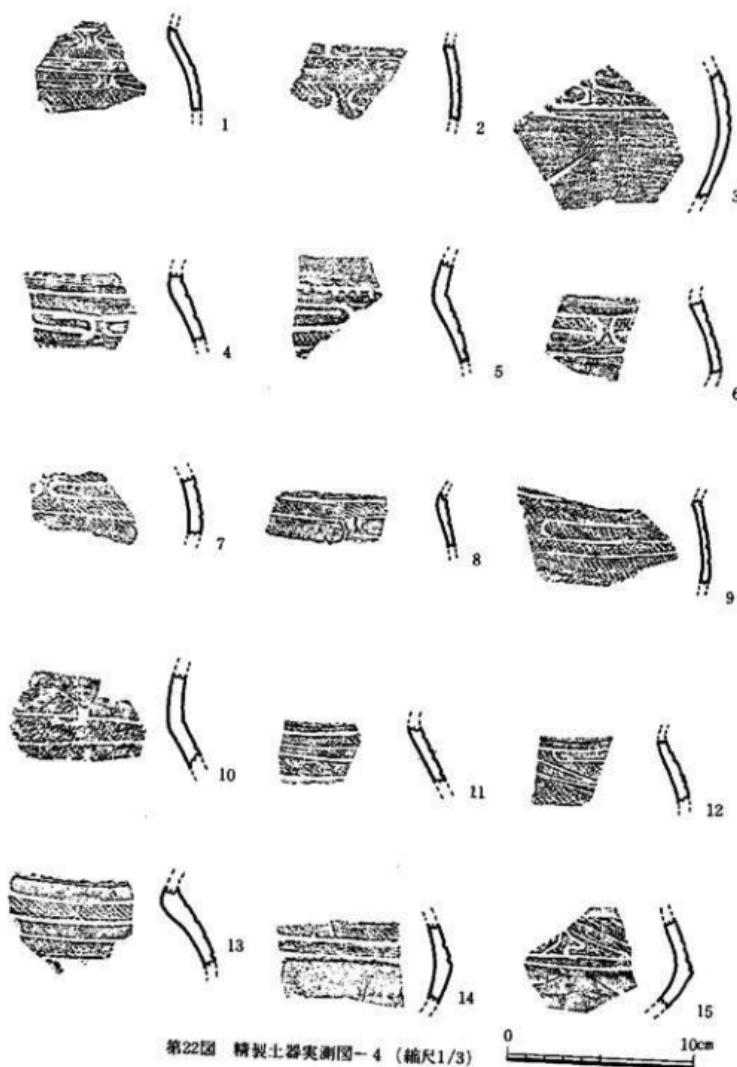


第20図 精製土器実測図-2 (縮尺1/3)

## 1 包含層の土器



第21図 精製土器実測図-3 (縮尺1/3)



第22図 精製土器実測図-4 (縮尺1/3)

ともに金雲母片を含むのは全体の特徴である。器面は内外ともよく研磨されている。

第22図は磨消繩文土器の胴部片である。全形のわかる第19図～第21図の器形と対比してみると、第19図-4や第21図-2のように胴部は丸味をもつが強く張り出さないものが多い。第22図-14・15は胴部最大径の部分に稜をもち、頸部へ向って屈曲する器形のもので第21図-3～5と同形の土器である。

第22図-1は頸部と胴部に各3本の細沈線をめぐらし、その間に1本の沈線を入れて上下に区分している。3本の沈線の上にエ字文を入れ、エ字の間に短沈線がある。エ字文は上と下ではずれており、沈線文も平行しておらず文様は雜である。中央の沈線と下の3本の沈線文の間が磨消されている。2は平行した5本の細沈線をエ字文を配したものである。3は胴部最大径をめぐる沈線文の上に2本の沈線を折り返したものであるが、2本の沈線は左右対称とはならず、上下にずれている。4・5は頸部をめぐる沈線の上に刺突文のみられるものである。4は頸部の2本の沈線のうち上の沈線に刺突がみられ、胴部の2本の沈線の上にはエ字文がある。5は頸部の沈線の上から刺突し、胴部沈線との間の3本の沈線をエ字文で区画したものであろう。4・5の頸部に刺突文を施す文様は第20図-1に類似している。6は文様帶の中央部の3本沈線をエ字文で区分している。6は他よりも胴部の張りが強く、第21図-1のような器形になるのであろう。7は胴部最大径をめぐる沈線文の上に2本の沈線を左右対称に折り返したもので、8は頸部をめぐる沈線文の下に7と同様に2本の沈線を折り返している。9は頸部と胴部をめぐる沈線文の間に2本の沈線を折り返したものである。7と同様に胴部の沈線文の下にも繩文が施されている。10は頸部に2本の沈線文がめぐらしている。10の繩文は、他と異なりあらくヶバだっており、乱れている。11は4本の沈線をめぐらしたものである。12は頸部をめぐる2本の沈線文の下に平行する沈線があり、頸部をめぐる下の沈線につながっている。更に頸部と胴部をめぐる文様帶の中に斜めに2本の平行する沈線が配置され、その間にもう1本の沈線がつながっている。11とともに胴部の張り出しの強いものであるが、文様構成は第20図-3に類似しており、球形胴部に近いものであろう。沈線もシャープで、繩文も整然としている。13は5本の沈線をめぐらしているが、沈線は平行して乱れていない。頸部の内面の接合部が著しく肥厚しているが丸くなっている。14は胴部最大径の上をめぐる2本の沈線文の上に縦方向の短沈線が配されている。15は胴部最大径の上をめぐる2本の沈線文の上に文様帶を斜めに区切る2本の平行沈線があり、その左には曲線文を描く。文様構成は12に類似しているが、器形は胴部に稜をもつもので異なる。

胎土は精選され2mm以下の砂粒と雲母片を含むものが多い。焼成はいずれも良好で、色調は黒褐色・黄褐色を呈するものが多い。11は赤褐色を呈する。

これらの胴部の中でも1・2・5・6・8・9のように器壁のうすいものが多いことが注目される。器面は内外ともていねいに研磨されている。

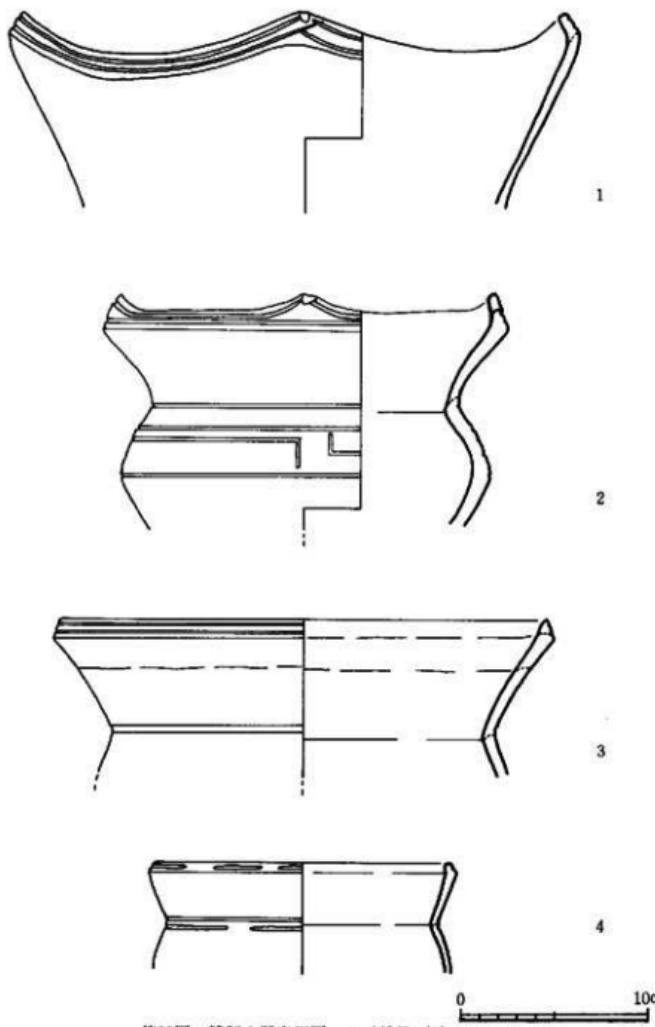
沈線文・刺突文土器（第23～25図 P.L. 11） 口縁部および胴部の文様帶の縦文を磨消して繩文がみられないものあるいは縦文を省略して施文していない上器がある。これらの七器のうち第23図には口縁部を、第24・25図に胴部片を図示した。

第23図-1・2は山形口縁をなすもの、3・4は平縁の土器である。1は外反した口縁部の接合部から内向して山形の波状口縁形を呈する。口縁端部の稜線は鈍く、内面は丸味をもつ。口唇部もシャープでなく丸くおさめている。山形頂部に押点があるが、口縁部の文様は乱れており、山形の頂部を中心として左右対称の文様を構成していない。口縁部には2本の沈線文をめぐらしているが、右から山形の頂部に向って沈線文を施したあと、左から山形頂部へ向って沈線文を入れ、下の沈線は頂部の下で終らず、右方向の口唇部まで及んでおり、右側の沈線文とクロスしている。沈線はあさく、雑である。胎土は精選され、2mm以下の砂粒と金雲母片を含むが焼成は良好で、器壁はうすいが明褐色を呈する堅緻な土器である。

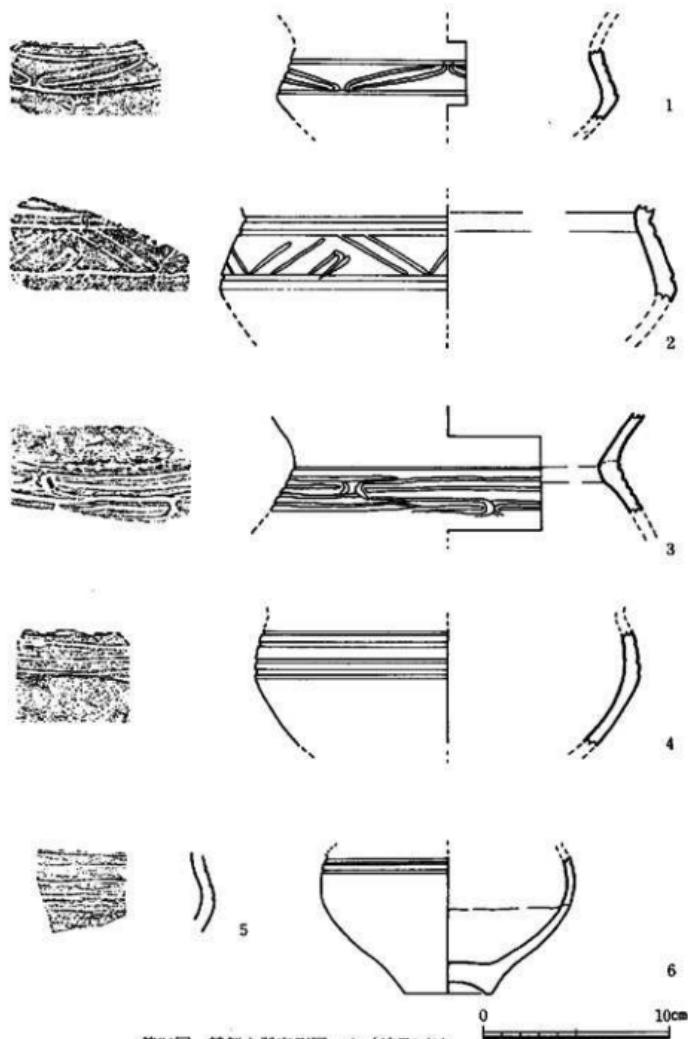
2は口唇部がやや丸味をもち口縁部の稜もシャープでなく内面は丸くなってしまっており、退化した形態をしめす。実測図にしめしたように波状口縁を呈せず、山形口縁の頂部だけを高くしている。口縁部をめぐる2本の沈線文は山形頂部のところが口縁に平行して上にあがるのでなく、そのままついており、他とは異なっている。胴部の文様は頸部と胴部最大径の上に沈線文をめぐらし文様帶をつくっている。文様帶の中に1本の沈線を入れ、更にもう1本の沈線を山形頂部の両側で上と下の沈線につなぎ左右対称の文様を構成する。1同様沈線以外の文様はなく、縦文は施文されていない。胴部は強く張り出しあり、丸味をもつが、「く」字形に屈曲した器形に近い。明褐色を呈し焼成は普通。

3は平縁の精製鉢形土器で、肥厚した口縁肩の稜も鈍く、口唇部はやや丸くなる。口縁の内面には第20図2・3のような稜はみられず、退化した形態をしめす。口縁をめぐる2本の沈線と稜線との間にはわずかに縦文が残っている。しかし大部分は研磨され縦文が消されている。頸部に1本の沈線がめぐる。4は小形の土器で、平縁の口縁部にあさい沈線文をめぐらしているが、図のように連続していない。頸部をめぐる沈線は全周しているが、その下の沈線は全周していない。胎土は精選され、明褐色を呈する焼成良好な土器であるが、文様は簡略化されている。縦文はない。1～4の器面は内外ともよく研磨されている。

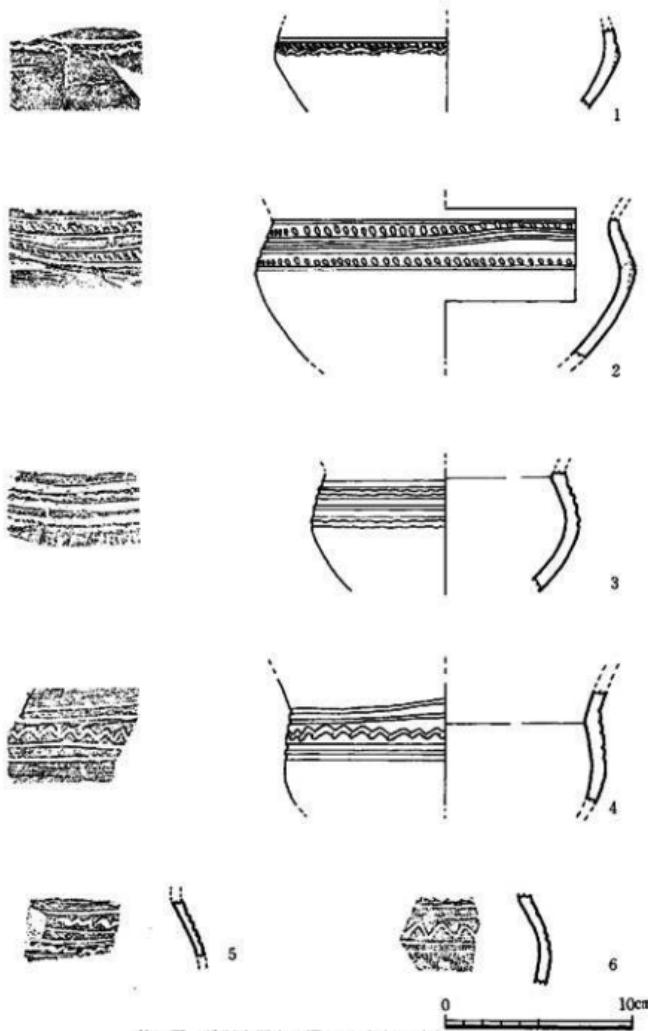
第24図は沈線文の胴部片である。第24図-1は頸部と胴部最大径の上に沈線文をめぐらし、その中に2本の沈線を斜めに組合せ、左右対称の文様を構成している。文様構成は第20図-3に似ているが縦文は施文されず、胴部は「く」字形に屈曲する器形をしめす。3は頸部に2本と胴部最大径の上に1本の沈線文をめぐらし、その間に2本の平行沈線を斜め方向にくり返し左右対称な文様を構成するものであろう。平行沈線の組合せと胴部沈線文とによってできた三角形の中にも2本の短沈線を平行に入れている。文様構成は第24図-1と類似している。胴部は強く張り出し、1と同様な器形を呈する。



第23図 精製土器実測図-5 (縮尺1/3)



第24図 精製土器実測図-6 (縮尺1/3)

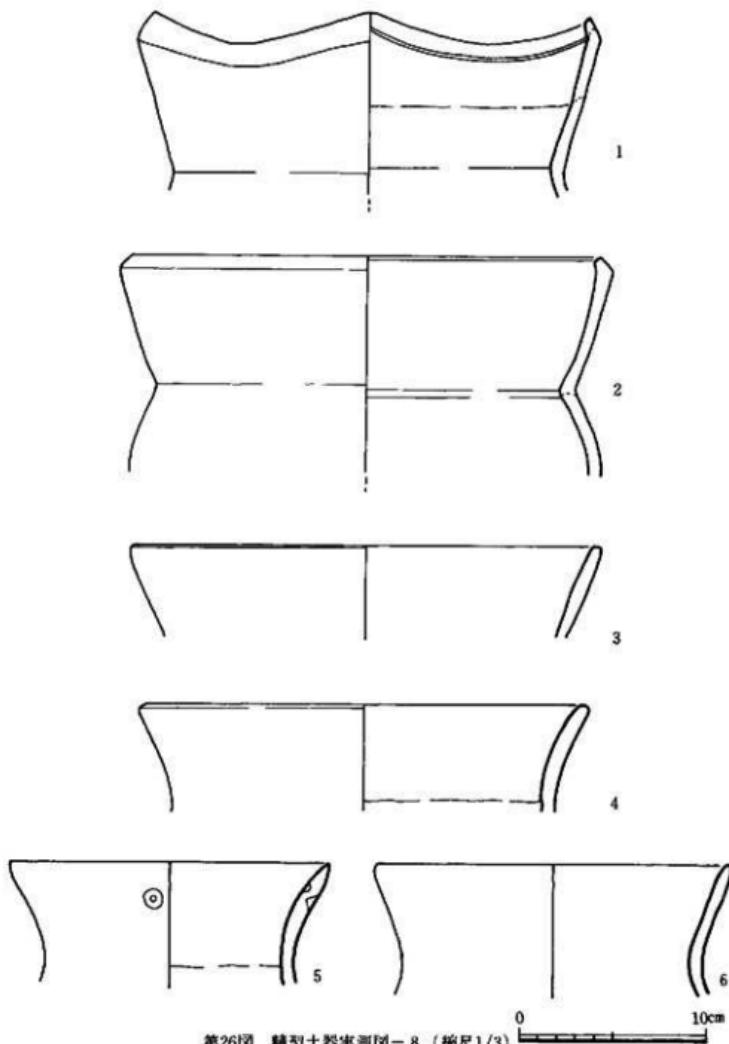


第25図 精製土器実測図-7 (縮尺1/3)

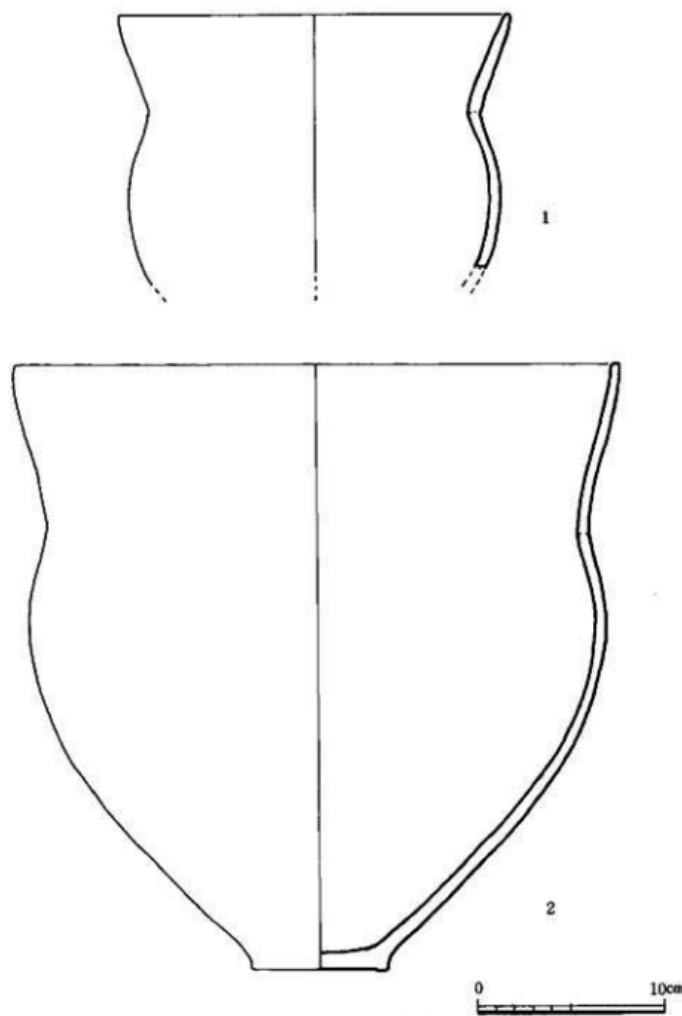
2は頸部に1本の沈線文をめぐらし、その下の文様帶に5本の沈線とx字文を組合せて文様を構成しているが、沈線の方向に乱れがあり、整然とした文様とはなっていない。頸部内面の接合部が肥厚して、第19図-3と同様な器形をしめす。4~6は胴部上半に4・5は4本、6は2本の沈線文をめぐらしたもので、他に文様はない。胴部の形態はいずれも球形に近い器形を呈する。6は胴部の器壁のうすいのに比べ底部が著しく厚くつくられている。器面は内外とも研磨されている。胎土に砂粒や雲母片を含むが焼成良好な土器である。

第25図には沈線文と曲線・刺突の組合せがみられる土器を示した。1は胴部最大径の上に弧状の沈線を施し、左から右へ連鎖することによって連続した一つの文様としている。その上に沈線文がめぐり、その間には纏文が施文されている。胴部は強く張り出して「く」字形に屈曲した器形をしめす。2は頸部から胴部最大径にかけての文様帶に太い沈線を3本めぐらしている。上から1と2の沈線の間と3本目の沈線の下には波状の連続した文様を入れている。小形の土器に対して浅い沈線と太い連続波状文が組合せているが、全体に器壁は厚い。胴部は第24図4~6同様球形に近い。3は頸部と胴部に2本づつ沈線文をめぐらし、その間には锯齒状の文様を横に描き、左から右へ連鎖して一つの波状文としている。5は4と同じで、頸部と胴部の2本の波線文の間に連鎖した波状文をつくり文様としている。4は6本の沈線文がめぐり、2段の連鎖した波状文がみられるが、波状文の線が太く明確でない。4~6の胴部の張りは弱く、第21図-2と同様な器形をしめす。6は頸部と胴部最大径の上に1本の沈線文をめぐらせて文様帶を区画し、その間に3本の沈線を入れ、更に上と下の沈線文の間には刺突文を施文している。刺突は竹管状の工具で、下から上へ刺突されている。胴部は球形に近い器形をしめす。いずれも器面の内外を研磨した焼成良好な土器である。

**無文土器 (第26・27図 P.L. 14)** 精製土器の中には内外ともいねいに研磨されているにもかかわらず、文様を施文しないものがある。第26図-1は山形口縁をなすもので、口唇部がや・丸味をもつが、口縁端部の特徴は第19図-1などと同じである。内面には第20図-3のようにあさい沈線が認められる。2は平縁のもので口縁部のつくりは第23図-3・4とかわりない。1・2とも胎土は精選され、2mm以下の砂粒や雲母片を含み焼成は良好である。ともに暗褐色を呈する。3~6および第27図-1・2の口縁部の形態は2のようになじませず、外反したままで終っている。3は外反した口縁部がわずかに肥厚している。平坦な口唇部には纏文が施文されている。4は口縁端部が丸味をもつものである。5の口縁端部は両側からうすく仕上げている。器面に径1cmのまるい穿孔のあとを残しているが、裏側まで貫通していない。6は4と同じく口縁端部が丸味をもつ。内外とも幅の広い横方向の研磨がみられる。第27図-1の口縁端部は第26図-3のように丸味をもたず、口唇部に平坦面をつくり、胴部は球形を呈する。2は完形に復元できるもので胴部から底部にかけては縱方向の研磨、胴部から上は横に研磨されている。無文の精製深鉢形土器は他より頸部がしまらず、幅広いものが多い。



第26図 精製土器実測図-8 (縮尺1/3)



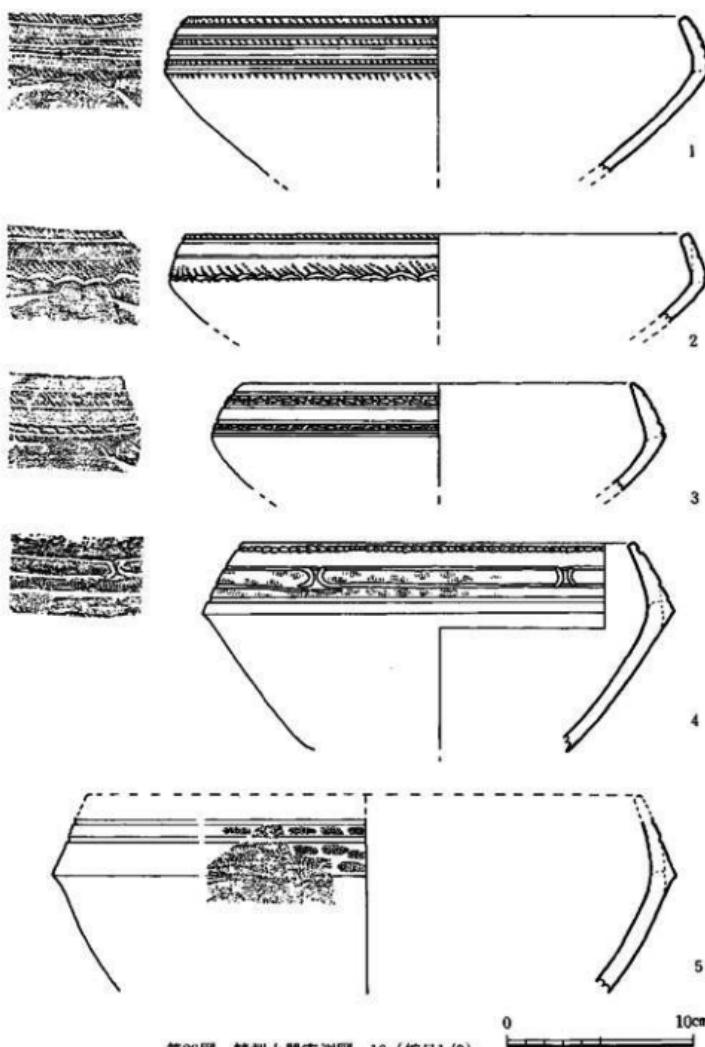
第27図 精製土器実測図-9 (縮尺1/3)

## 精製浅鉢形土器（第28・29図、P.L. 12）

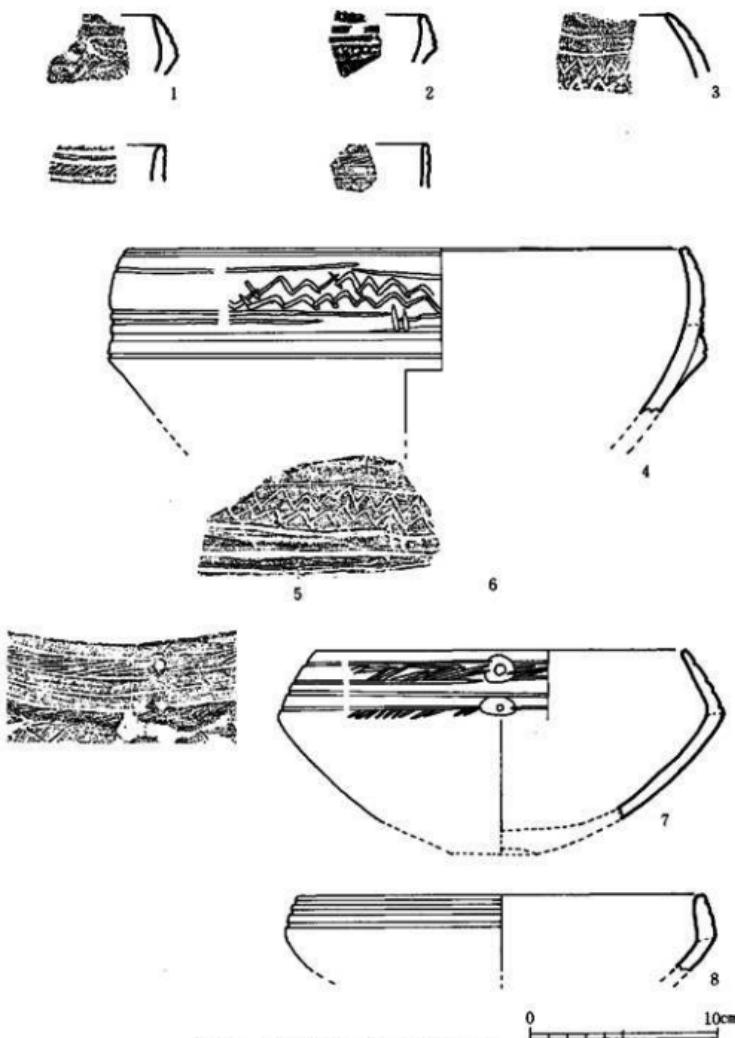
浅鉢形土器の器形は外反した胴部の上半に口縁部との接合部があり、肩部より内傾して口縁端部にいたるもので、口唇部と肩部の間に文様が施されている。最大径は肩部であり、肩部は丸味をもつものと粘土をはりつけて肥厚させ稜をつくるものがある。口縁端部は内側に平坦面をもつものと丸くなるものがある。粘土に砂粒を含むがいずれも焼成は良好である。

第28図-1は口唇部から口縁の肩部に繩文を施し、その間に5本の沈線文をめぐらし、上から1と2、3と4の沈線文間を研磨している。2は繩文を施したあと2本の沈線文をめぐらし肩部には弧状の沈線を左から右へ連鎖し一つの文様を構成している。施文の方法は第25図-1と同じである。沈線文の間を研磨している。3は繩文を施したあと4本の沈線文をめぐらし、上下2本の沈線文の間に刺突文がみられる。刺突文は第25図-1と同様に竹管状の工具で、左から右方向へ刺突している。1～3の口縁肩部はや、丸味をもつ。4は口唇部の下にヘナタリと思われる殻頂部を押圧し、左から右方向へ連鎖し口唇部をめぐる一つの文様を構成する。肩部との間にはヘナタリと思われる卷貝を押圧した擬似繩文が施されている。口唇から肩部までの文様帯に3本の沈線文をめぐらせ、2本の沈線文の間をエ字文で区切っている。5は口縁端部を欠くが2本の沈線文がめぐり、沈線文と肩部との間にヘナタリと思われる卷貝をころがした擬似繩文がみられ、沈線文の間は研磨されている。4・5の肩部には粘土をはりつけて肥厚させて稜をつくり出しており、鉢形上器の第21図-3～5と同じ手法である。

第29図-1は口縁端部に向って内凹する器形を呈し、肩部を粘土で肥厚させて文様帯と胴部下半を区画している。文様帯には合わせて6本の沈線文をめぐらしているが、中央部の3本の沈線文は図のように全周していない。中央部の沈線文の間には山形の文様を横へ2段に描き、左から右へ連鎖して連続した文様を構成する。施文法は第25図3～5と同じである。中央部に二つの刺突を並列して文様帯を区切っている。2は口唇部と肩の間に1本の沈線文をめぐらせ、沈線文の上下をわずかに肥厚させ中央を丸く凹ませて円文をつくるが、上の円文の右側にある2本の沈線文は円文の前に施されている。そのあと斜め方向のあさい短沈線を斜め方向に入れているがぞろいで整然としていない。更に上の円文の左側は短沈線の上下を沈線文で区切り羽状文に似た文様を構成する。下は円文の中位に沈線文をめぐらせて羽状文を区画している。中央の2本の沈線文の間は研磨している。3には3本の沈線文をめぐらせるだけで他に文様はない。2の肩部は屈曲して稜をつくるが、3は丸味をもつ。6は口縁端部で、ヘナタリと思われる擬似繩文を施した上に2本の沈線文をめぐらしている。沈線文の下には1と同様な曲線文を2段に施す。4は口唇部の下に1本の沈線文をめぐらせ、突起状のはりつけをもち、2本の沈線文をまるくつなぎ間に1本の沈線を入れる。沈線文の間には繩文が施されているが磨滅して明確でない。5は3本の沈線文をめぐらせ沈線と肩の間に刺突を施す。7・8は縦線羽文を施した小片で、外反した胴部から直立して口縁端部にいたる器となる鉢形土器であろう。



第28図 精製土器実測図-10 (縮尺1/3)

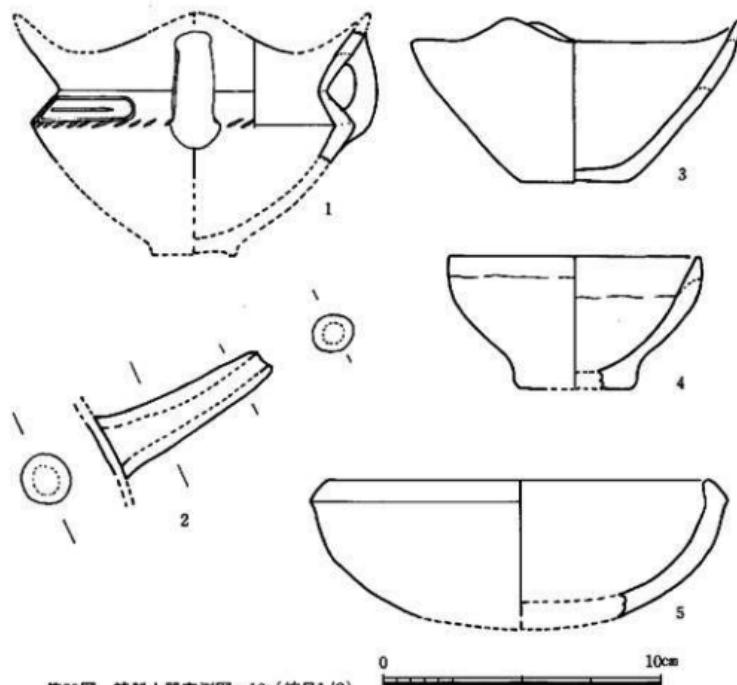


第29図 精製土器実測図-11 (縮尺1/3)

第28図-1～3、第29図-2・3・7・8の胎土は精選され1～2mmの砂粒と雲母を含み、焼成は良好である。器面はていねいに研磨されている。第28図-4・5、第29図-1は胎土に3～5mm前後の砂粒と雲母を含む。焼成は普通。28図-3～5、29図-1・2の器面には炭化物が付着している。図示していない中には文様帶に3本の沈線文をめぐらすもの(P-1549)、第43図-8・9のように文様を施さないもの(P-876)がある。

#### 注口土器(第30図-1)

3区から注口土器の破片が1点出土した。第30図-1は注口部の破片で、注口土器の全形は不明である。注口部の長さは6.4cmで先端がわずかに欠失している。接合部の幅は2.5cm、内径2.0cmを測る。先端部の内径は0.6cmである。穿孔は両端から行なわれている。器面はていねいに研磨され、胎土に径1mm程の砂粒と雲母片を含む。灰褐色を呈し焼成良好。



第30図 精製土器実測図-12(縮尺1/2)

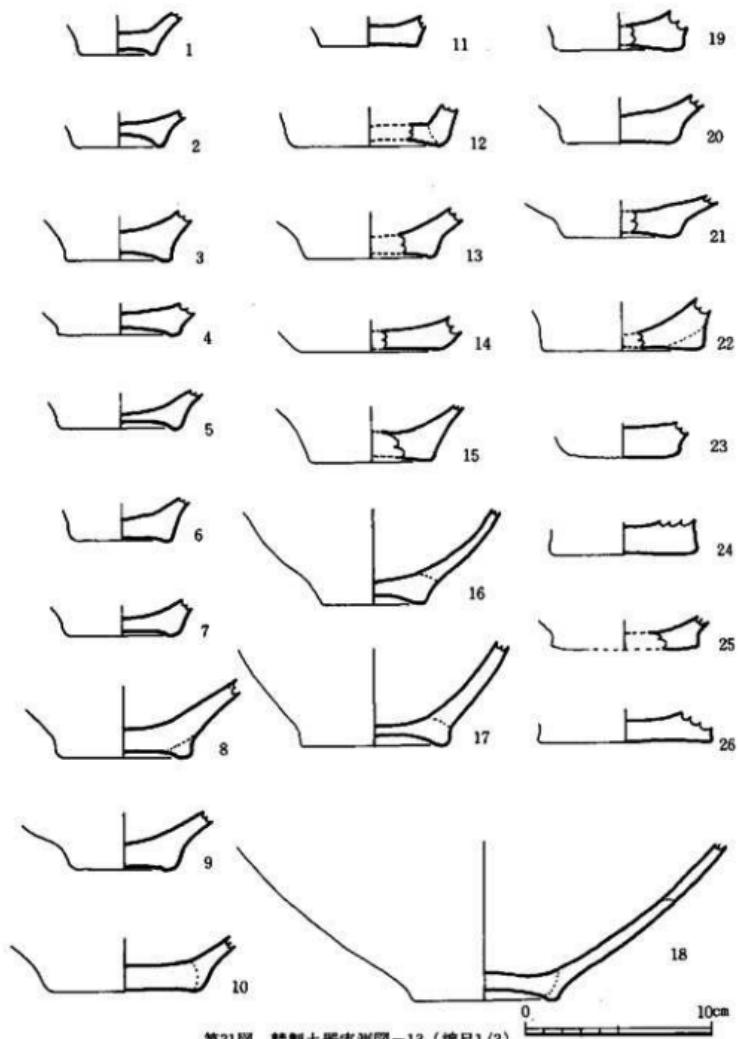
### 小形の精製土器（第30図-2～4、P.L. 13-2～4）

第30図-2は四つの波状口縁を有する小形の鉢形土器で、山形口縁の頂部と胴下半を欠く。胴部が外反し肩部の接合部から反転して内傾し、頸部から外反して口縁部にいたる器形で、口縁端部は丸味をもつと思われる。肩部はく字形に屈曲する。山形口縁の頂部に横状把手を有する。山形口縁の間の頸部と肩との文様帶には上下2本の沈線の両端を弧状につなぎ、連続した長横円形の文様を構成し、その間にもう1本の短沈線があり、文様構成は第29図-5に類似する。肩部には斜め方向の短沈線がめぐらしく羽状文をつくる。黒褐色を呈する焼成良好な土器で、内外とも横に研磨されている。3は3つの波状口縁をなす小形の鉢形土器で、口縁端部は丸味をもつ。器面は縱方向に研磨されており、内面には横方向のナデがみられる。底部は平底で、中央部がわずかにあがる。胎土には4～5mm前後の砂粒と雲母を含み、焼成は普通。胴部下半に丹塗の痕跡を残している。4も小形の楕形土器で、口縁端部は横にナデ、丸味をもつ。口唇部の下は肥厚する。器面の内外に接合部のあとを残し研磨はあまりよくない。5は外反した胴部から内傾するが肩部から口唇部までの幅が狭く、肩部の下がわずかに凹む。底部は丸底で、浅皿状の器形と考えられる。暗褐色を呈し、焼成はあまりよくない。小形の上器のわりに胴部の器壁は厚い。胎土に2mm以下の砂粒と雲母を含む。口唇部と肩部の間には文様はない。

### 精製土器の底部（第31図）

底部は第24図-6、第27図-2、第30図-3・4を除いて70点が出土している。このうち26点を図示した。精製土器の底部は上げ底が多いが、第31図-23～26のように平底のものも含まれている。底部の端部は丸味をもつものが多いが、3・8・11・25・26のように稜をもつものがある。底部と胴部との接合部は端部にあるものが多い。7・8・22は粘土をはりつけ肥厚させて端部をつくりだしている。3・4は器面の内外に粘土をうすくはりつけて仕上げている。端部から底部にかけてはナデで仕上げ、内面もナデで調整しているが、9・11・14・21のように内面に研磨したあとが残るものがある。P-144は図示していないが上げ底となる精製土器の底部片であるが、器面に丹塗のあとが認められる。胎土は精選され、胎土に2mm以下の砂粒と雲母を含むが焼成は良好で灰褐色を呈する。精製土器の底部の胎土は一般に精選されており、2mm以下の砂粒と雲母片を含むが焼成良好なものが多い。中には3～5mm前後の砂粒を含むものがある。色調は黒褐色を呈するものが多いが、明褐色や赤褐色を呈するものもある。

8・13・18・21の両面には炭化物が付着している。16・17・18の器面にも炭化物の付着がみられる。精製土器の底部の中にも種子の圧痕と思われるスタンプをもつものがある。20には、 $0.7 \times 0.7\text{cm}$ の丸い圧痕があり、図示していないがP-1414の底部には $1.5 \times 1.0\text{cm}$ と $1.2 \times 0.9\text{cm}$ の横円形を呈する圧痕がある。大きさからドングリであろうと思われる。P-1442には $0.5 \times 0.5\text{cm}$ の小さな圧痕が認められる。



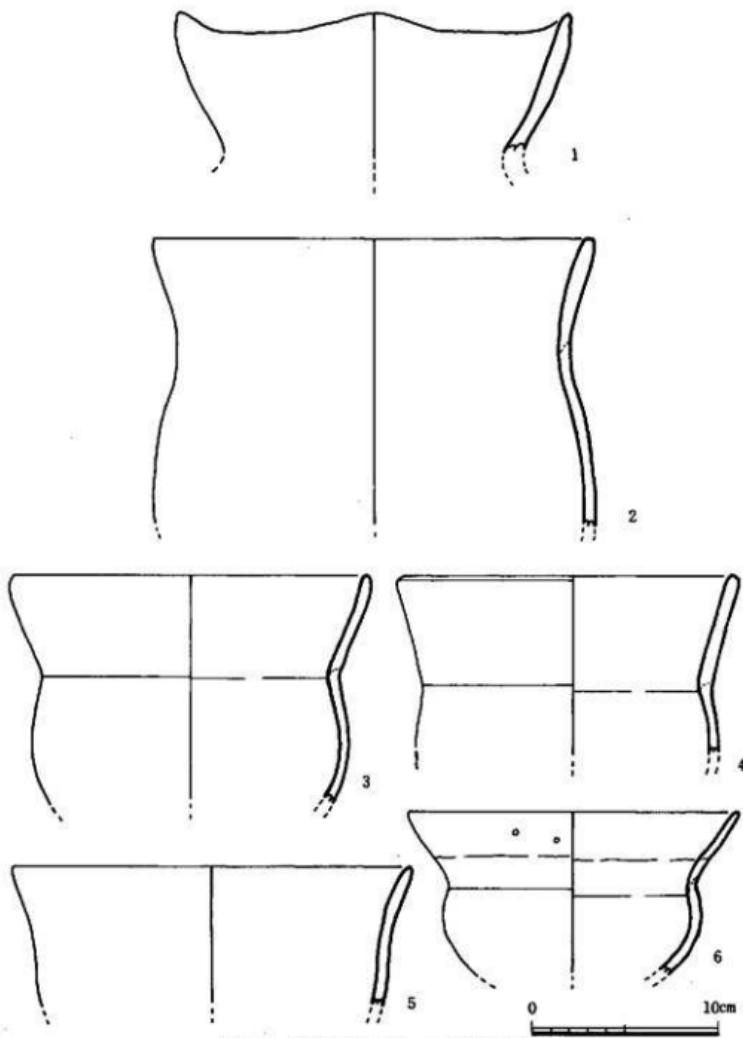
第31図 精製土器実測図-13 (縮尺1/3)

## 粗製深鉢形土器（第32～35図、36図－3～7、P.L. 15）

第32図－1～5は精製無文土器と同形であるが器面調整が精製無文土器ほどていねいではなく、焼成も普通などを粗製の深鉢形土器として区別した。1はわずかに波状口縁となるもので、口縁端部は内唇気味にうすくなる。内外をナデているが、それほどていねいではない。小形の割に器壁が厚い。2は頭がしまらず胴部の張りは弱く、口径と胴部最大径が同じである。口縁端部は平坦な面をもつ。器面にはナデとあらい研磨がみられ、内面は横にナデしている。器面調整はていねいではなく、ところどころに粘土がくつき、凸凹を呈する。黒褐色を呈し焼成は比較的良好である。3は第27図－1と同形の土器で口縁端部の平坦面には繩文が施文されている。器面はナデ調整されているが、器面調整は精製土器ほどていねいではない。内面は横方向に研磨されており、焼成は比較的良好である。4は第26図－2に類似した器形を呈するが、口縁部が丸味をもつ。器面の内外を横ナデ調整しているが、ところどころに研磨のあとを残している。5は頭部から口縁部へ大きく外反した土器で、口縁端部は丸味をもつ。口縁下に両側から穿孔した二孔がある。内外ともあらく研磨され、焼成は比較的良好である。6は内外に条痕を施した小形の粗製深鉢形土器である。2・3・5・6の器面には炭化物が付着している。1・5は灰褐色、2～4は暗褐色～黒褐色、6は赤褐色を呈する。

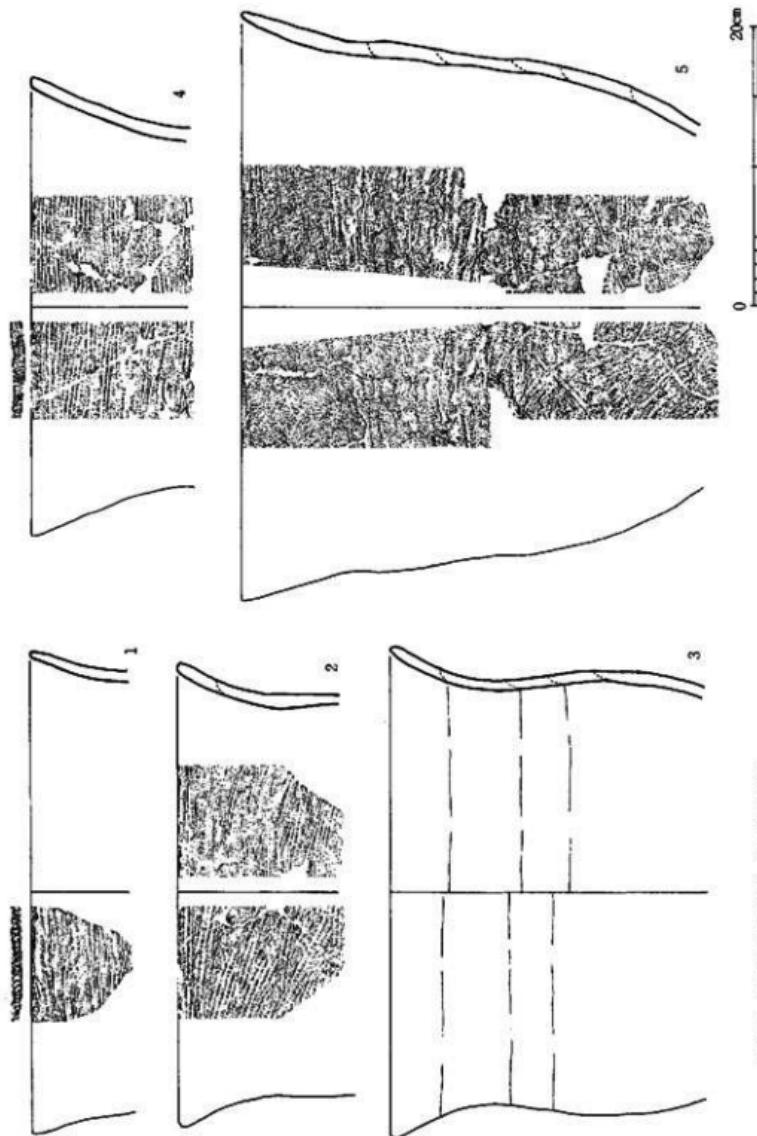
第33～35図は内外に条痕を施した大形の粗製深鉢形土器である。いずれも口縁端部に最大径をもつ。胴部から口縁端部へいたる器形はいくつかに分類できる。第33図・34図－1は頭部がややしまりゆるやかに外反し、34図－2は直立するように外反している。34図－3、35図－1は口縁の下から大きく外反している。34図－4は外反する口縁部を内側にまるくおさめている。34図－5は口縁部が内巻する器形のものである。35図－2は口縁部が著しく外反する土器である。34図－5の口縁は低い波状口縁を呈するが、大形の割には器壁がうすい。

口縁端部は平坦面をもつものと丸味をもつものとがある。平坦面のつくりは口唇部に施文する場合とナデで平坦にするものとがあり、口唇部の内外がわずかに肥厚するものが多い。口唇部の施文には刻目を施すもの（33図－1・2）とハイガイのように放射肋をもつ二枚貝を押圧するもの（33図－4）、ヘナタリと思われる巻貝（34図－1）をころがして施文するものとがある。器面の上半は横方向の条痕を施すものが多いが、縱方向の条痕を施すもの（34図－1）や横・縦・斜め方向の条痕を不規則に施したもの（34図－3）などがある。内面は横方向の条痕が多いが、33図－1は条痕の上をナデしている。33図－3、34図－4・5は器面の内外を条痕の上からナデ調整した例である。35図－1は内外を指ナデしているため、器面に凸凹がみられる。口縁端部のつくりも雑で、ナデで平坦にしたところと丸味をもつところがある。胴部下半には斜め方向か縱方向の条痕を施すものが多い。33図－4・5、34図－1～3の器面には炭化物が付着している。36図－2の内面にも炭化物が付着している。粗製深鉢形土器の口縁部片は図示した以外に429点あるが、器面に炭化物が付着したものが多い。また底部に近い胴部片の

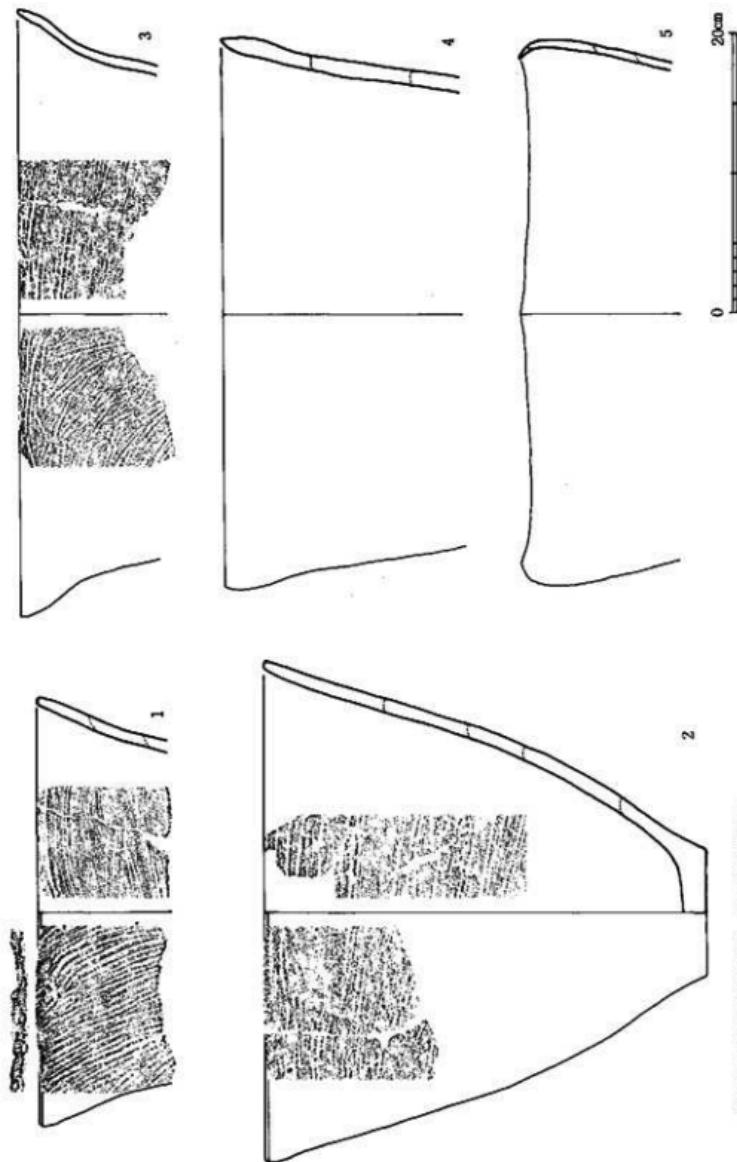


第32図 粗製土器実測図-1 (縮尺1/3)

## 1 包含層の土器



第33図 粗製土器実測図-2 (縮尺1/4)

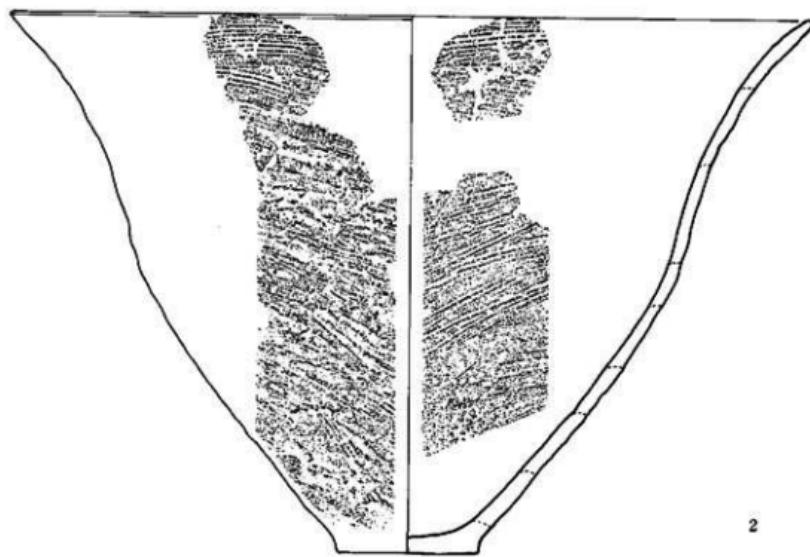


第34図 粗製土器尖端圖－3 (縮尺1/4)

## 1 包含層の土器



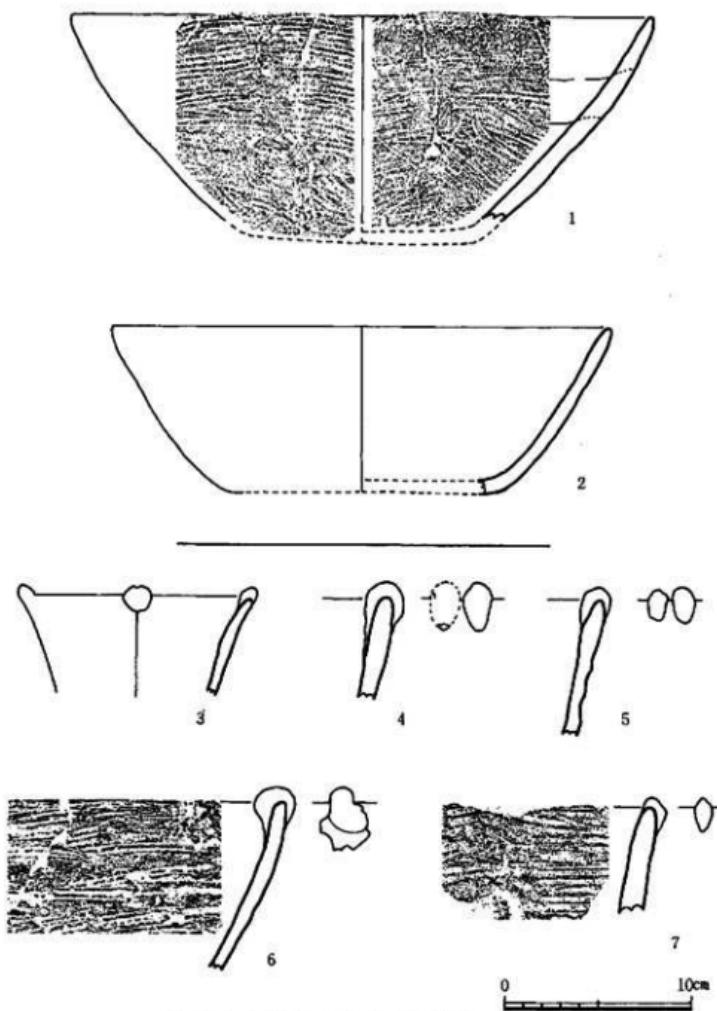
1



2

0 20cm

第35図 粗製土器実測図-4 (縮尺1/4)



第36図 粗製土器実測図-5 (縮尺1/3)

内面には炭化物が付着したものが多くの認められる。胎土には3~5mm前後の砂粒を含むものが多い。色調は黒褐色を呈するものが多いが、灰褐色、赤褐色を呈するものもある。

第36図-3~7は粗製土器の口縁端部に粘土をはりつけて突起をつくる土器である。第36図-3は突起を口縁の4カ所にはりつけた小形の鉢形土器で、器面の内外をナデ調整し、焼成は比較的良好である。4は突起の1つが剥落しているが、条痕の上をナデ、突起のまわりは指でおさえている。5の口縁部は平縁ではなく、波状口縁を呈する。器面には指ナデによる凹みがみられる。6・7は内外に横方向のあらい条痕を施しているが、6の内面はナデにより条痕を消している。3~6は暗褐色、7は灰褐色を呈し焼成は比較的良好である。胎土には2~4mm前後の砂粒を含む。

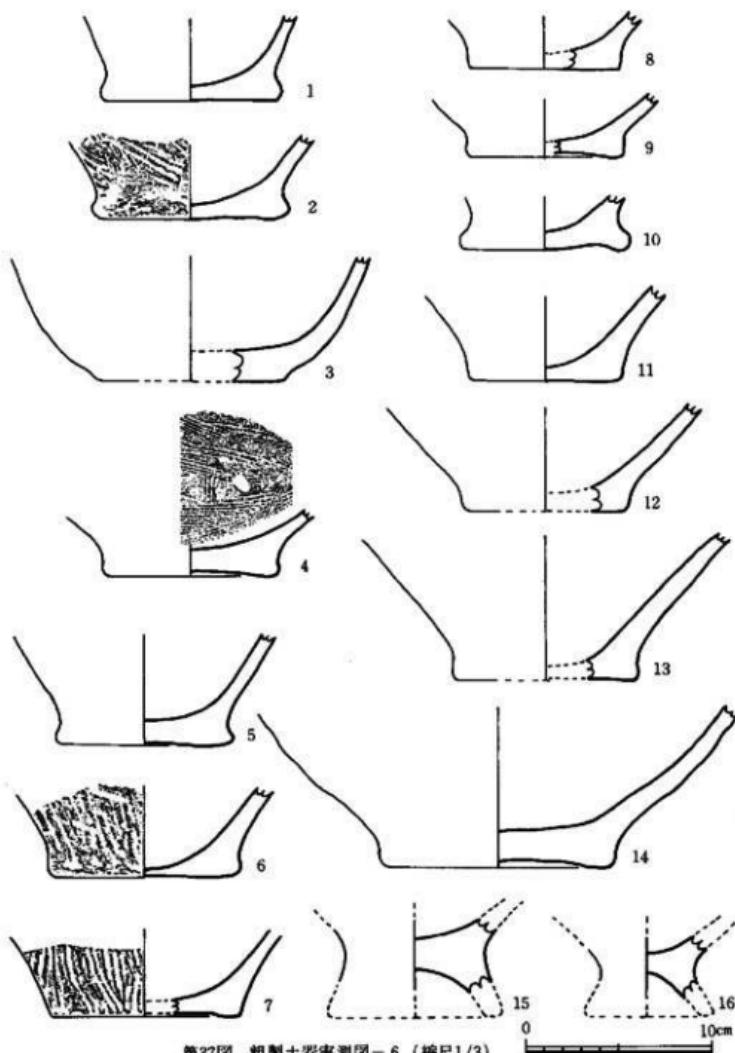
このように口縁端部に突起をもつものは時期的には先行するものかも知れない。

#### 粗製浅鉢形土器（第36図-1・2 P.L. 16-1）

粗製土器は大半が深鉢形土器であるが、浅鉢形土器も含まれている。第36図-1は外反した口縁部をや、立ちあがらせ、口縁端部はナデで内側に内壁気味におさめており、器面の内外にあらい条痕が施されている。赤褐色を呈し、焼成は普通。2の口縁端部は丸味をもつ。底部は中央部がや、あげると思われる平底である。器面は内外とも横方向にあらく研磨し、その上をナデで調整している。黄褐色を呈し、胎土に2~4mm前後の砂粒や雲母を含むが、焼成は比較的良好で、第32図-1~5と同じく精製土器に類似した土器である。

#### 粗製土器の底部（第37図）

粗製土器の底部は合わせて216点が出土しているが、このうち16点を図示した。端部は第37図-5・8・11のように稜をもつものもあるが、大半は丸味をもつ。内面は条痕を残すものがあるがナデ調整されたものが多い。12は横方向の条痕の上をていねいにナデ調整したものである。7はあらい横方向の条痕が施され、4には拓本のように条痕が施されている。条痕は幅3~4mmの間に3本を一つの単位としている。13はナデしているが、縱方向、斜め方向の条痕が残っている。器面には37図-2・6・7のように端部まで条痕が施されたものもあるが、他は横ナデ調整され、条痕は残っていない。2は幅1.2cmの間に3本を1単位とするあらい条痕が斜め方向に施されている。条痕の上をナデで消しているところもある。6は縱方向のあらい条痕がみられるが、ナデたところもある。7は器面全体に縱方向のあらい条痕を施したものである。平底が大部分を占めるが、中には7のように底面をていねいに研磨し、中央部がや、上げ底となるものがある。10は底面を研磨したあと端部のまわりを指でおさえているため凹みをもつ。胎土には2~5mm前後の砂粒を含むが焼成は普通。灰褐色~黒褐色を呈するものが多いが、1・2・14のように赤褐色を呈する土器も少なくない。15・16は上げ底となる底部片である。胎土に砂粒や雲母を含むが焼成は比較的良好で赤褐色を呈する。器面はナデ調整されている。このように上げ底となるものは216点のうち2例しかなく、時期的には先行するものかもしれない



第37図 粗製土器実測図-6 (縮尺1/3)

い。

粗製土器の底部には種子の圧痕と思われるものがあり、その他にも砂粒の脱落痕と区別される圧痕が認められる。37図-2にはクリの皮殻ではないかと思われるような弧状の圧痕が認められ、P-395にも同様な圧痕がある。P-578の1.6×1.1cm、P-1516の1.1×0.7cmのように椭円形を呈する圧痕はドングリなどの種子の圧痕と考えられるものである。図示していないものの中にはP-857、P-1293、P-1632のように内面に炭化物が付着するものがある。

P-1028の胴部下半の一部には巻貝の圧痕と思われるものが認められる。

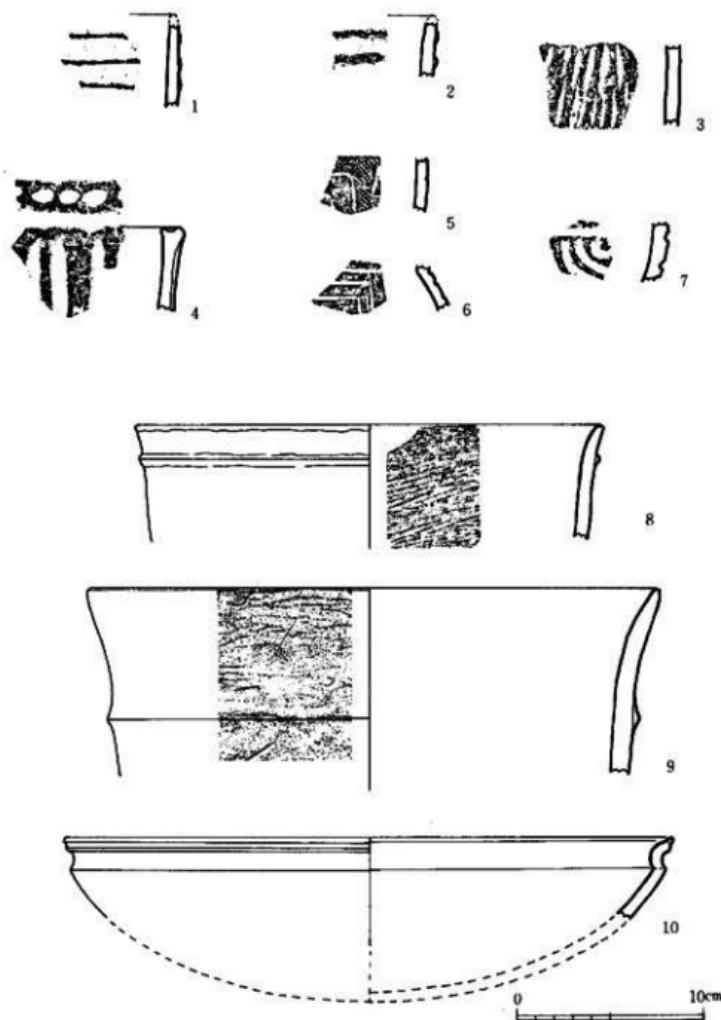
## (2) その他の縄文土器

後期後半の時期以外の土器はいずれも小片で流れ込みと考えられるものである。

第38図-1は口縁端部を欠くが、器面に3本の隆帯文をもつ。内面には条痕文がみられる。2は口縁部に近い小片で、2本の隆帯文をめぐらしている。1は灰褐色、2は暗褐色を呈する土器で、まわりはローリングを受け磨滅している。3は縱方向のあさい沈線を施した暗褐色の胴部片で、まわりは磨滅している。1・2は前期の轟式、3は曾畠式土器で、3の胎土には滑石の混入はみられない。4は滑石混入の口縁部片で、口縁部に幅広い凹線を縱方向に施し、口唇部には凹点がみられる中期の阿高式土器である。5は磨消繩文土器の胴部片で、平行沈線文の間を研磨している。沈線は細くシャープで、後期後半よりも先行する磨消繩文土器で、黒褐色を呈し、器壁はうすい。6は太い沈線文の下に弧状の沈線を3列配し、満巻文を構成する。7は3本の沈線文を並列するが、下の2本の沈線は縱方向の沈線につながる。5・6の満巻文や沈線を組合せた土器は後期中葉の土器であろう。4～7もローリングを受けてまわりが磨滅した小片で、4は同一個体が3点ありPit-117・119付近とPit-14から出土している。

8は付図-2の⑥から出土した土器で、口縁部がわずかに外反し、口縁端部をナデて内側をまるくおさえているため外側がわずかに肥厚する。口縁の下に粘土をはりつけ一条の隆帯文をめぐらす。器面はナデ調整するが内面には条痕が残る灰褐色の口縁部片である。9は黒色研磨された厚手の口縁部片である。口縁部は外反し端部に平坦面をもつ。口縁の下に粘土をはりつけ幅広い一条の突きをめぐらす。器面は内外とも横に研磨され、焼成は良好である。10は黒色研磨された精製土器で、外反した胴部は口縁部との接合部より屈曲して立ちあがり口縁部に1本の凹線をめぐらす。内面にも凹線をめぐらしており、端部は丸くなる。口径の大きい浅鉢形の土器である。8は前期の轟式、9・10は晩期の土器であろう。

このほか包含層には弥生土器も含まれている。弥生時代の包含層は中央部の凹地にしか残っておらず、遺構は住居址と南西隅の溝しか検出されていない。弥生中期の遺構はすでに削平されているが、J-101地点にあった遺構に伴なうものであろう。弥生後期の土器は磨滅した小片が多い。これらの弥生土器については次に説明する。

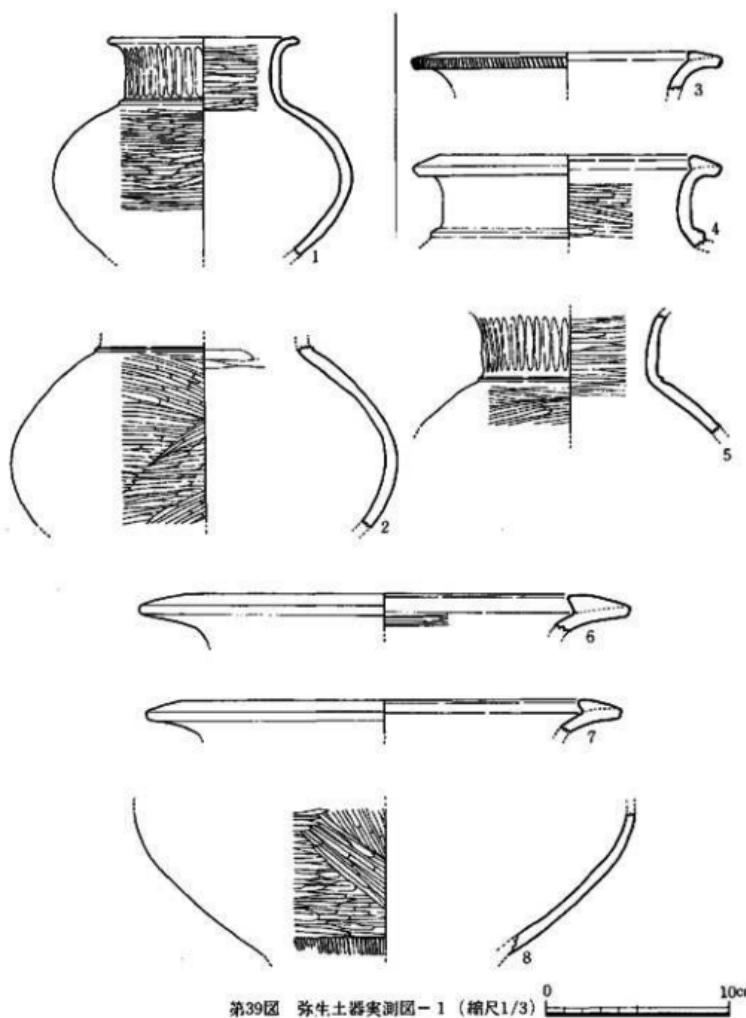


第38図 その他の縄文土器実測図 (縮尺1/3)

## (3) 弥生時代

**壺形土器（第39図1～8）** 1は球形に近い胴部に直立する頸部が伸び、口縁部は彎曲しながら外反し端部を丸くおさめて短い口縁部をつくっている。胴部から頸部への移行部には断面三角形の凸帯を貼りついている。器面の調整はきわめて丁寧で、胴部外面と頸部内面は細かい横のヘラ磨き、頸部外面は縱のヘラ磨きである。胴部内面と胴下半部外面はナデ調整である。頸部の凸帯は横ナデされ後は丸みをもっている。胎土は小砂粒をわずかに含むが精良である。内外面ともに灰茶褐色を呈し焼成良好である。2は胴上半部のみを残している。胴部の最大径はほぼ中位にあり球形をなす。頸部への移行部には断面三角形の小さな凸帯をめぐらしている。胴部外面の調整は細かなヘラ磨きである。これらのことから1に比べやや大きめであるが同じような器形をなすものと思われる。3は彎曲しながら外反する口縁上面に粘土を貼りつけ鋤先状の口縁を形成する。口縁端には刻み目を施している。頸部は朝顔状に大きく開くのではなく、1・4のように直立するのである。4も同じように口縁上面に粘土を貼りついているが、かなりぶ厚く内側上方に突出し外傾する口縁となっている。胴部から頸部への移行部には断面三角形凸帯をめぐらしている。調整は頸部内面が細かいヘラ磨きで、外の部分は横ナデである。口縁端の刻み目は見られない。3、4ともに茶褐色を呈しており、胎土は精良である。5は器形、調整方法、胎土、色調ともに1とまったく類似しているが5の頸部の凸帯は幅広くなく小さく突出していることが特徴的である。6は灰褐色を呈し胎土に砂粒を多く含んでいるがそのわりに表面には露出していない。口縁上面の粘土の接合はぶ厚く内側への突出が大きく端部は棱をもち鋤先状の口縁をなしている。7も同じような口縁部であるが口縁上面の粘土の接合は特にぶ厚くない。外端部は横ナデで凹状となっている。内外面ともに茶褐色で、胎土に小砂粒を含む。6、7とも3、4とは異なり朝顔状の頸部がつくのである。8は胴下半部で、底部との接合部より離脱しているようである。外面は横と斜めのヘラ磨きを丁寧に加えており、底部接合部は縱の細かいヘラ磨きである。1、2に比べてかなり大きな胴部であるが同じような器形になるものと思われる。胎土は砂粒をわずかに含む。外面黒褐色、内面淡茶褐色を呈す。

**壺形土器（第40図1～7）** 1は肩反転部の破片で、かなり急に屈曲している。凸帯はこの肩面部をめぐるが貼りつけ後横ナデされており接合部は顯著でない。凸帯は断面三角形で背が高く、刻み目は鋭利で深い。この刻み目凸帯下部はわずかに内側しながら底部へ伸び、上部はやや外側しながら口縁部へ続くものと思われる。外面は横条痕が認められ、内面はヘラ状のもので横にナデして調整している。このような特徴から夜臼式上器と考えられる。焼成は良好で、内外面とも灰褐色を呈する。胎土に2～3mm大の砂粒を含有している。2の胴部は底部からゆるやかに内側しながら伸びており、その上端に断面三角形の粘土を貼りつけて平坦な口縁をつくっている。頸部の張りは少なく、口縁はぶ厚いつくりをなす。胎土は砂粒をわずかに含み、



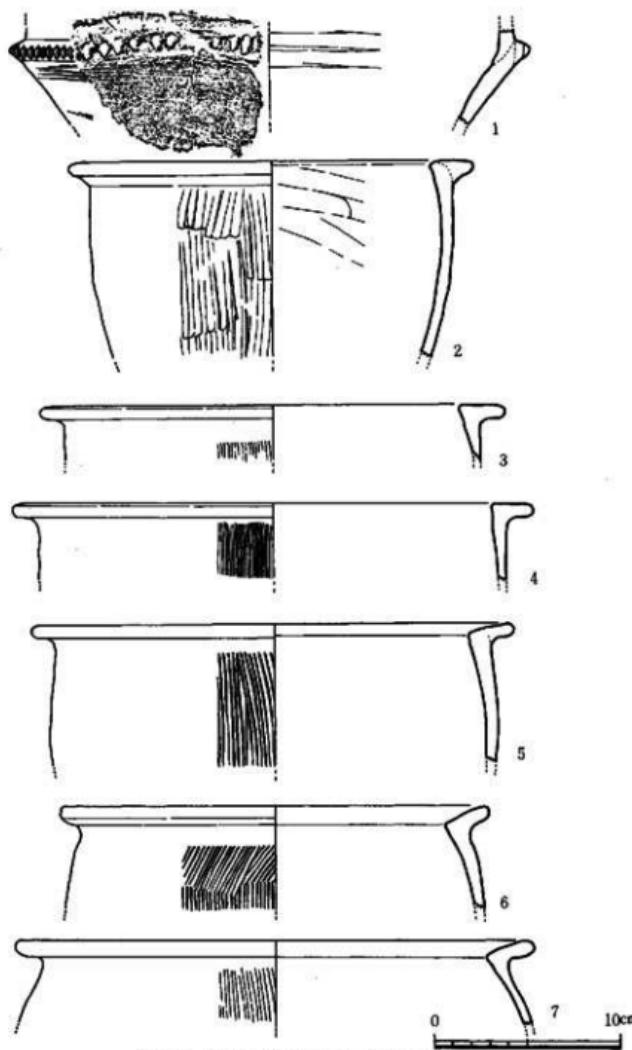
第39図 弥生土器実測図-1 (縮尺1/3)

普通の焼成をなす。外面は淡橙褐色、内面は黄褐色を呈している。調整は外面が縦の粗いハケ目、内面はヘラ状のもので斜めにナデている。3はL字形の口縁をもっており、胴部上位でやや張るようである。口縁端部は丸くおさめており、上面はほぼ平坦であるがやや端部が下がっている。胎土は砂粒を少量含んでおり、内外面とも灰褐色を呈している。堅緻な焼成をなす。調整は口縁部が横ナデ、外面は縦のハケ目後にナデしている。4は直立する胴部には水平に粘土を貼りつけL字状の口縁をつくっている。胎土の砂粒含有は少量で、その粒子はきわめて小さい。胴部外面は細かい縦のハケ目調整、内面はナデ調整である。5は内傾する口縁でくの字形に近い形をしている。口縁外端は丸くおさめられており内端は浅い凹線がめぐっている。胴部外面の調整は縦のハケ目、内面はナデである。外面は黄茶褐色で内面は灰茶褐色を呈している。6はくの字形の口縁で外端は丸みをもっているが内端は小さく突出しており稜がつく。胴部はやや張るのであろう。内外面ともに灰色で焼成よく堅緻である。外面のハケ目の間隔は均一で、内外面ともに精緻な感じの調整をしている。7も同じようにくの字形の口縁で、内端は稜がつき、外端はさらに丸みをもつ。胴部の器壁はうすいつくりをなし、張りは大きく倒卵形となるのであろう。胎土はわずかに小砂粒を含有しており、内外面とも淡黄茶褐色をしている。

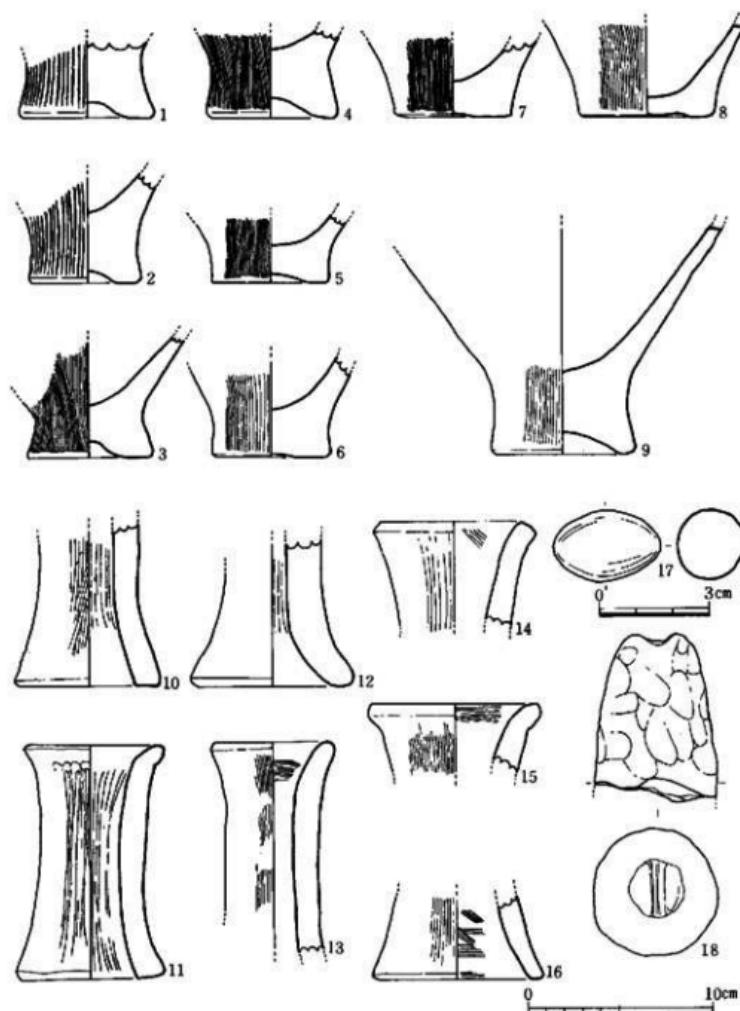
**底 部** (第41図1~9) 上げ底の顯著なもの(1~5、9)とわずかに上げ底のもの(6)と平底に近いもの(7、8)などがある。1は厚手のつくりで、ナデで上げ底を整形している。くびれはやや大きく、外面はハケ目調整。灰茶褐色を呈し、焼成普通である。全体的につくりは雑である。2は底径小さく、したがってくびれも大きくなない。ナデによって小さく窪ませて上げ底をつくっている。外面は粗いハケ目調整、内面灰黒色で外面は茶褐色を呈している。3は1、2に比べてうす手の底部である。胎土に2~3mm大の砂粒を含有しており、内面には砂粒の露出が多く見られる。上げ底はナデており、大きく屈曲して胴部へ移行する。外面はハケ目調整。4はわりにくびれ大きい。胎土は砂粒の含有多く、外面灰茶褐色、内面黒褐色を呈している。外面はハケ目調整である。5は上げ底であるが、かなりうす手のつくりで、くびれも小さい。外面は細かいハケ目調整。6は厚手のつくりであるが、わずかに上げ底となる。胎土に小砂粒を多量に含む。7・8は平底に近く、7はわりに厚手であるが8はうす手のつくりをなす。ともに外面は縦のハケ目調整で、胎土の砂粒は多くない。9は厚手で上げ底の底径が大きく、端部は丸みがある。外面茶褐色、内面黒色を呈しており、全体的に磨滅している。

**器 台** (第41図10~16、18) 上下端部径が著しく違わず、胴は直線的でくびれがない筒形をしている。下端部はほとんどが平坦で、上端部は小さく外反し丸くおさめている。外面の調整は丁寧で10、11のように縦のヘラ磨きのものと13~16のようにハケ目のものとがある。18は支脚と考えたが下部を欠いており全形を知りえない。全面指押えで整形している。

**投弾形土製品** (第41図17) 紡錘形の完形品である。断面はほぼ正円で表面には特別な加工痕は認められない。茶褐色でわずかに砂粒を含んでいるようである。



第40図 弥生土器実測図-2 (縮尺1/3)



第41図 弦生土器実測図-3 (縮尺1/3・17は縮尺1/2)

## 2 遺構の土器

### (1) D-2 の縄文土器

上塙-2 から出土した縄文土器は粗製深鉢形土器の胴部片 7 と粗製底部 1 である。胴部片は器面にあらい条痕が残るが内面は条痕がわずかに残る程度に比較的よく調整されている。底部の径は 9.5cm である。底部に種子の圧痕がみられる。

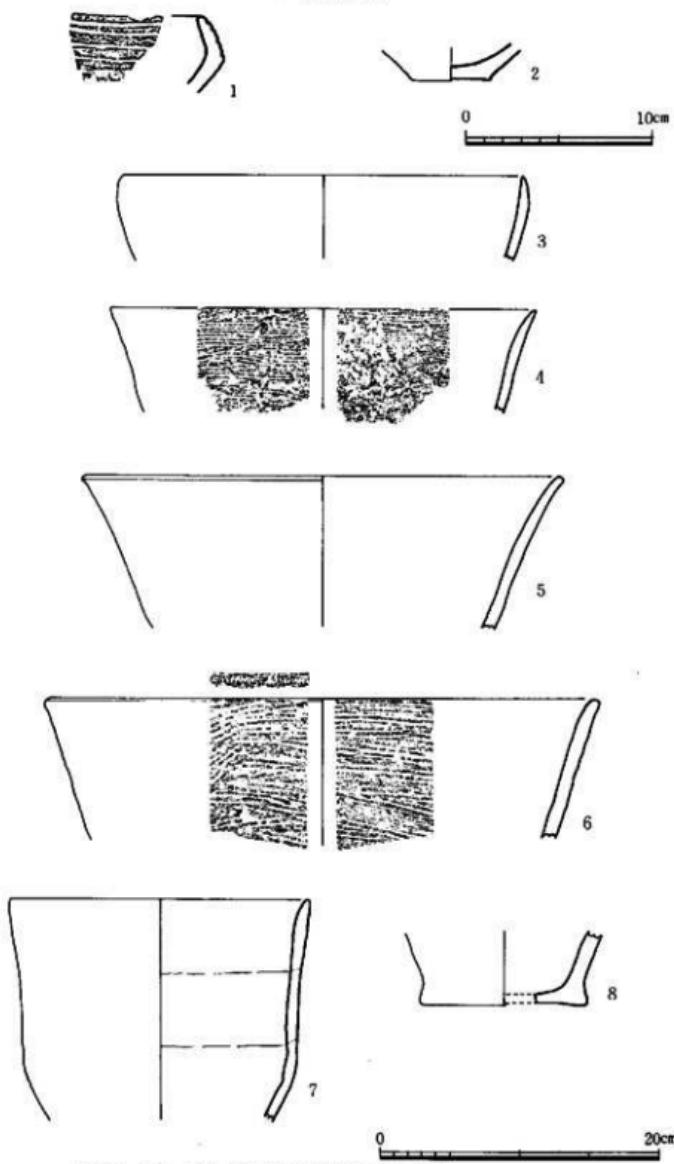
### (2) Pit-14 の縄文土器 (第42図 第47図-1)

第42図-1 は精製浅鉢の口縁部で内外とも研磨された焼成良好な土器で、胎土は精製されている。内外とも黒褐色を呈し、沈線文の間に範状工具で斜め方向の浅い沈線を左から右へくり返し、連続した文様をつくっている。精製口縁部の中には口縁端部が肥厚するが文様のないものがある。2 は粗製底部で内外とも黒褐色を呈しつつも上げ底となる。胎土は精製され、1 の底部であろう。粗製土器の口縁部には 3 のように内凹するもの、7 のように直口するものと 4-6 のように外反するものがある。5・6・7 の器面には煤が付着している。P-1597 は外反する粗製口縁部で図示していないが、内面には煤が厚く付着している。6 は内外ともあらい条痕がみられるが、粗製土器の内面は条痕がわずかに認められる程度に調整されたものが多い。7 は内外とも指でヨコ・斜め方向にナデがみられ、条痕はない。8 は端部が縫をもつ底部片で、底部近くまでタテ方向の条痕が施されている。

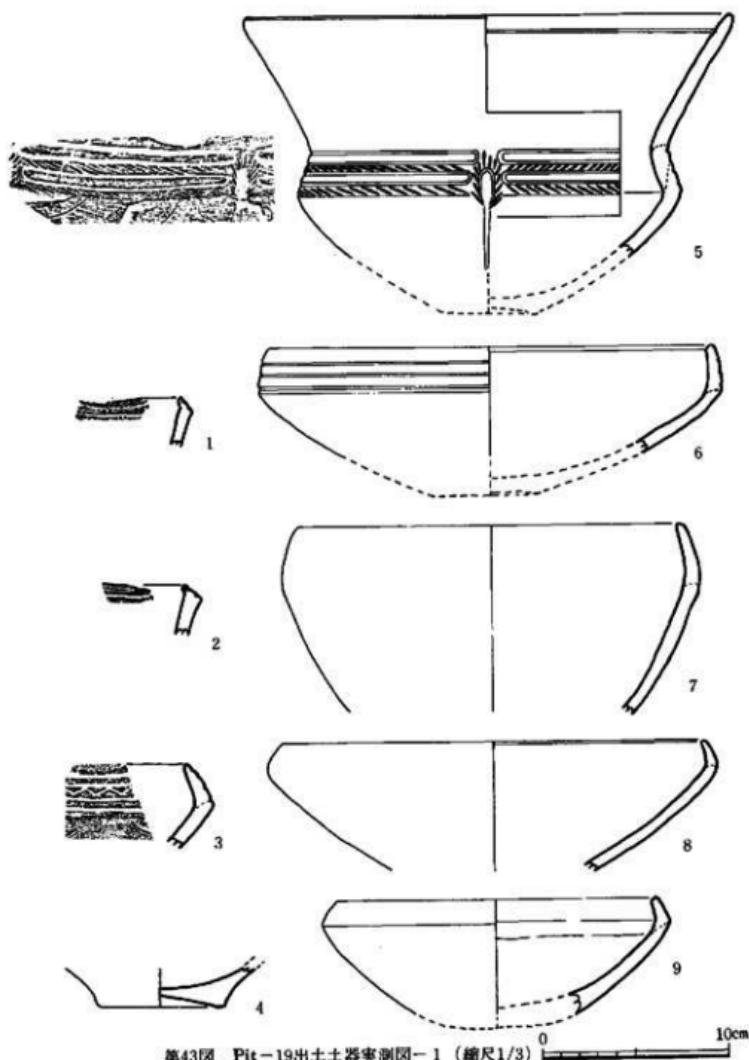
### (3) Pit-19 の縄文土器 (第43-45図 P.L. 13-1)

最も出土遺物の多いピットで、精製土器を第43図に、粗製土器を第44・45図にしめた。1・2 は山形口縁をなす磨消縄文土器で、ピットの上部から出土した小片である。上部から出土した精製胴部片には図示していないが、第24図-2 に類似したものがある。胴部の沈線文をエ字状の文様で区切るものである。5 は胴部が屈曲し、頸部から口縁部にかけて大きく外反する精製の鉢形土器で、胴部に羽状文が施されている。口縁は半らで内面に一条の浅い沈線がめぐる。頸部から胴部の文様帯は 4 つに分かれている。中央部は指頭状の押圧で凹み、まわりに放射状の細線羽状文がめぐり、胴部から底部にかけて細沈線を入れ区画している。沈線はシャープである。2 本の沈線文が上下に配置し、中央で折り返す。沈線文の間には細線羽状文がみられる。羽状文は実測図の右側のように上下が異なる方向の部分と左のように同一方向のところがある。胎土には 2~4mm の砂粒や雲母片を含む。黒褐色を呈し内外とも研磨され焼成良好器面の胴部から口縁部にかけて炭化物が付着している。7 は口縁部が内凹するもので、内外とも黒褐色を呈し、横方向に研磨されているが文様はない。3・6・8・9 は浅鉢形土器で、3 は胴部の接合部から内側に屈曲し、幅広い文様帯には 4 本の沈線文がめぐり、沈線文の間に浅い短沈線を左から右へ順にくり返し、一つの連続した文様としている。胎土に雲母や砂粒を含み、灰褐色を呈する焼成良好な土器で、Pit-14 から出土した第42図-1 に類似している。6

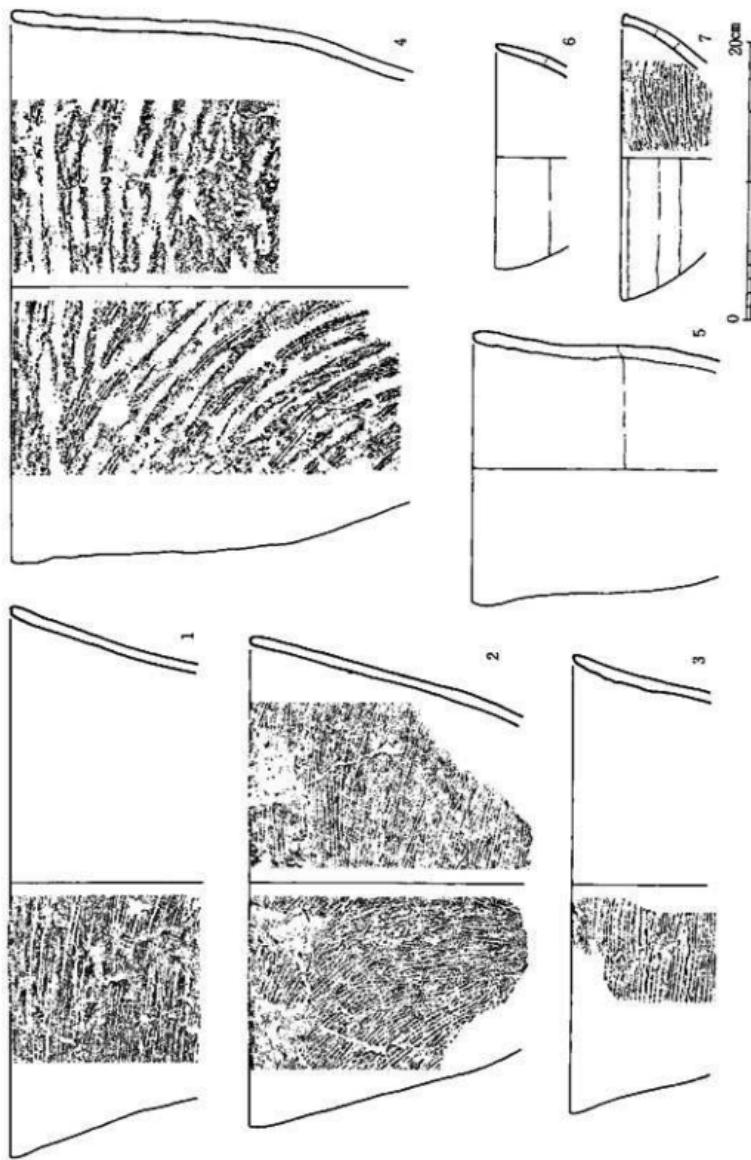
## 2 造構の土器



第42図 Pit-14出土土器実測図（縮尺1/3・1/4）



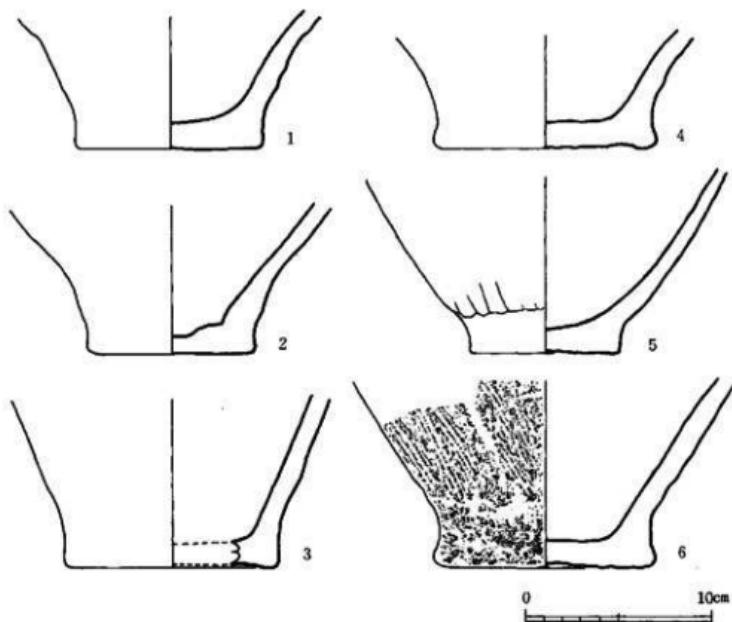
第43図 Pit-19出土土器実測図-1 (縮尺1/3)



第44図 Pt-19出土土器実測図-2 (縮尺1/4)

は接合部から口縁部がやや内凹し、3本の沈線をめぐらしている。8・9は7より更に内凹し、文様はない。6・8・9は明褐色を呈する焼成良好な土器である。8の口縁端部には突起状の盛りあがりがあるが欠失して不明。その周囲に刺突がみられる。4は精製土器の底部で、内外とも研磨されており、黒褐色で焼成良好。

第44図はPit-19出土の粗製土器である。口縁部が1-3のように外反するものと4・5のようにほぼ直立する深鉢形土器がある。2は内外ともあらい条痕が残るが、1・3の内面は条痕の上をナデている。4は拓本のように条痕の上から指頭でナデているため断面に凹凸がみられる。



第45図 Pit-19出土土器実測図-3 (縮尺1/3)

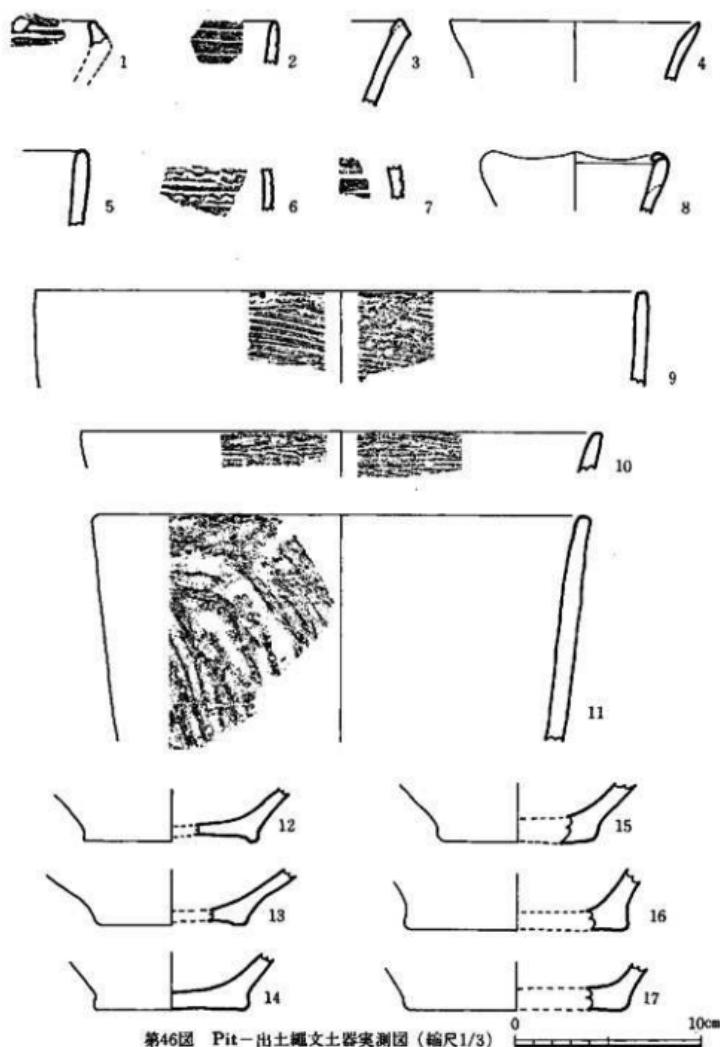
5も4と同様に指頭によるナデがみられる。5はPit-14の土器（第42図-7）に形・大きさとも類似している。6・7は小形の浅鉢形土器で、器面に接合部が残り、つくりは稚である。6は内外ともナデ、7は内面に条痕がみられる。3・5の器面には煤が付着しており、2の内面には炭化物が付着している。

第45図は粗製土器の底部である。底径は8~12cmで、4・6に種子の圧痕がみられる。6は $1.6 \times 1.8 \times 0.7\text{cm}$ と大きく、ドングリの圧痕であろう。5の内面はていねいにナデ調整されているのに対し、器面はあらい条痕の上からタテ方向にナデしているため、その境の粘土がもりあがっている。2の器面には指頭の押圧痕が認められ、内面には粘土をはりつけている。内面はいずれも条痕の上をていねいに調整しているが、1・3・5・6には炭化物が付着している。2は外面に炭化物が付着している。3の器面には5mm巾に5本を単位とする条痕が斜め方向に施されている。

#### (4) その他のピットの縄文土器（第46図）

縄文時代のピットは25あるが、Pit-14・19を除くと出土遺物は多くない。Pit-14・19以外の縄文時代のピットから出土した土器を第46図にしめた。このうち2・6・14の3点はピットから出土した土器であるが、時期が特定できないものである。

第46図-1はPit-121から出土した精製の鉢形土器の山形頂部片で、口縁端部に縄文が残り沈線文の間は磨消されている。頂部は上からおさえられ凹む。Pit-121からは他に11・15も出土している。3はPit-145から出土した精製土器の口縁部片で、肥厚した口縁端部は無文のまゝである。Pit-145からは9・17が出土している。4は内外とも研磨されており、口縁部が外反する小形の土器で、Pit-136から出土した。8は小さな壺形をなす土器で、口縁端部をおさえ内側に肥厚させる。山形頂部は高くなく、内側に突起状のはり出しをつくる。器面はていねいに指ナデしている。内面のつくりは稚で、接合面がみられる。Pit-133出土。5はPit-144出土の粗製口縁部で、器面はヨコ方向の条痕がみられ、口縁部は直立する。7はPit-91から出土した磨消縄文土器の胴部片である。9~11は粗製口縁部片で、9は口縁部が直立し、10・11はやや外反する。9・10は内外ともヨコ方向へ条痕がみられる。11は拓本にみられるように器面をヨコ・斜め方向に指ナデしている。内面はていねいに調整され、条痕がわざかに認められる。9はPit-145、9はPit-150、10はPit-121から出土した。12~14は精製土器の底部、15~17は粗製土器の底部である。12・13は上げ底となるもので、内面には炭化物が付着している。14の底部には種子と思われる圧痕が認められる。



第46図 Pit-J-10 i 地点の出土繩文土器実測図 (縮尺1/3)

### (5) 遺構の弥生土器

**壺形土器**（第47図1～3） それぞれ口径を異にするが広口壺の口縁部である。いずれも内側への突起が見られる。1・3の突出端はするどく稜をもっており、2は小さく突出し丸みがある。上面はほぼ平坦面をなす。1、2の内面は横のヘラ磨き調整である。

**壺形土器**（第47図4～8、第48図1～5） 4の口縁部は如意形に小さく外反しており、時代前期壺形土器の特徴を有している。口縁端には割み目ではなく横ナデでや、凹状となっている。外面は縦のハケ目、内面は横のハケ目調整。外面は黒茶褐色で胎土は砂粒を多めに含んでいる。5は断面三角形の粘土を接合して口縁部をつくる。内端部は小さく突出し、外端部と上面は丸みをもち外傾している。外端部には稍円形の浅い割み目を施している。外面は縦のハケ目調整で、胴はやや張るようである。6は同じように粘土の接合でL字形口縁をなしている。口縁部は横ナデされ、内端部は稜がありかなりシャープなつくりである。外面は細かい縦のハケ目調整。胴はわずかに張る。7はL字形口縁でやや内傾している。口縁部の上面と両端部は丸みがあり、胴はほとんど張らないようである。外面は縦のハケ目調整。8は7と同じように丸みのある口縁部で、内傾するL字形口縁であるが7に比べて傾きが大きくなっている。第48図1の口縁部は内傾し、やや扁平なつくりで外側への張り出しも小さい。外面は縦のハケ目調整。第48図2は内傾するL字形口縁で、外端部は丸みがあり口縁下には断面三角形の凸帯1条をめぐらしている。第48図3～5は上げ底の底部で、3、4の胴部への移行はあまりくびれていない。5は大型でつくり、調整とも丁寧である。内外面とも灰白色を呈し、胎土は砂粒の少なく堅密な焼成である。外面は細かい縦のハケ目調整である。

**器台**（第48図6） 厚さはほぼ均一で、あまりくびれない筒形の器台である。内面にはしばり痕が見られ、外面は縦のハケ目、下端部は横ナデ調整。きわめて整った器形をなしている。

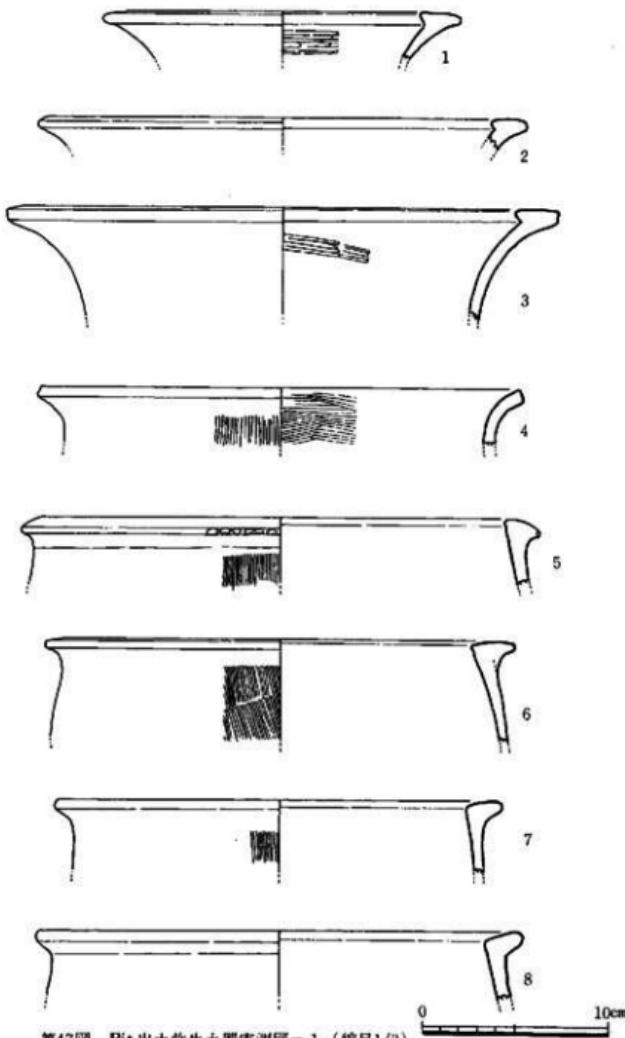
**壺形土器**（第48図7） くの字形に外反する口縁で、やや外彎しながら伸び、端部は凹状をなしている。屈曲部の内側にはにぶい稜がつく。口縁部外面は斜めのハケ目後横ナデしている。

**鉢形土器**（第48図8） 胴部はわずかに屈曲して口縁部は直線的にのび、端部はほぼ平坦となっている。胴下部を欠くがそのまましまり丸底の底部となるのであろう。内面は口縁部が横のハケ目、胴部が斜めのハケ目、外面は斜めのハケ目調整で丁寧である。口縁内面は丹塗り。

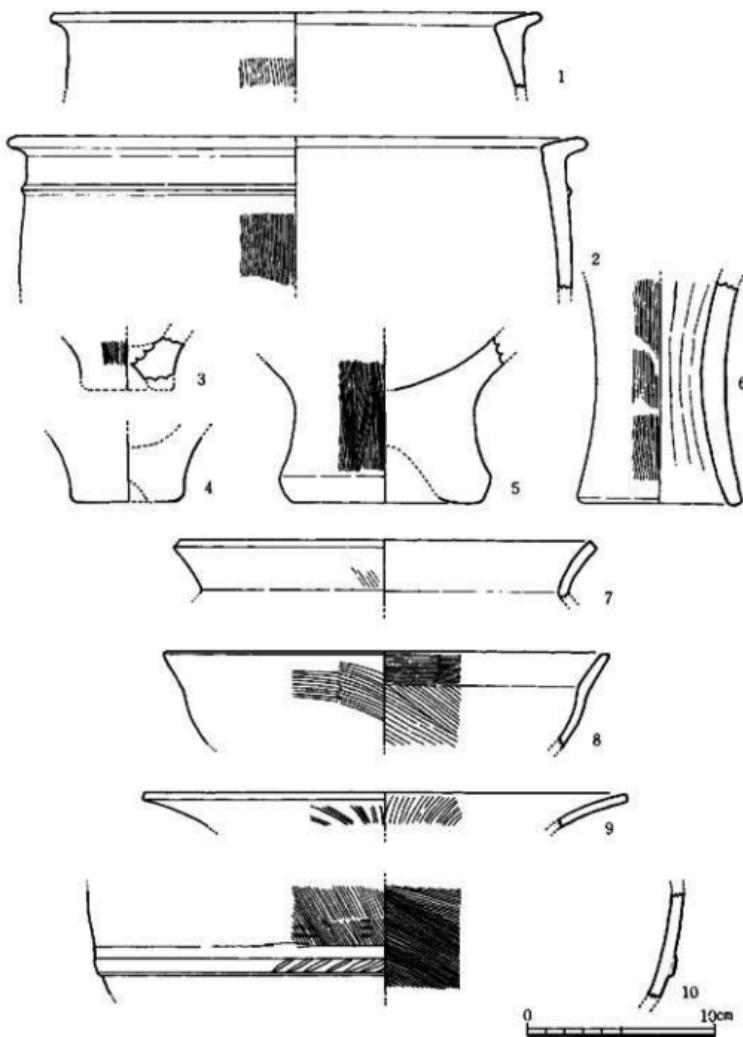
**高杯形土器**（第48図9） 杯部膨出上部の小破片である。口縁部はやや外彎気みに伸び端部は同じ厚さでおさめている。調整は外面のハケ目、内外面の横ナデ、内外面の暗文風な縦のヘラ磨きという順序でおこなわれている。黄赤色を呈し、精良な胎土が用いられている。

**壺形土器**（第48図10） 胎土に小砂粒を含む胴部の破片で、低い断面台形の凸帯をめぐらしており、割み目を施している。凸帯上部は斜めのハケ目調整でわずかに叩き目痕が残る。内面は斜めの細かいハケ目調整である。外面は黒褐色、内面は明褐色を呈している。

各々の土器が出土した遺構は付表2に記したのでここでは省略した。



第47図 Pit 出土赤生土器実測図-1 (縮尺1/3)



第48図 Pit 出土弥生土器実測図-2 (縮尺1/3)

### 3 包含層の石器

J-10 i 地点から出土した石器は、多種多様の器種がみとめられており時期も縄文時代から弥生時代におよぶ。出土石器の60%は縄文後期の包含層に共存して検出された。そのほか住居址・土塁・溝・ピットなどからもわずかに出土している。表土層からは包含層出土の石器と類似形態をもつ石器の出土も見られるが、石器はローリングを受け二次堆積あるいは再遊離が考えられ、それらの所属時期は知りえなかった。以下包含層中の石器について器種ごとに述べることにする。

#### 石鎌（第49図1～19、第50図1～18、P.L. 19）

包含層から出土した石鎌の総数は破損品を含めて67点におよんでおり、2点のサヌカイト製をのぞき全て黒曜石で占められている。素材となった剥片への加工の差異から三類に大別できる。第I類は縄文時代に普遍的に認められるもので、二次加工が素材の全面および横断面は凸レンズ状を呈する。II類は二次加工は全面に施されず素材となった剥片の主要剥離面または大剥離面の一部が残されているものである。III類は素材となった剥片の両面に大剥離面、主要剥離面が大きく残されたものとした。

##### I類（第49図1～8）

1は長崎県針尾島産の黒曜石で、他はすべて佐賀県腰岳産のものと考えられる。1・2・4は形態的には二等辺三角形を呈し、全周に細かな剥離を施す。1は2・4にくらべ大きな剥離で挿入部にのみ細かな剥離を施している。4は挿入は小さく脚部は不揃いである。3は大まかな加工により形成された肩のはるタイプである。5は3ほどではないが中央部で肩をもつタイプで加工は右からの剥離が多くみられる。6は形態的には二等辺三角形を示すと考えられるが脚部は欠損していて定かではない。7の二次加工は両面とも大きな捕った剥離が施され基部は浅くて大きい。8は形態の異なる石鎌で、脚部が一方にしか形成されていない。

##### II類（第49図9～19）

9～11・15・16は形態的には二等辺三角形を示すものであ

器種	包含層		表土層		合計
	個数	割合	個数	割合	
石 鎌	15	22	2	3	17
刀	9	13	2	3	11
石 砕	32	48	3	5	35
分類不可	9	13	1	2	10
石 鋸	6	9	—	—	6
ワニム	11	16	1	2	12
石 刃	2	3	—	—	2
石 破	2	3	1	2	3
骨 破	23	34	4	6	27
サヌカイト	55	82	9	14	64
石 破	21	31	2	3	23
月 破	11	16	—	—	11
刀 破	26	38	4	6	30
石 破	54	79	11	16	65
石 鋸	2	3	—	—	2
石 鋸・骨 破	4	6	—	—	4
骨 刃	40	59	—	—	40
骨 破	52	76	27	41	80
骨 刃	40	59	13	20	40
石 鋸	15	22	3	5	20
サヌカイト	11	16	2	3	13
石 刃	1	2	—	—	1
合計	106	150	14	21	117

器種	包含層		表土層		合計
	個数	割合	個数	割合	
石 鋸	7	1	2	1	9
ノミ・空 鋸	1	1	1	1	2
石 刃	1	1	1	1	2
石 破	3	1	1	1	4
骨 刃	2	1	1	1	2
骨 刃	2	1	1	1	2
石 刃	—	—	1	1	1
石 刃	—	—	1	1	1
石 刃	—	—	1	1	1
石 刃	7	3	2	1	9

第2表 J-10 i 地点出土石器一覧表

るが、15は脚部、16は先端部を欠損している。9~12・15・17~19は剥片の打面側を基部としたもので、13・14・16は打面側を鎌の先端部としたものである。9・15はサメカイト質で他はすべて佐賀県鹿島産の黒曜石である。9~11・14・16~19は大剝離面（a面）の剝離は全面に及び、主要剝離面（b面）側の側邊あるいは脚部に剝離を施し主要剝離面を残したものであり、13・15は主要剝離面（b面）の剝離が全面に及び大剝離面（a面）側の加工は周辺部に施されていて、大剝離面が残されている。この事から縦長剥片が素材にされていると考えられ広義の剥片鎌と見なされる。14は一側邊に肩をもち、18は両側邊の中央に段をもつタイプである。

### III類 （第50図）

1~6・14~18は素材となった剥片の打面側を鎌の脚部とし、大剝離面（a面）側の加工は全周もしくは一側邊に及び、主要剝離面（b面）は先端部・一側邊または脚部に剝離を施し、僅かに大剝離面と主要剝離面を残しておりII類と同様に広義の剥片鎌である。16~18は鎌の脚部に素材のバルバスカーを残している例である。7~13は大剝離面（a面）に1~2本の稜線を有し、主要剝離面（b面）側の脚部もしくは先端部にのみ加工を施したもので、素材となった剥片の先端部を利用した石鎌であり、いわゆる剥片鎌と呼称されるものである。しかしながら8~11・13は先端部が破損していて明確でない。素材の剝離方向は一定方向もしくは上・下二方向をもつものがある。11は先端欠損後欠損部に並行に二次加工を施し削器的石器として利用した可能性をもつ石鎌である。抉入の形態から1~3は抉りが深いもので最大幅は基部端にみられる。また14~16は抉りが頭著に浅いものである。17の基部は平坦で脚部の抉入はみとめられず、18も基部は平坦に近いもので、17と同様平基式の石鎌である。

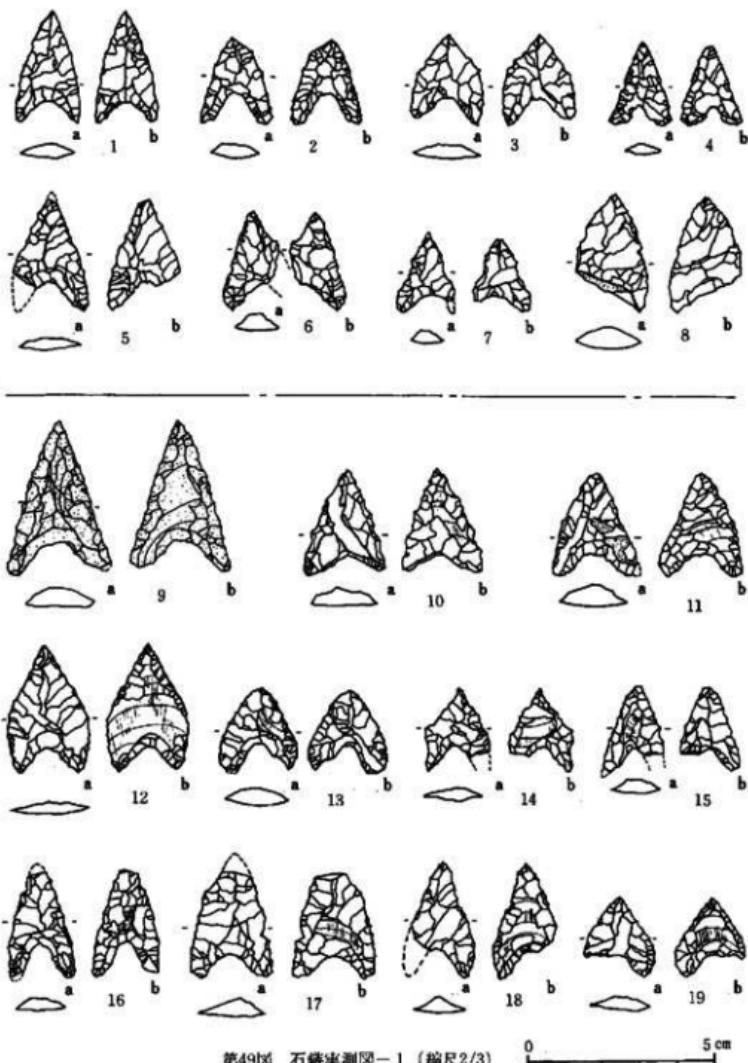
### 石鎌 （第51図1~5, PL. 24）

いずれも黒曜石の剥片を素材にしたものである。1はこの一点だけが打面方向に先端部をもつ不定形で厚めの剥片を利用し、刃部の加工は主として主要剝離面側から施されているが、刃部の先端は欠損している。2は一部に自然面を残す縦長剥片を素材に打面と反対の一端に両面から加工を施し細長い刃部を形成している。3は刃部と柄の部分が明確でなく片面から加工を施している。5も3と同様の形態をもつが刃部を欠損している。4は3・5に類似しているが刃部と柄の部分のノッチ状の境界が明確にわかる。刃部の先端は欠損している。

### つまみ形石器 （第51図6~12, PL. 24）

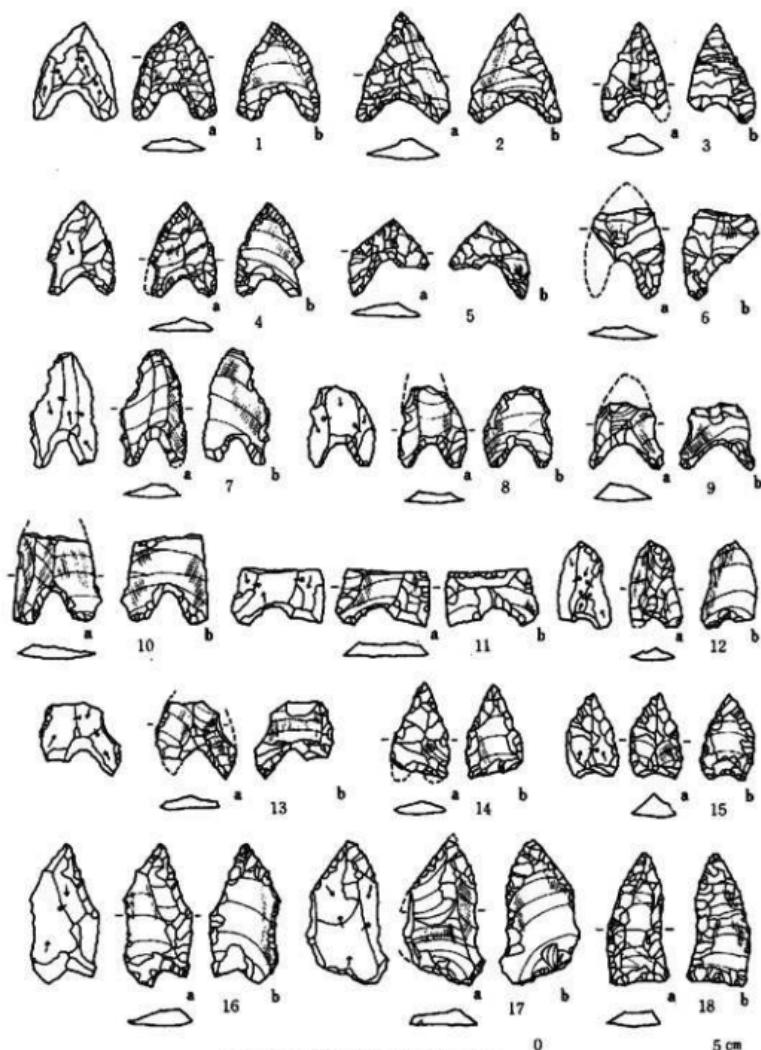
いわゆる“つまみ形石器”は10点で、8・10の様に抉りのつけ方が一方に深いものや、打面からつまみの部分までが比較的長い11の様な例もある。また6の様に縦長剥片の先端部に抉りがつけられ、バテナも進み、棱もかなりのローリングを受けた例もある。これは“つまみ形石器”的形態のバリエーションとして把握されるべきか否か問題となるが、一応同様に扱った。さらに7も剥片の先端を利用したと考えられ、打面は残っていない。これも同様に扱った。

註1) 片岡重「いわゆる『つまみ形石器』について」古代文化 22-10 1970



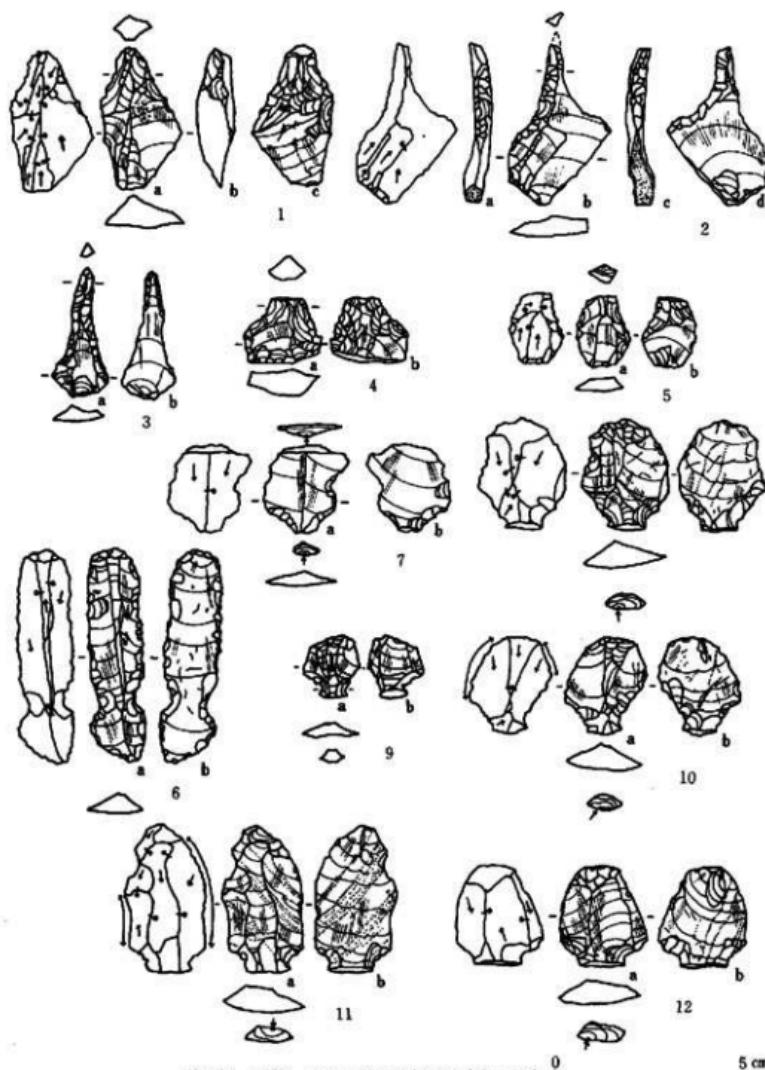
第49図 石器実測図-1 (縮尺2/3)

0 5 cm



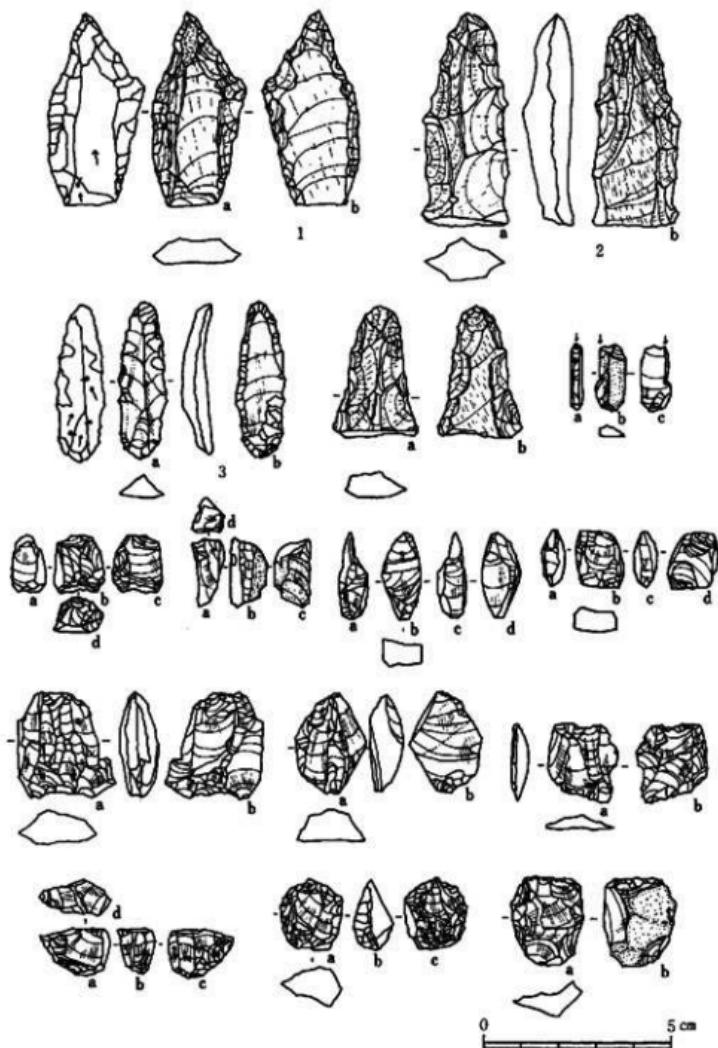
第50図 石器実測図-2 (縮尺2/3)

0 5 cm

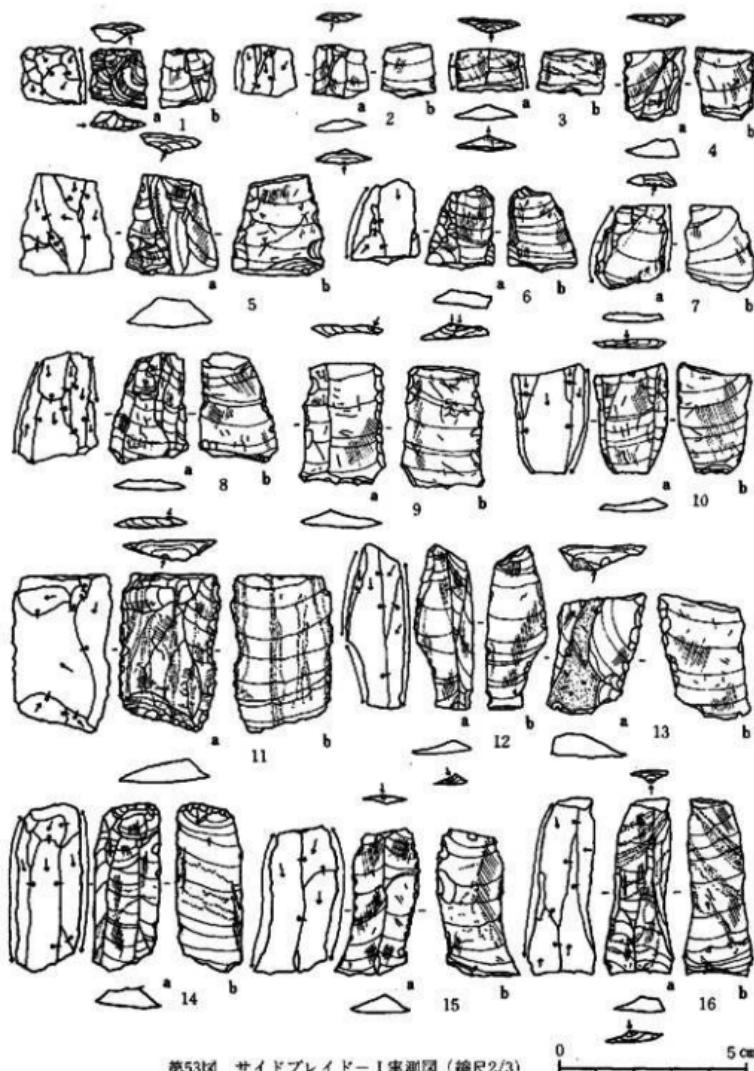


第51図 石錐・つまみ形石器実測図（縮尺2/3）

0 5 cm



第52図 尖頭器・彫器・楔形石器実測図（縮尺2/3）



第53図 サイドブレイドー I 実測図 (縮尺2/3)

### 尖頭器 (第52図1~4, P.L. 25)

図示した4点を含め6点出土しており、石質は3をのぞく總てがサヌカイト質安山岩である。1は先端部に自然面を残す縦長剥片を素材とし両面から周辺に入念な加工を施し鋭利な刃部を形成している。先端部の加工から石錐とも考えられるが全体的な形態から尖頭器とした。2・4は縦長剥片を素材にし打面を二次加工によってカットしている。a面はほとんど全周に加工を施しているが、b面では中央部に主要剥離面を大きく残している。3は黒耀石製の整った縦長剥片を素材にしている。a面においては先端部と基部の部分のみに加工し b面では、ほぼ全周に細かな加工を加えているが、a・b面とも中央部に素材の剥離面を残す剥片尖頭器である。

### 彫器・楔形石器 (第52図5~15, P.L. 24)

5は1条の楕状剥離を持つ单打彫器である。上端に3回の剥離と使用痕が観察される。6~15は両面に上下二方向から細長い剥離と小さな楕状剥離が観察され、一見彫器もしくは残核を彷彿させるが、剥離面から剥片はいずれも極端に小さくまたこの石器の上下両端に強い力が加わった事が観察される。形態的にはほぼ長方形を呈し、縦断面が凸状を呈する楔形石器である。6・8・10・14・15は上端に楕状剥離が認められ、下端に打撃によるつぶれた痕が観察される。9・11・13は逆に下端に楕状剥離・上端につぶれ痕が観察される。特に8・9・10などは彫器と考えられる剥離が観察されるが、上下の圧力と剥離から考えて彫器とはせず、楔形石器とした。7は、b面に2条の剥離が認められるが、下端からの剥離は認められない。

12はa面左側辺部に1条の楕状剥離を持ち下端に階段状の小剥離がみられ、b面では上下から大小の剥離が認められるが、断面が薄すぎるため他の石器とも考えられる。

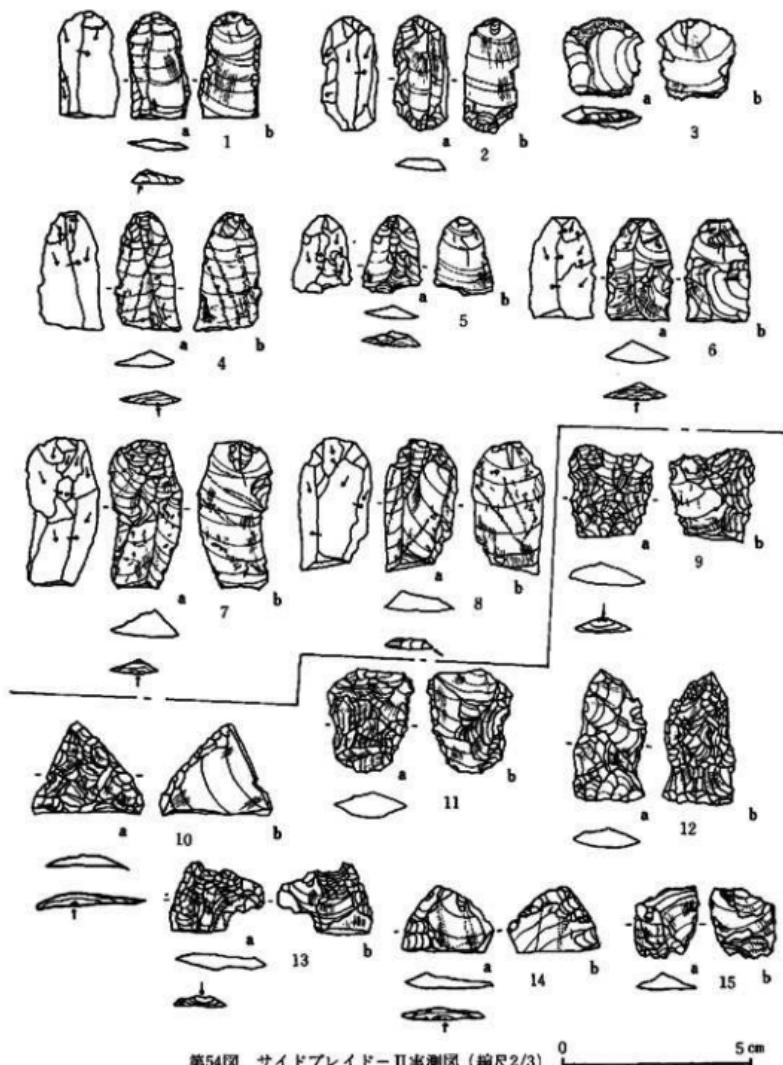
### サイド・ブレイド (第53図・第54図, P.L. 20)

黒耀石製の剥片石器の中で、整った縦長剥片を素材にして剥片の打面・末端あるいは側辺に加工を施した長方形もしくは方形を呈する小形石器の一群をサイド・ブレイドとして括し、縦長剥片に施された加工の差異によりI類・II類と大別した。I類は縦長剥片の一端ないし両端を折断によると推定される方法でカットを行なったものと、小さな調整剥離によって整形されたものとに細分できるが、いずれにしても縦長剥片を素材に一定の長さを得るために短辺部への加工が加えられていることが特徴である。さらにI類には短辺部の加工のみで素材となつた剥片の鋭い側辺を刃部としているもの他、側辺部にリタッチを施したものも存在する。次にII類であるが素材の両面に二次加工を施し長方形を呈する小形のもの、もしくは素材の片面に二次加工を施し長方形あるいは半月形に整えた小形のものを一括した。さらに全体的な形態・加工のあり方、素材などから細分する必要がある。しかし今回は大別のみでとどめておきたい。

### I類 (第53図・第54図1~8)

第53図1・2・3・4・5・7・9・10・11・13・15・16は方形もしくは長方形に形の整っ

<sup>(註1)</sup> 折断によると判断できる断面には、一点を中心にリングの折りがりが認められ、中にはバルブの残っているものがあり、一点に力が加わって剥離されたと考えられる。



第54図 サイドブレイド-II実測図（縮尺2/3）

0 5 cm

たもので打面側及び反対側の両端を意識的に折り取ったと考えられる加工が施され、さらに側縁には細かなりタッチがみられるものである。第53図6・12・14・18・第54図1～8は一端を意識的に折り取ったと考えられる加工があり、短辺もしくは側辺に細かなりタッチのあるもので長方形を呈する。なお意識的に折り取ったと考えられるのは図示した様に折断面には、すべて一方向からのリングが観察でき剥片の一点に力が加わったことを示唆しているからである。

#### II類（第54図9～15）

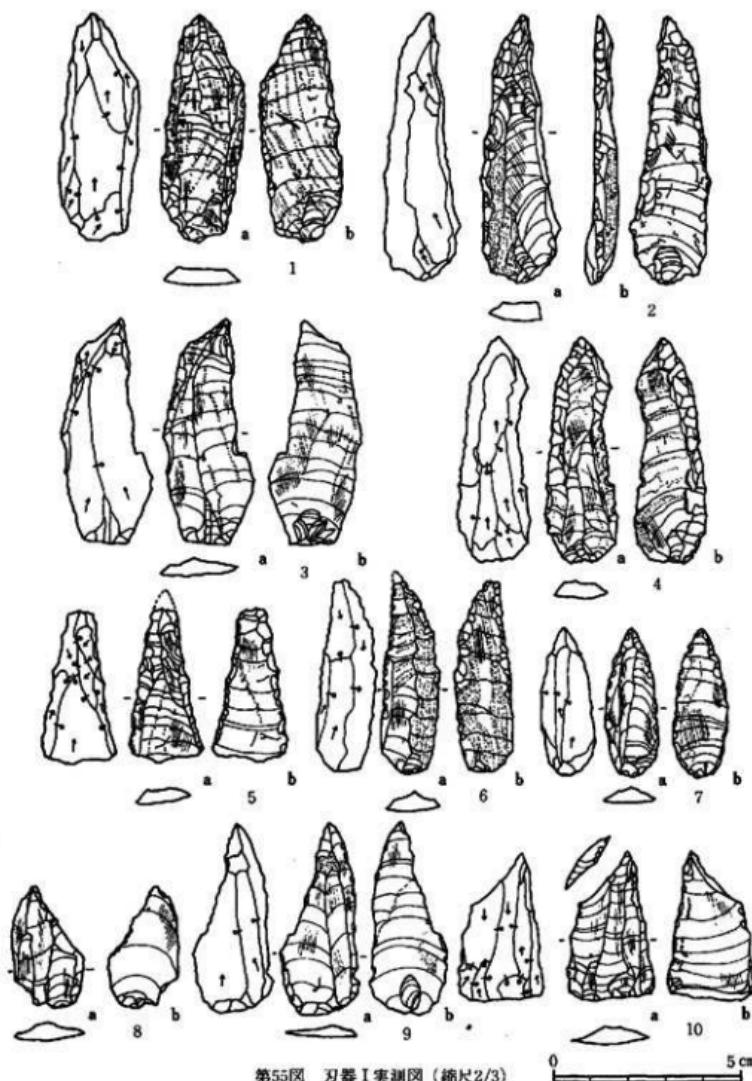
9・10・11は片面の加工が全面におよびもう一方の面は周辺部のみに二次加工が認められ、一端は切断されている。11は9・10と同様であるが折断面はなく長方形を呈する。12は両面に素材の剥離面を残さずに二次加工が全面に施されており形態的には台形もしくは長方形を呈している。14は一端が折り取られた両面の周辺部にのみ二次加工を施しているものである。13は小形の方形状で、一端は折り取られ両面に加工が施されているものである。15は13と同様に小形の方形状をなし剥片の一部に両面から加工が施された側辺に細かなりタッチが認められるものである。

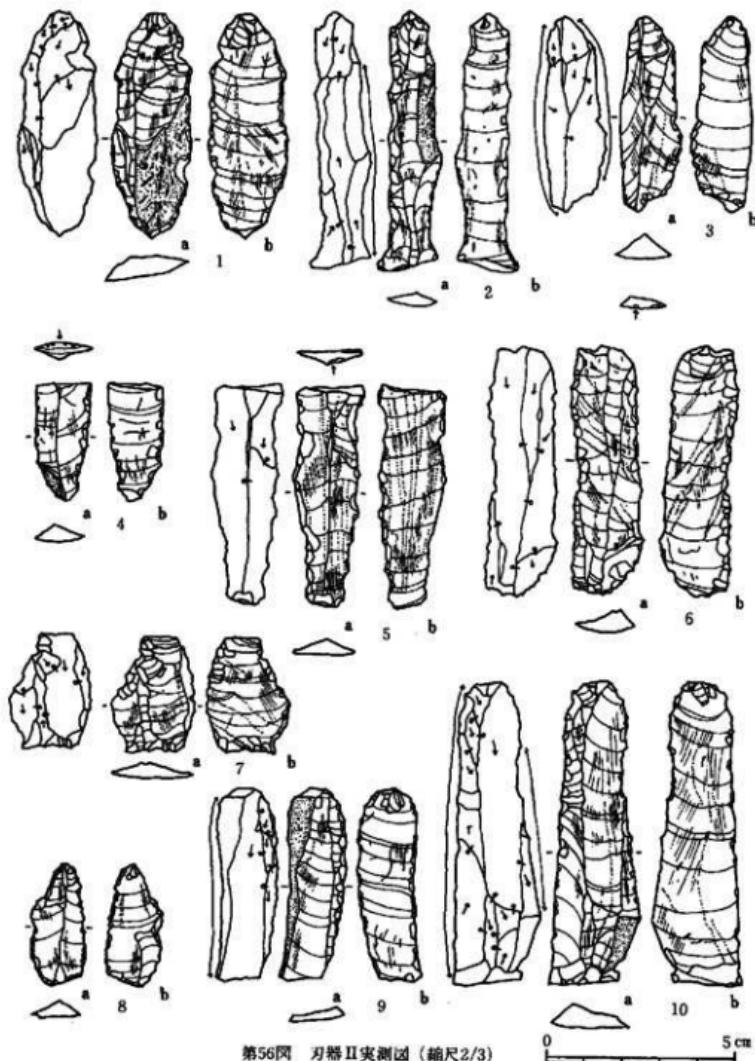
#### 刃器（第55図・第56図・第57図・第58図1～5, PL. 21・22・23）

黒耀石製の比較的大形の継長剥片を素材とし、その側辺部に沿って二次加工のリタッチや使用痕と判断される痕跡が観察されるものを他の剥片石器と区別し刃器として一括した。さらに加工および形状、使用痕から三類に分類をおこなった。I類は形のよく整った継長剥片を素材にし、その一端を一側辺あるいは両側辺から尖頭状に整形しているもので、ほぼ直線的な刃部とその延長線上に鋭いきつきをもち、他の刃器とは明確に区別されるものである。II類はI類と同様に継長剥片を素材としているが、二次加工は側辺部に沿ってあるいは局部的に施されている。I類に比較するとその剥離は不規則で全般的にやや粗雑な感じを受ける。さらに剥片の一端もしくは両端が意識的に折り取られたと考えられるものと、素材の形状をそのまま保つものとに細分できるが、今回は一括してII類とした。III類は二次加工が認められず、素材となつた剥片の側辺に沿って使用によると考えられる刃こぼれや擦痕が観察されるものである。II類と同様に細分できるが一括した。

#### I類（第55図1～10）

1～4・6・9は素材となった継長剥片の打面、バルブ・バルバスカー等が残されていて、素材の形状を生かし先端部及び側辺部の一部に二次加工を施している。また基部となる打面側には加工は認められない。1～4は先端の加工が特に入念に行なわれている。3・8・9は先端部のみに剥離が施されているもので、3・9の素材となった剥片の剥離は一方向である。さらに8は上下二方向からの剥離が認められる。7は小形の継長剥片を素材にして打面部をのぞく全間に小さな剥離が認められるものである。5・10は打面部を先端とし二次加工を施したもので、剥離方向は上下二方向である。5は主要剥離面と並行に擦痕が顕著に認められ、10の打面側の側辺は折り取られ彫器に近い機能をもっていると考えられる。





第56図 刃器Ⅱ実測図（縮尺2/3）



第57図 刀器重実測図(縮尺2/3)

## II類（第56図）

1・3・6・9は側辺部に二次加工・使用痕が観察され、素材の剥片は一方から剝離がなされている。3は末端が折断されていて、9のb面には擦痕が認められる。2・10は剝離された石核の大きさが窺え、石核の剥取方法も考察できる資料である。4・5は打面側が折断され側辺部に使用痕が認められる。折断面を見ると4は主要剝離面側から、5は大剝離面の縁から圧力が加わって折り取られているように観察できる。

## III類（第57図・第58図1～5）

第57図1～7は剥片の打面もしくは反対側を折り取ったもので側辺部に使用痕がみられる。8～11は折断せずに剥片の側辺を利用したことが窺え、側辺部の使用痕は顕著である。特に11は両側辺が著しく潰れている。素材の剝離方向は1～4・5・6・8・9が一定方向で、他は上・下二方向からの剝離である。第58図1～5は一部に自然面を持ち、打面は小さくて、平坦打面もしくは調整打面であり、いずれも側辺部に使用痕が認められる。素材は2・5が一定方向、1・4が上下二方向、3が上・下・横位の三方向からの剝離である。

## 縦長剥片（第58図6～11・第59図、P.L. 23）

全般的に小さく剝離方向が2～3の方向を持ちすこまわりの幅広い黒耀石の剥片を縦長剥片とした。これは刃器I～III類の縦に長く整った剥片と区別する為と、使用目的による意図が異なると考えたためである。また総体的に剥片の表面に自然面を残したものや幅広の剥片が多い。その内には僅かではあるが、使用痕の認められるものもある。

第58図6・7・9、第59図1～3・5・9は平坦打面を持ち形態的に幅広い不定形を示す。第58図8・11、第59図10は調整打面をもつものと考えられるが、打面は小さく判断できない。第58図8・10、第59図1・4・6は先端部と末端部が折断されているものである。

## 石匙（第60図1・2、P.L. 25）

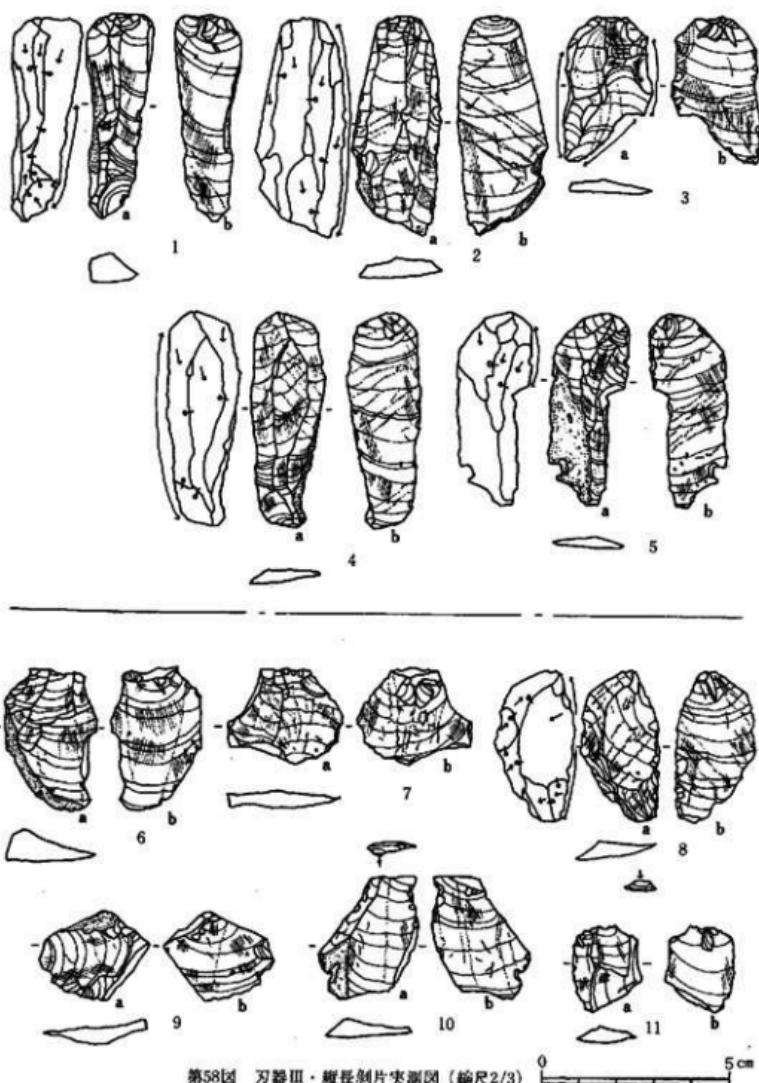
縄文時代の石器で、縦長・横長の削器・搔器につまみをつけたものをいわゆる石匙と呼称している。当地点においても石匙の存在が明らかであり、削器・搔器とは区分した。

1はサヌカイト賀安山岩の横長の剥片を素材にして刃部と考えられる一辺にb面からのみ小さな剝離を施しているのに対し、つまみの部分は両面から小さな剝離を施した縦型の石匙で、a面の右側は破損している。2は平坦な打面をもつ縦長剥片を素材にし、つまみの部分は両面から小さな剝離を施し形を整えている。また刃部はa・b面それぞれ対応する側辺に加工をなし断面が菱形になる様に仕上げている縦型の石匙である。

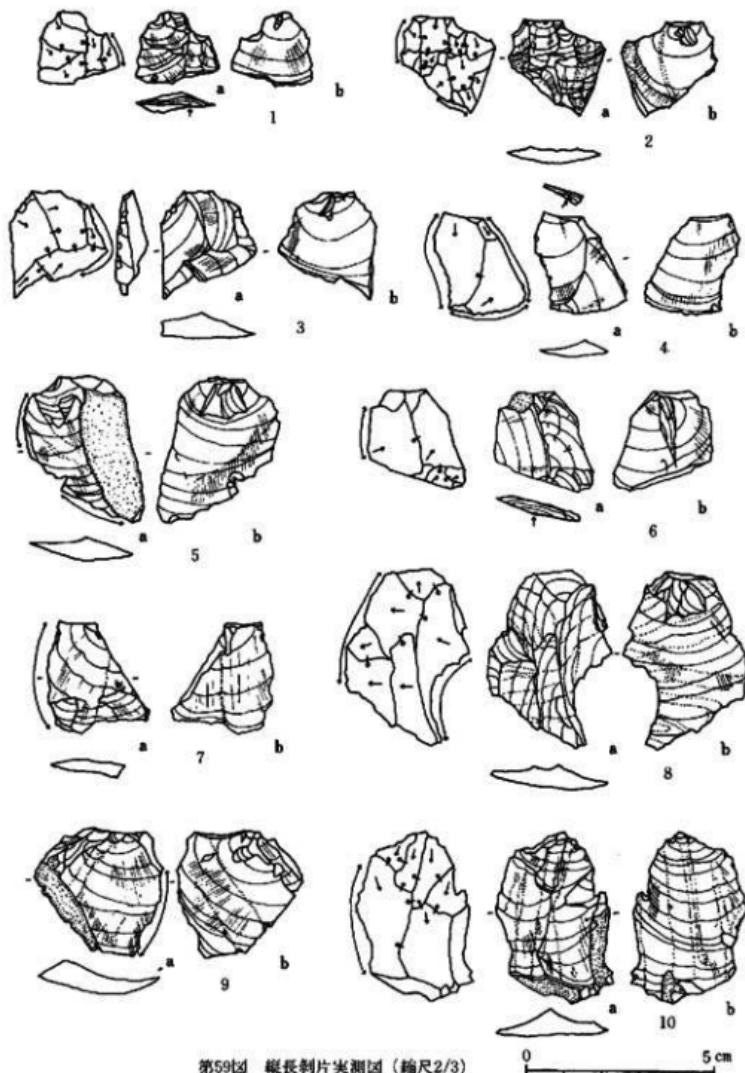
## 削器・搔器（第60図3～7・第61図・第62図、P.L. 25・26）

サヌカイト賀安山岩の大形の縦長剥片及び不定形な剥片の一辺または両辺に、片面あるいは両面に二次的剝離を施したものとされる。さらに全体的な形状、加工のあり方・素材などから分類する必要があるが、今回は細分しなかった。

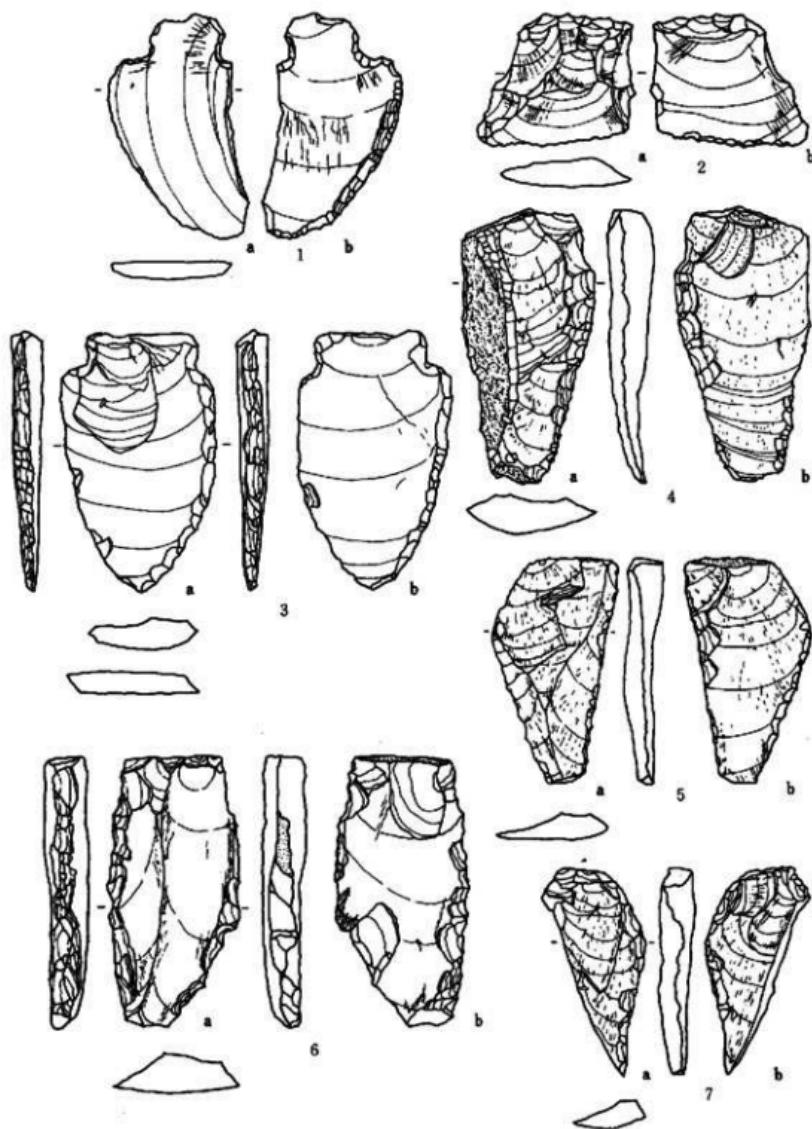
註1) ここでは「縦長剥片」という名前を用いたが、むしろ「剥片」として考えられるものであり、「縦長剥片」という名前を用いたことは私見として理解していただきたい。



第58図 刀器III・縫長剣片実測図(縮尺2/3)



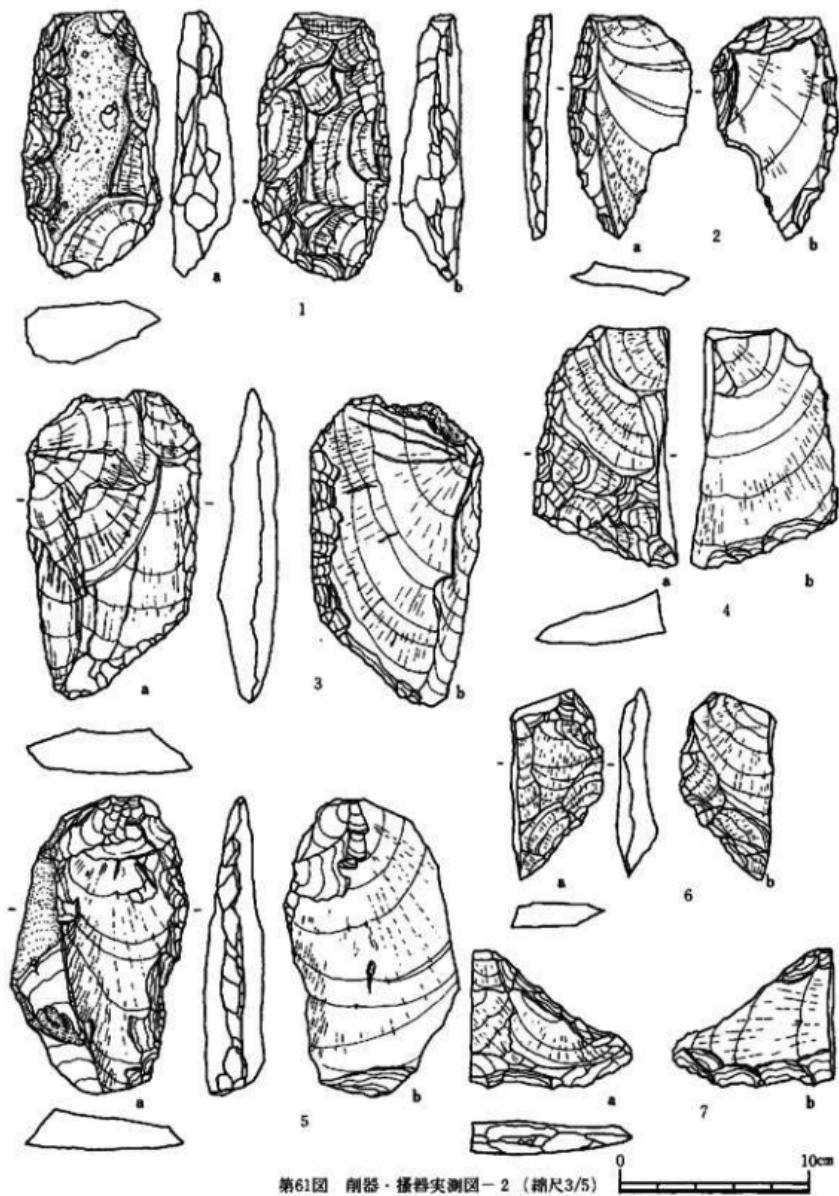
第59図 縱長剥片実測図（縮尺2/3）



第60図 石匙・削器・搔器実測図-1 (縮尺3/5)

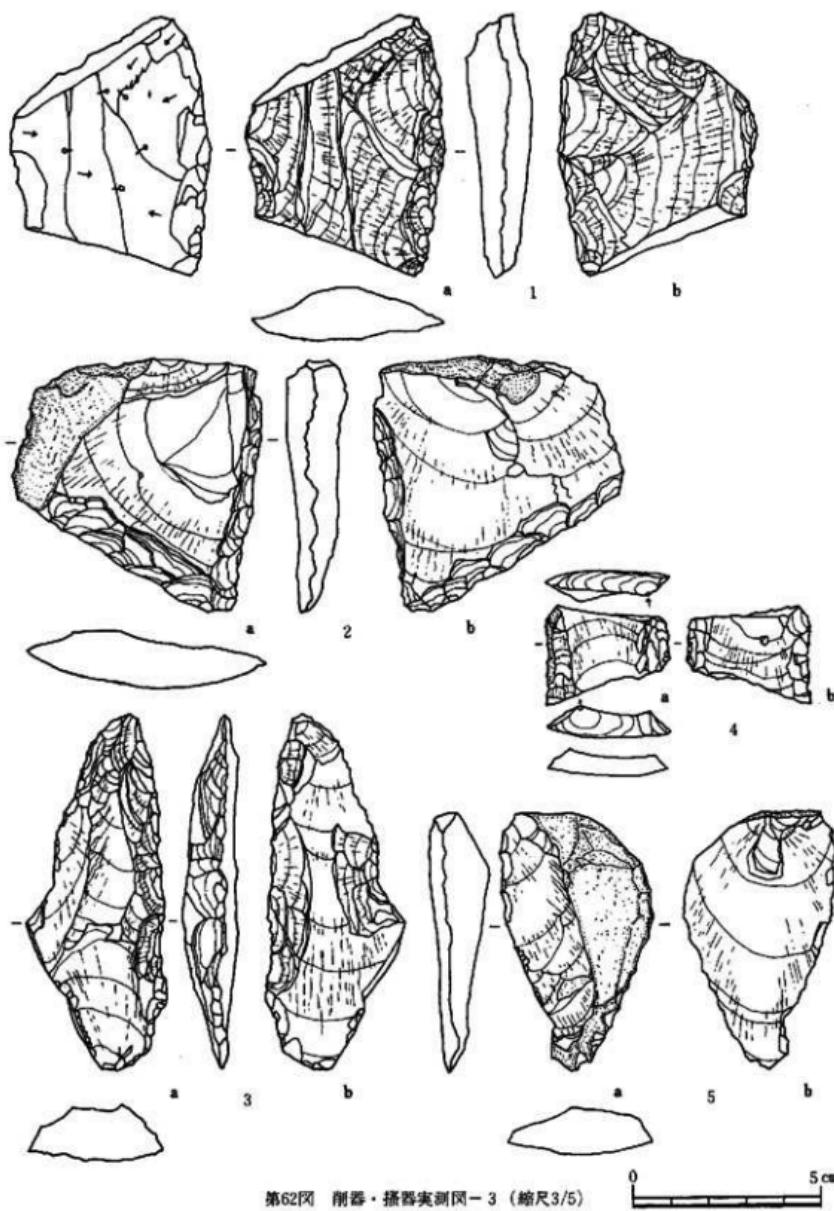
0 5 cm

## 3 包含層の石器



第61図 削器・搔器実測図－2 (縮尺3/5)

0 10cm



第62図 刮器・擦器実測図-3 (縮尺3/5)

第60図3・第62図5は不定形な剥片、自然面を持つ縦長剥片の側辺部、末端部に二次加工・使用痕が認められるもの、第60図4～6・第61図3・5は厚みのある縦長の剥片に側辺部のみ二次加工を加えた削器としている。第60図4～6・第61図3の剥取された石核は自然面が打面で、第61図5は調整打面である。第60図7・第61図6は半欠しているが側辺に両面からの二次加工によって刃部を形成している削器である。第61図1は厚い剥片あるいは残核を利用し、下端をのぞく側辺部・先端部に二次加工を加えている。この石器の素材が剥片とすればb面には主要剝離面が認められない程度二次加工を加えている。また残核を利用したとすれば一面からの剥取を主体とした石核であった可能性があり、それに側辺部に二次加工を加えて削器としたと考えられる。

第61図2・7は横型の石匙の可能性も考えられるもので、刃部は両面から加工を加えている。第61図4は平坦打面をもつ縦長の剥片の末端、側辺部に二次加工を加えた搔器である。第62図1は横幅の広い剥片の両面に大まかな剝離を加え、さらに細かな剝離で刃部形成をしている。また両端とも折断されている。第62図2は横幅の広い剥片の下部と側辺部に両面から二次加工を加えた搔器である。第62図3は先端部を尖頭状に加工し、一見ナイフ形石器を思わせる。一側辺部にも両面から剝離を施した搔器である。第62図4は両端が折断された縦長剥片で両側辺に二次加工をもち、サイド・ブレイド的な用途をもつと考えられる。

#### サヌカイト製剥片石器（第63図、P.L. 25）

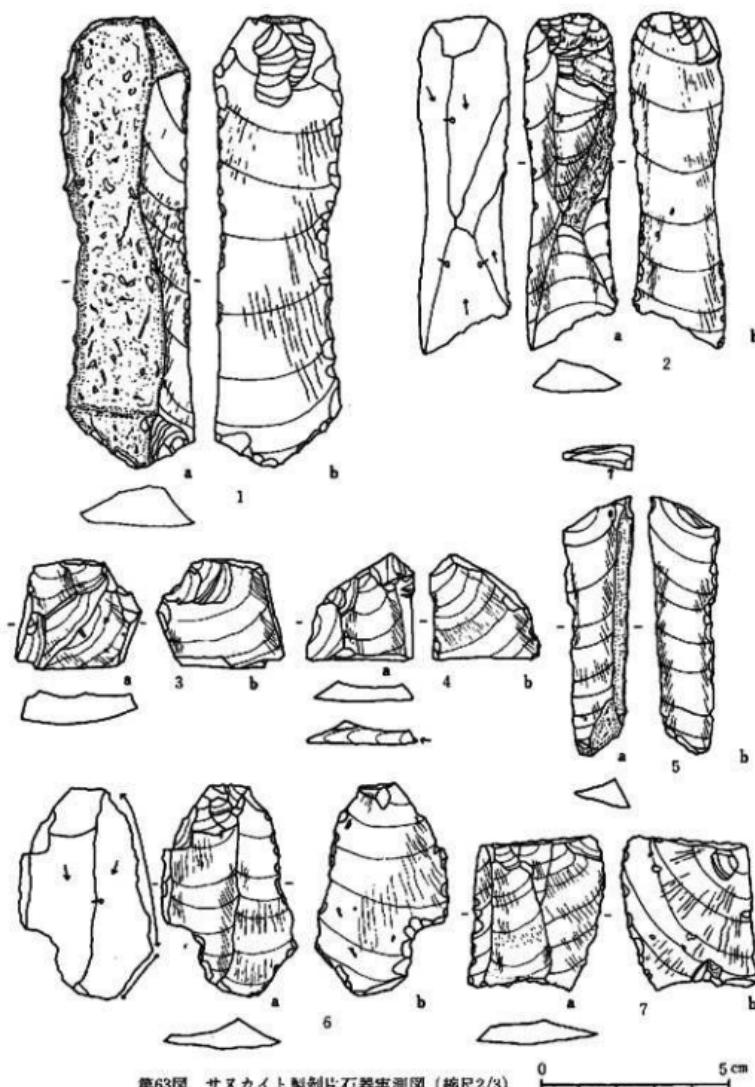
サヌカイト質の剥片の側辺部に使用によるためと考えられる剝離が観察できる石器を一括して削器・搔器と区別し剥片石器として分類した。

1は縦長剥片を素材にし上下両端に打面がみられ剥片の大きさから石核の大きさが窺える。a面は表皮を半分以上残しているが、側辺部には使用痕が認められ刃器としての用途を考えさせる石器である。2はa面に自然面を残す縦長剥片が素材で側辺部に使用痕が認められる。3はa面に表皮を残した縦長剥片の打面側を折断したもので側辺に使用痕がみられる。4・5・7は不定形な剥片の側辺に使用痕が認められるもので、5は末端が折り取られている。6は小さな平坦打面をもつ縦長剥片の側辺に使用痕が認められる。剥片の素材を生かした石器である。

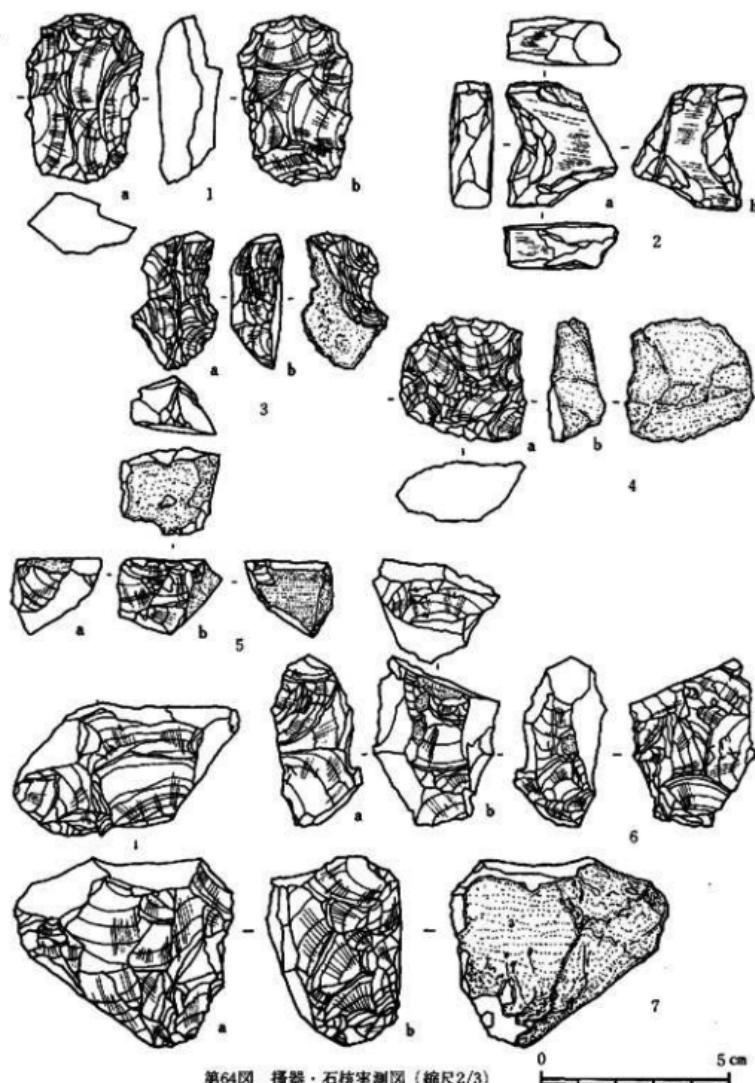
#### 搔器・石核（第64図1～7、P.L. 24・25）

石核は29点の出土をみたが、いずれも不定形をしたもので定形的な剥片を剥取した石核とは考え難いものである。搔器は残核を利用したものであり石核と同様に取扱った。

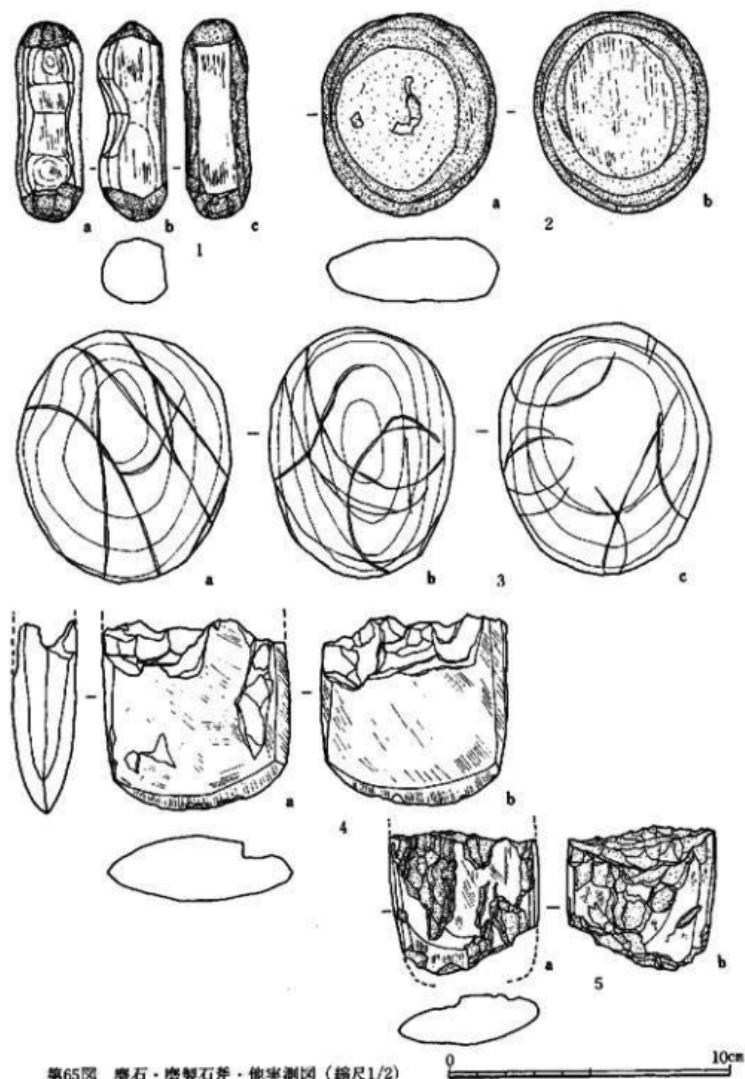
1・3は残核を利用した搔器で一部に自然面を残し、大きな剝離によって形成している。2は砂岩製の砥石と考えられる破片を利用したコンケーブ・スクレイパーである。抉入した一辺に両面から小さな剝離が施され、刃部を形成している。この刃部には使用痕と考えられる磨滅が顕著である。4はa面から連続的に剥取している黒曜石の残核である。b面側面に自然面を持ち、剥取されている剥片はいずれも不定形なものである。5は小角礫を原材とする石核で、原礫面を打面として一方向から剥片を剥取しているが、剥片は不定形である。6は不純物が多く混った黒



第63図 サヌカイト製剝片石器実測図（縮尺2/3）



第64図 挿器・石核実測図(縮尺2/3)



第65図 磨石・磨製石斧・他実測図（縮尺1/2）

耀石を原材にした石核で、上・下・斜・横位を打面として秩序なく大小の剥片をおとしている。7は比較的大きな角礫を原材にした石核で、両側面の剥離は上下の二方向から行なわれ剥片剥取面（a面）は上位から2面の剥取をもち、下位には調整剥離がある。

#### 磨製石器（第65図1, P L. 27）

用途不明の磨製石器である。凝灰岩の柱状の素材の両端に粗い剥離を施し周辺の側面を研磨し形を整えている。b面の中央部は抉りこみが有り研磨されている。この抉り部分が使用によるものか、あるいは石器を製作上のものか明らかではない。さらにc面の中央部も平らに研磨されている。抉り部以外の研磨は、石器の長軸に平行であり、これが使用痕の可能性もあるが識別は不可能である。両端にも部分的に磨耗が見られるが、これも使用の為か製作上のものか明らかではない。

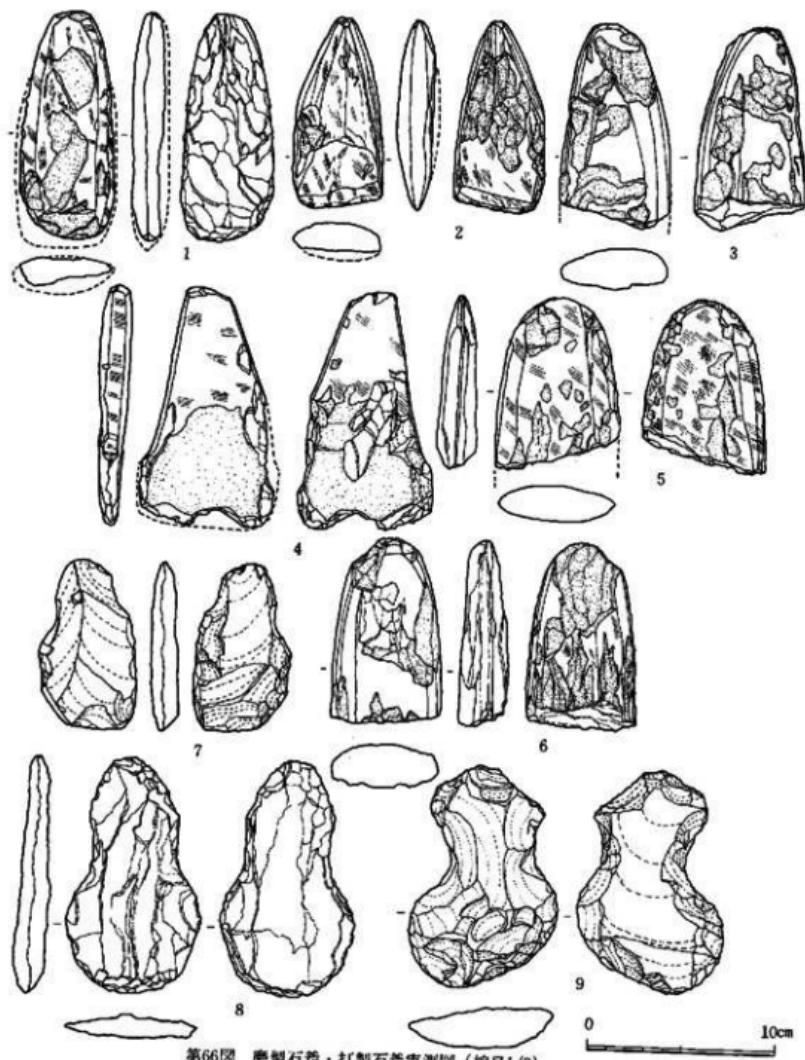
#### 磨石（第65図2・3, P L. 27）

2は凝灰岩の扁平な円盤でa面の中央部には浅い凹みがあり打痕が観察できる。しかし b面は平らに溝されているところから敲石として使用し、さらに磨石としての機能を併せ二様の用途をもった石器と考えられる。3は硬質砂岩の厚味のある円盤で、周辺は磨かれ平らになった部分もあるが、浅い刻線が表面の部分的にみられるところから、すり削しの機能と砥石的な用途をもった磨石と考えられる。

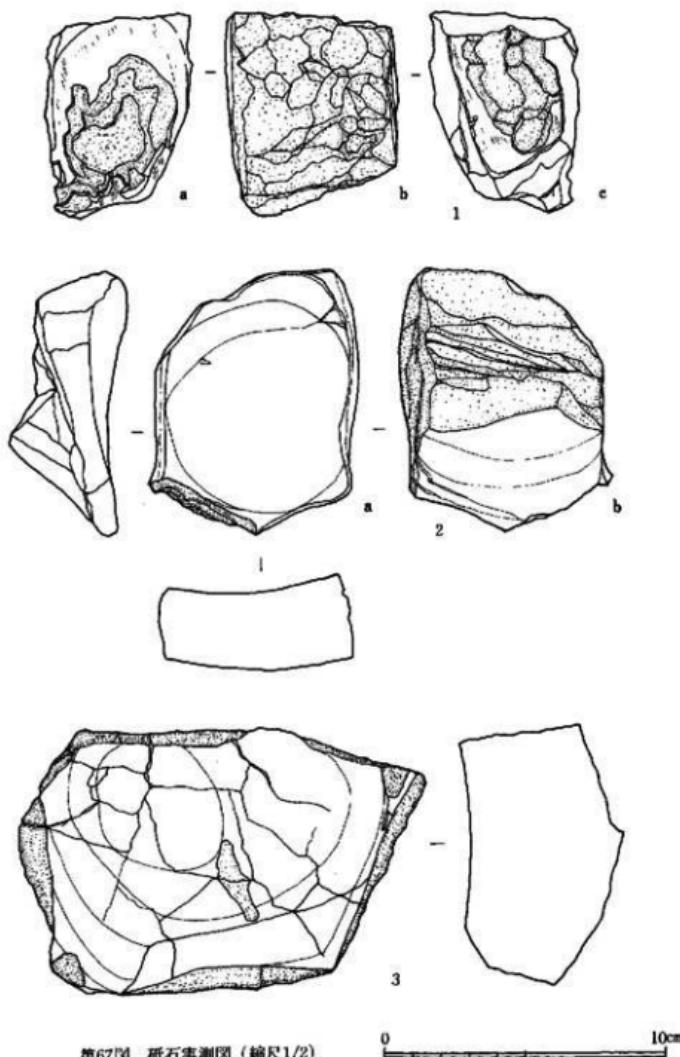
#### 石斧（第65図4・5, 第66図, P L. 27・28）

石斧は全磨製石斧・半磨製石斧・打製石斧・扁平打製石斧とに大別でき、さらにそれぞれが形態的に細分できるが、ここでは磨製石斧・打製石斧とに区別した。

第65図4・5は撥形の形態を示す磨製石斧と推察されるが刃部以外は欠損していて形状等は明らかではない。第66図1はやや扁平な撥形を示す磨製石斧であるが、刃部とb面の磨製の部分は大きく剥落している。2は小形の再生磨製石斧でa面の一部とb面が欠損し、その後欠損した部分を再度研磨し刃部を形成している。3・5・6は撥形の磨製石斧と考えられるものでいずれも刃部を欠損している。4は扁平で板状の硬質砂岩を素材に撥形に仕上げた磨製石斧と考えられる。一部に火を受けた痕跡があり刃部部分が大きく剥落し、磨製が刃部にまで及んでいたのか明らかでない。撥形の範囲に一応いたが肩をもつところから石斧もしくは別の特異な石器とも考えられる。7はやや扁平な安山岩を周辺から調整した扁平打製石斧と考えられる。刃部部分は欠損していて、上部の両側面のノッチ状の磨耗は着柄の際のくびりの為か否か現状では識別は不可能である。8は凝灰岩のやや扁平な素材を使用して周辺を大まかに調整しノッチ状の浅い抉りをいれ分銅型に仕上げ、さらに刃部と考えられる末端部にa面から小さな剥離をくり返している。b面の調整は周辺部のみで全体に及んでいない。9は安山岩の比較的厚手の剥片を素材にして周辺に大まかな剥離を施し8と同様分銅型に仕上げている。ノッチ状の抉りは8に比べ顕著で、刃部はさらに調整を施し b面に大きく主要剥離面を残している。



第66図 磨製石斧・打製石斧実測図（縮尺1/3）



第67図 稀石実測図（縮尺1/2）

### 礫石 (第67図)

1は安山岩製で砥石面はa・c面に僅かに残っているだけで破損部も多く本来の形状・大きさすべて不明である。2は断面が長方形を呈す、小形で比較的形の整ったきめの細い砂岩製で側辺が僅かに破損している。a面の中央部が、ゆるやかに凹んで滑らかな砥石面を形成している。3は比較的厚手の砂岩を利用したもので、表面はゆるやかに凹んでいる。これも断面は長方形を呈し、僅かだが破損している。

## 4 遺構の石器

### 石鎌 (第68図1~6, PL. 19)

1・2・6はII類とした形態を持つ。1はa面に自然面を持ち脚部を破損。2・6は一部に主要剝離面を残し他は加工で整えている。3・4は両面の側辺部と脚部のみに加工を加えたIII類の石鎌である。5は形態的に二等辺三角形を示すと考えられるI類の石鎌で脚部欠損。3はサヌカイトで他は黒曜石。1・6はPit 119, 2はPit 115, 3はPit 111, 4はPit 105, 5はPit 139。

### つまみ形石器 (第68図10・11, PL. 24)

10は縦長剥片を素材とし、抉入部には両面からの剝離が認められる。加工の具合から石錐の破損品とも考えられるが、一応つまみ形石器として上げておきたい。11は抉入部の最深部で折断されたものではなく折断する際の失敗例と考えられる。ともに黒曜石が石材で、Pit 19出土。

### 楔形石器・彫器 (第68図7・8・第70図3, PL. 24)

7は下端に横状剝離が認められ上端には打撃によるつぶれた痕がある。一見彫器を思わせる。8は両面に上下からの剝離が認められ、ほぼ長方形を呈す。70図3は上下・横位からの剝離があり2本の幅状剝離をもつ彫器である。7は土塙、8はPit 38, 70図3はM-1出土。

### サイドブレイド (第68図9・12~15・第70図1, PL. 21)

68図9・12~14は一端及び両端が折断され側辺部に僅かな二次加工・使用痕の認められるI類である。68図15・70図1は素材の周辺に粗雑な剝離を施したII類のサイドブレイドである。68図9・15はPit 19, 12はPit 106, 13は土塙, 14はPit 144, 70図1はM-1出土である。

### 刃器 (第69図1・2・5~9・第70図2・4~7・9, PL. 22)

69図1・2・7・70図4~7は素材の打面もしくは反対側あるいは両端が折り取られ側辺部に僅かだが使用痕が認められる。69図6・8・9・70図9は打面は小さく平坦打面を有する縦長剥片を素材にしたもので、ともに使用痕が認められ、69図8・70図9はa面に自然面を残している。いずれもIII類の刃器である。5は素材の一端が折り取られ、側辺部に二次加工・使用痕が観察できるII類の刃器である。69図1・9・70図9はPit 19, 69図2はPit 156, 69図5はPit 1, 69図6はPit 138, 69図7はPit 14, 69図8はPit 71で他はM-1出土である。

**縱長剥片** (第69図3・4、第71図、PL. 23)

69図3・4・71図1・2・5・6・8は平坦打面もしくは調整打面を持つ幅の広い不定形な縱長剥片で、3・4・71図5は使用痕が顕著である。71図3・4・7・9は打面が小さく判別できなく、一定の剥離方向を持つ幅広の剥片である。69図3はPit 1, 69図4・71図1・7・8はPit 19, 2はPit 79, 3・4はPit 144, 5はPit 149, 9はPit 106出土である。

**削器・剝片** (第68図17・第73図1~5、PL. 25・26)

68図17は自然面を残す幅広の剥片の一端に二次加工を施し、全局に使用痕がみられ、末端が折断された黒曜石の削器である。70図1~3はサスカイトの縱長剥片を素材として両側面に二次加工を加えている。特に1・2は主要剥離面側に二次加工を加え、3は下端部を鋭利にする様な加工が認められる。4は安山岩製の横巾の広い剥片に二次加工を加えているが、特にa面右側面に集中している。5は安山岩製の剥片である。68図17はPit 119, 70図1はPit 17, 2はPit 14, 3はPit 78, 4はPit 136, 5はPit 1。

**石核** (第68図16)

黒曜石の小形の角礫を原材にし、一方向より上下の自然面を打面として剥取していしている残核である。a面に側面加工が認められ他は自然面を大きく残している。Pit 19出土。

**打製石斧** (第70図8・10、PL. 26)

8・10ともに安山岩を素材にした扁平打製石斧片で、8は上端を10は下端を欠損していて形状は明確でない。8は表皮を残している。8はM-1, 10はPit 19出土である。

**石庵丁・石鎌** (第72図1~4、PL. 27)

1の形態は半月形を呈し、欠損部から考えて大形の石庵丁である。研磨は全体に及び、穿孔は右からが主体である。2・3は両端が欠損しているため明確ではないが、小形の半月形石庵丁と考えられる。1・3が頁岩、2は硬質砂岩。4はa面に剥離面と刃部を形成し、b面は節理面をそのまま利用した頁岩製の石鎌である。1~4はM-1出土。

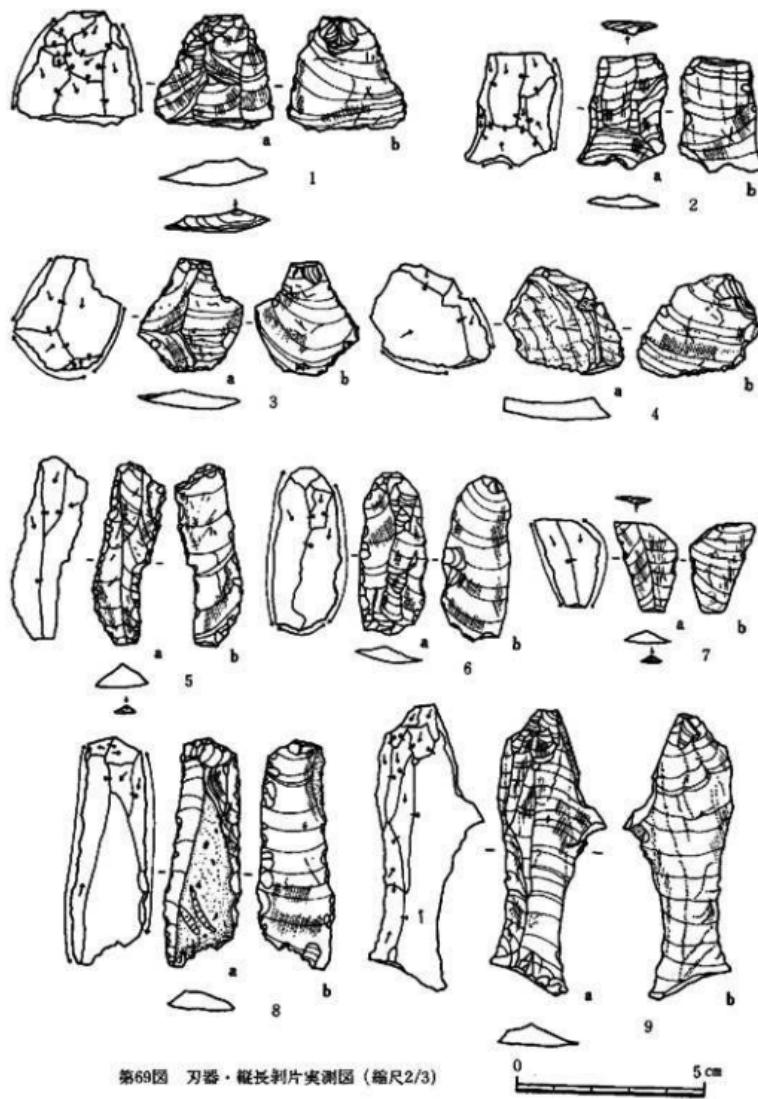
**磨製石器** (第72図5~7・第73図6~8、PL. 28)

72図5はやや扁平な蛇紋岩を利用した小形の石ノミ形石器で、断面は楕円形を呈する。上端は欠損しているが全磨製と考えられる。6は上下が破損し、全体の形状等は不明であるが両面とも研磨された硬質砂岩製の石劍と考えられる。7は破損しているが穂が潰れる程すり潰された輝緑凝灰岩製の磨石である。73図6は板状の練泥片岩を素材にした扁平な磨製石斧で、上端は欠損している。現存部は全体に研磨されているが、部分的に剥落し、特に刃部の研磨は顕著である。7は撥形の形態を持つ磨製石斧と思われるが、刃部の欠損のため不明。蛇紋岩製で研磨は全体に加えてある。8は扁平で比較的大形の砂岩製の砥石である。断面は長方形を呈し、両面・側面とも使用されたきめの細いものである。72図5・73図8は住居址、72図6はM-2, 72図7はM-1, 73図6は土塙、7はPit 14出土。

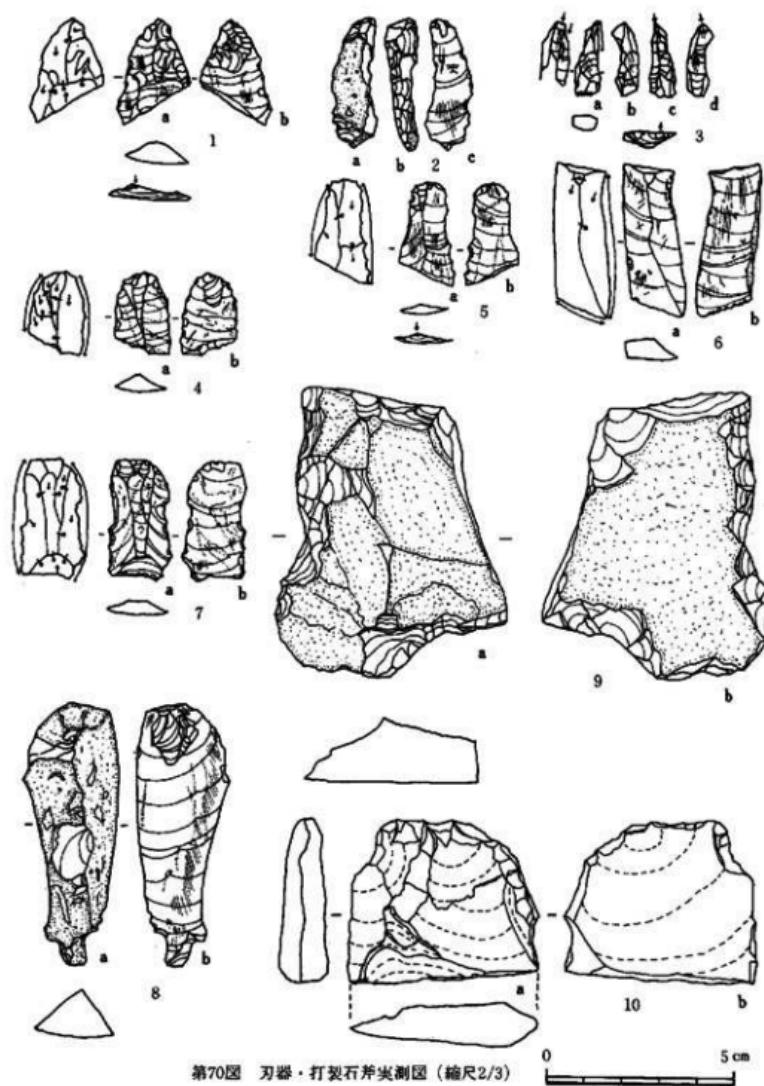


第68図 石鏃・横形石器・つまみ形石器・  
サイドブレード・石核・搔器実測図（縮尺2/3）

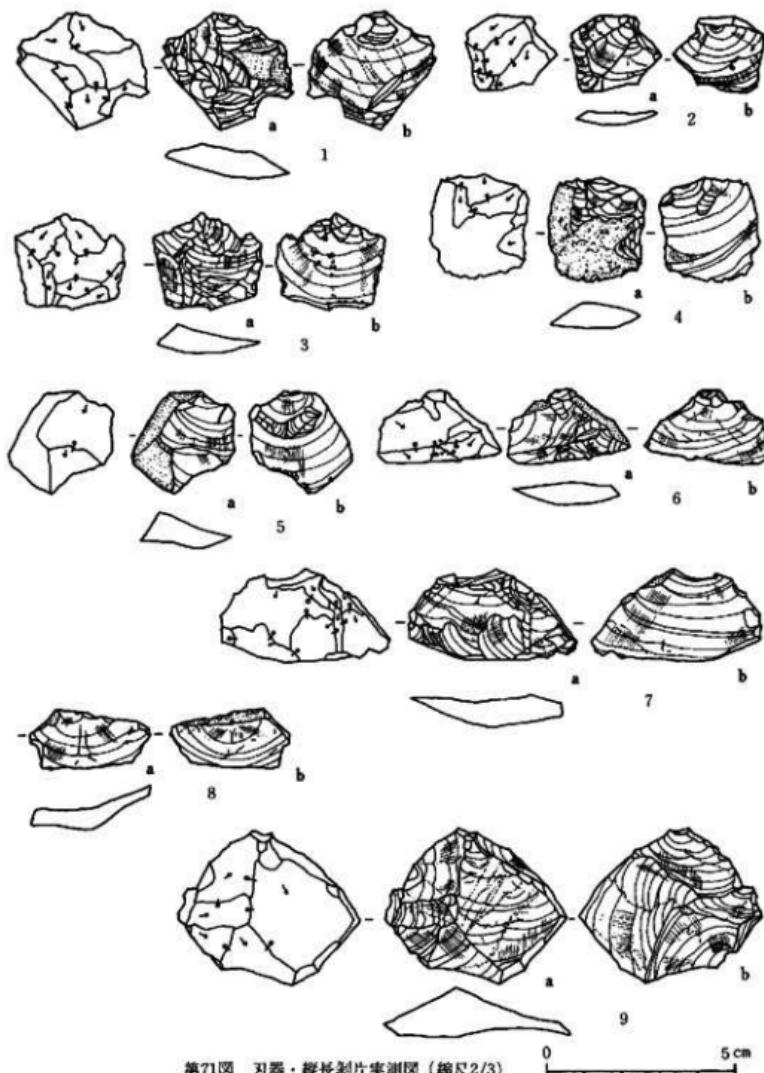
0 5 cm



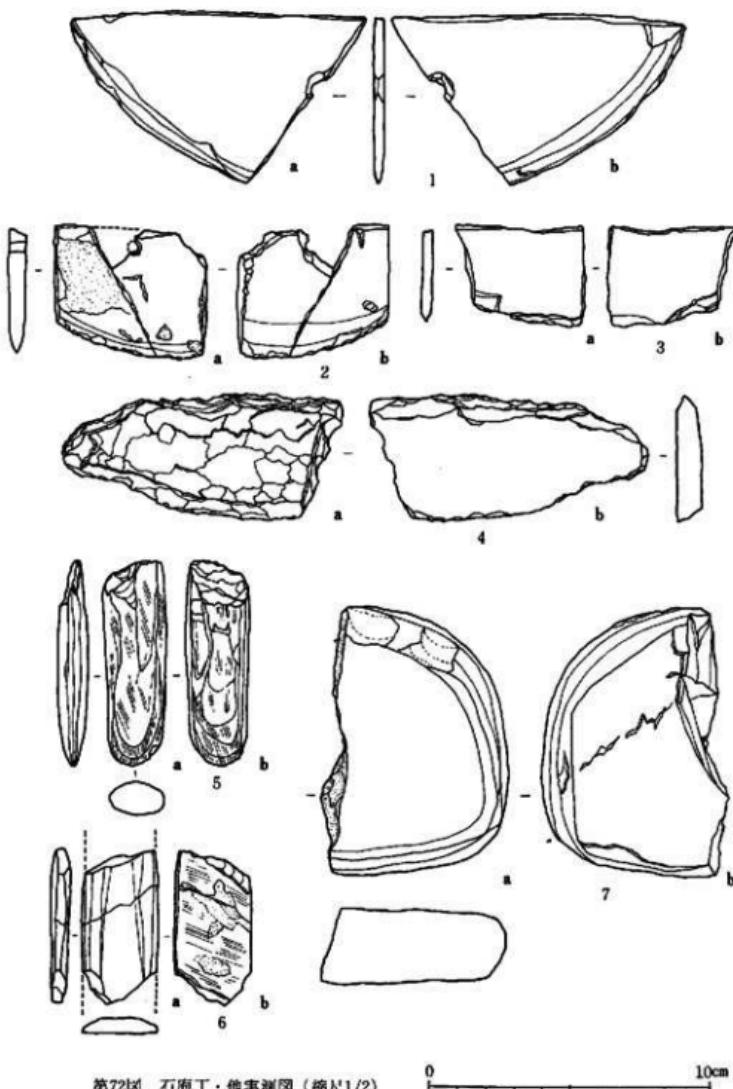
第69図 刀器・縦長剣片実測図（縮尺2/3）



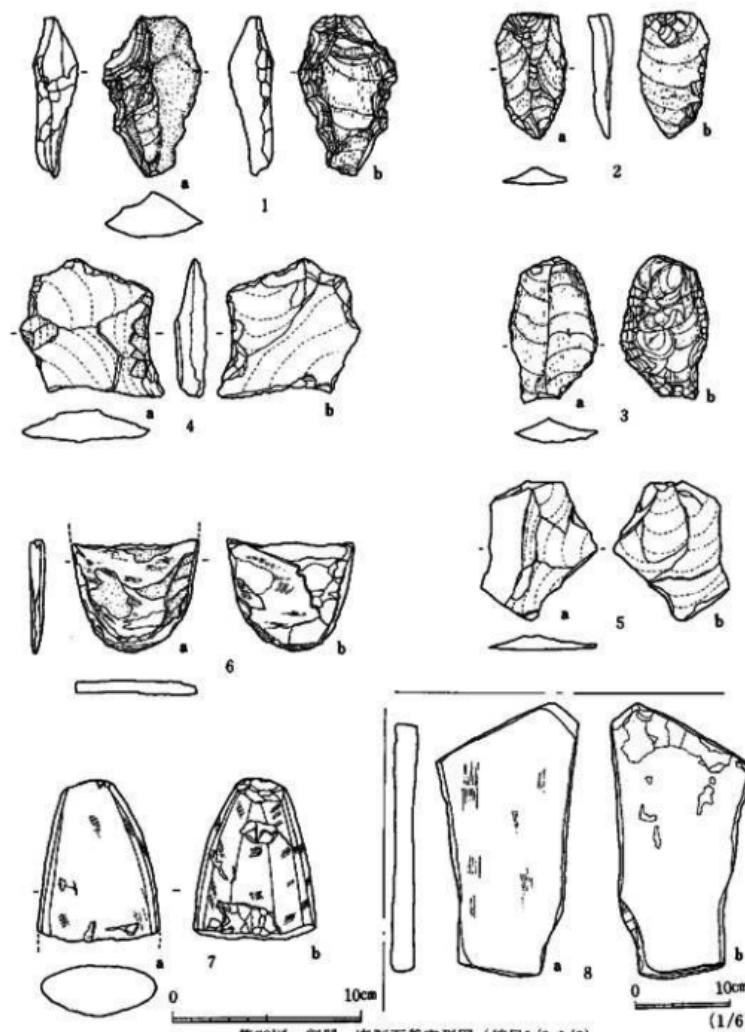
第70図 刀器・打製石斧尖削器（縮尺2/3）



第71図 刀器・縦長剥片実測図（縮尺2/3）



第72図 石庖丁・他実測図（縮尺1/2）



第73図 刮器・恣製石斧実測図（縮尺1/3・1/6）

## 第5章 まとめ

四箇周辺の緊急調査は2年目を迎える。本年度4地点の発掘調査を行なった。いずれも個人住宅の増築・新築にともなうもので、それだけ宅地化が進んでいることをしめしている。(第3図) 本年度の調査地点は住宅公団の造成に伴なって調査された四箇遺跡の南側に隣接したところで、J-12a地点を除いた3地点は昨年度調査したJ-10a~10g地点の北側にある。四箇周辺地区の旧地形は昨年度の報告書の中にまとめJ-10b地点が四箇遺跡A地点をのせる微高地の南端にあたり、微高地はJ-10b地点まで広がると考えていたが、本年度のJ-10i地点の調査はこれを裏付けたものである。更にJ-10h、J-11a地点で微高地の東西の端部が確認された。従ってA地点の微高地はJ-11a、J-10b、J-10hの3地点をむすぶ範囲に広がっていたことがわかる(第2図)。J-11aとJ-10h地点をむすぶ微高地の東西幅は約60mである。

J-11a地点では微高地の東側に幅6mほどの旧河道が発見され、南西から北東方向への流れが確認された。その結果微高地を取り囲む2つの流れがあることが判明した。一つは微高地の西側の南東から北西方向への流れで、昨年度調査したJ-10a~f地点の杭列はこの流れに沿って構築されたものである。他は微高地の東側の南西から北東方向への流れで、J-11a地点の北東に位置するC地点の杭列はこの流れに沿って構築されたもので、その上流はJ-10e地点付近から分れたものであろう。2つの旧河道は縄文時代から古墳時代までは流れのあったことが確められている。

縄文時代における微高地の地形は平坦でない。A地点には12×45mの孤状の凹地があり、縄文後期後半の遺物を包含する特殊泥炭層がある。I-11区の都計道路域にも凹地が検出されている。J-10i地点の西側には池状の凹地があり西側隣接地へ広がっていることが認められた。このような池状の凹地の間に縄文後期後半の集落がいとなまれており、Pit-14・19のように遺構の一部が残っている。遺構は比較的低くなつたところに掘りこまれたもので、微高地の高い部分にあつたと思われる住居址などの主要な遺構はすでに削平されて残っていない。

弥生時代の包含層は中央部のあさい凹地に残っているのみで、遺構はこの地点の住居址と南西隅で溝の一部を検出したにすぎない。他は削平されピットとして残っている程度である。J-10i地点の西側にも弥生時代のピットが認められ、縄文後期後半に池状を呈していた凹地は弥生時代の集落がいとなまれた中期までには埋まり、平坦になっていたことがわかる。四箇遺跡A地点の特殊泥炭層は縄文晩期の土器を含む大量の土砂で埋まり、その上に弥生時代の遺構がある。J-11a地点から検出された弥生時代の溝は北へづびており、微高地全体に弥生時代の遺構が広がっていたことがうかがわれる。

J-10i地点の遺物出土状態は付図-2にしめしたが、P-912、1050、1350のように全体の

%以上が残り完形に復元できるものがあり、付近に遺構の存在したことが推定される。遺物は、南東から西の低いところへ扇形に広がっている。縄文前期～弥生後期の土器はローリングを受けた小片が多く、縄文後期後半の包含層に混入している。微高地と低地との比高差があまりない四箇のような低地遺跡では微高地全体が冠水するようなことがたびたびくり返されていたと思われ、このような際にもたらされたものであろう。

次に J-10 i 地点から出土した縄文後期後半の土器についてまとめておこう。

今回の調査で精製土器と粗製土器の組合せをセットとして把握できるのは Pit-14 の出土土器（第39図）と Pit-19 の土器（第40～42図）である。Pit-14 と Pit-19 の上器を対比すると、精製土器では第39図-1と第40図-3が同じ文様・器形の浅鉢形土器であること、粗製土器では39図-7と41図-5がほゞ同形で、39図-4～6と41図-1～3が同じ器形をしめすことがわかる。従って Pit-14・19 から出土した精製鉢形土器（第43図-5）と精製浅鉢形土器（39図-1・2、40図-3・4・5～9）と粗製深鉢形土器（39図-3～8、41図-1～5、42図-2～8）及び粗製浅鉢形土器（41図-6・7）はこの遺跡における同一時期のセットと考えることができる。これらの土器を基準として他の土器を比較検討することにしたい。

浅鉢形土器の29図-2と30図-1は40図-5に、29図-3は40図-6に対比され同時期の土器と考られる。28図-1～3は39図-1と40図-3・6と同形のもので、同時期と考えることができよう。28図-4・5、29図-1は胴部上半に粘土をはりつけて肥厚させ肩部に稜線をもつ鉢形土器で、28図-1～3、39図-1、40図-3・6のような「く」字状を呈するものとは異なっているが、ほゞ同時期とみてよいのであろう。30図-5は40図-7～9と同じ土器で、30図-3・4も同じ時期の土器であろう。従って浅鉢形土器は29図-7・8の小片を除けばほゞ同時期のものと考えることができる。

次に鉢形土器と浅鉢形土器を対比してみると施文法が同じなものや器形の特徴が一致するものがある。25図-1は、28図-2と施文法を同じくする鉢形土器である。25図-6は28図-3に類似した深鉢形土器で、21図-3～5の胴部に粘土をはりつけて肥厚させ、「く」字形に屈曲する器形は28図-4・5、29図-1と同じ特徴をもつものである。20図-1や22図-4・5にみられる磨消縄文と沈線間の刺突文の組合せは28図-3と類似し、25図-6は縄文が省略された鉢形土器である。また、28図-4にみられるエ字状文は21図-2、22図-1～9の磨消縄文系の鉢形土器や24図-2の沈線文系の鉢形土器に認められる。29図-1の施文は25図-3・5と類似したものであり、施文が乱れ直線化するに従い29図-2・4のようになるのであろう。このように鉢形土器と浅鉢形土器とは器形や施文上の特徴が一致または類縁関係の求められるものがあり、密接な関係のあることが指摘できる。

また、24図-1・3は20図-3の縄文が省略され、23図-2は19図-3や21図-1の縄文が省略されたものとみることができる。両者を対比すると、磨消縄文系の土器の器形は胴部が球

形状にふくらみ文様が整然としているのに対し、沈線文土器系のは胴部がく字状に屈曲する傾向がみられ、文様の乱れがみられるようになる。このように磨消繩文土器の繩文が省略され、沈線文土器へ、更に無文土器へと文様が簡略化される傾向が指摘できる。

前述したJ-10i地点の精製土器を大別すると磨消繩文系と細線羽状文系の土器に分けることができる。三万田東原遺跡を標式とする三万田式土器の古い時期には磨消繩文系と細線羽状文系の土器があり、新しい時期に凹線文土器があることが知られているが、四箇J-10i地点では凹線文土器や29図-7・8のように屈曲する器形の土器はみられず、三万田式の古い時期に比定することができる。この中で20図-3のように比較的古い様相をもつ磨消繩文土器から胴部が球形から「く」字形に屈曲する傾向や文様の直線状に簡略化され、無文のものまでを含みこれがどのように細分できるかか問題であるが、今回は特にふれない。

また精製無文土器に類似した粗製土器が認められることも注目したい。これは他の粗製深鉢形土器のように条痕を施す土器とは区別されるが精製土器ほど器面調整が良好でなく、「半精製土器」といえるものである。粗製深鉢形土器の中にも器面には条痕文を施すが内面はナデて器面調整の比較的良好なものがある。粗製深鉢形土器は器形の変化があまりみられない。J-10i地点の土器は近接した時期のものであり、Pit-14・19以外の粗製土器も第39図-3~8、第41・42図と類似したものであり、前述した精製土器に共存すると考えてよいであろう。その中で第36図-3~7、第37図-15・16は古い様相の粗製土器とも考えられるが明確に区別できるような相違点はみられない。J-10i地点の土器について以上のような概略的な検討を加えてきたが、同遺跡の中心に位置する四箇遺跡A地点の資料整理を待って細かく検討する余地を残しておきたい。凹線文を主とした四箇東遺跡との比較検討も今後の課題である。次にこのような近接した時期における精製土器と粗製土器の比率を比較しておく。

精製土器・粗製土器の口縁部、胴部、底部を合わせると9,000点を超える多量の土器が狭い範囲から出土しているが、正確な個体数をだすのは困難である。そこで精製・粗製土器の個体数の割合を検討するために口縁部と底部を比較してみた。精製土器の口縁部447点に対し粗製土器は863点を数える。底部は精製土器131点に対し、粗製土器は330点である。口縁部では粗製土器が全体の66%を占め、底部では72%を占める。これより全個体数の約60~70%は粗製土器で、残りの30~40%が精製土器であるといつうことができるであろう。精製土器の中における鉢形土器と浅鉢形土器の口縁部の比率をみると9対1となる。

土器の底部に種子の圧痕が残っていることも注意される点である。種子の圧痕にはドングリ類と思われる大きなものからエゴノミ程度のもの、更にもっと小さなものまであり、照葉樹におおわれた旧地形の景観と植物採集に依存した生活の一端をうかがわせる。粗製土器の器面には種子の圧痕や砂粒の剥落痕のほか、貝の圧痕がある。巻貝や二枚貝で擬似繩文を施したり、貝殻条痕文を施した土器がみられるが、このような巻貝や二枚貝の細片を胎土に混入したと

考えられ、貝が剥落したため圧痕が残ったものであろう。

J-10 i 地点から出土した石器の種類と総数は第2表の通りであり、その大半は出土状況および共伴の土器から縄文時代後期後半の所産と判断できる。石器の組成でまず注目されるのは黒曜石製の縦長削片を素材にした剝片石器の割合が極めて高く、全体の約9割を占めている。

この傾向は時期的にも近接し、しかも同様な立地条件をしめす福岡県春日市柏田遺跡の組成と類似しており、興味深いものがある。また西北九州を中心に縄文時代の中・後期に黒曜石製の縦長削片を素材とする剝片石器が多量に出土し、特に北九州の地域では後期に顕著な展開をみせているだけに両遺跡はこの状態を如実に示すものとして把握できる。次に J-10 i 地点の主要な石器について若干の考察と問題提起を試みることにする。

**石鎌** 縄文時代に普遍的に存在する石器であるが、当地点においては全体の約20%弱でその割合は比較的少ないと判断される。これは縄文時代の生業の一つである狩猟活動の占めるウェイトの置かれた方の一端を示唆するものと解釈できる。また石鎌の大半がII類・III類として分類されたいわゆる「剝片鎌」で占められている事も一つの特色とされる。

**刃器** 縦長削片の側辺に沿って二次加工の小剥離・使用痕と推定できる痕跡が観察される刃器は、剝片石器の中で多く、30%を越している。用途は一応の予測として、動物の解体・調理と他の道具を製作するための加工工具と考えられ、特に I 類は縦長削片の一端に二次加工を加えて鋭利な先端を形成している。これは対象物を切り裂く、切り開く機能に最も適応した形態と目される。II 類の一端が意図的に折断されたと考えられるものや、素材の形をほぼ保っているものと他の剝片とは明確に区別される。また III 類の様に二次加工の調整が施されず、使用痕の観察される刃器が約半数存在することも注目に値いしよう。これらの刃器の用途・機能については、サヌカイトを主要な素材とする比較的大形の搔器・削器との関連も当然問題視されなければならない。刃器と搔器・削器とでは使用対象物・使用のプロセスの相違が予想されるだけに今後の課題として挙げておきたい。

**サイドブレイド** 器種の認定において常に問題視される石器であるが、黒曜石の縦長削片を素材にして短辺への折断もしくは剥離による加工の施されたほぼ長方形を呈する小形の石器をサイドブレイドとして他の剝片石器と区別した。特に大きさ（長さ）の齊一性や刃器に次ぐ出土数を重視したためでもある。一方この石器の用途・機能・対象物等について明確さを欠くが、石鏁等の関連資料から漁撈具の一種として把握される面を持つ事も否定できない。しかしこの用途についても考慮の余地を多いに残していると考え多角的な視野からの積極的な考察が必要と痛感している。

**楔形石器** 黒曜石を素材にしその両面に特殊な剥離を持つ小形の石器が相当数出土している。形態上の特長として、ほぼ長方形を呈しその長さ・幅は 2 ~ 3 cm 内におさまる極めて小形の一群であり、この石器の大半に長軸の一端に細長い槌状剥離面が観察され、彫刻刀との類似が

指摘できる。また加工は長軸に並行する上下両端からの細長い剥離を基本としており、あたかも小形の残核を彷彿させる。しかし残された剥離面から想定される剝片はいずれも極端に小さく他の剝片石器の素材となり得ることは到底不可能であり、石核とは考え難い。この石器を良く観察すると使用痕と推定される磨滅・擦痕それに階段状の小剥離は、上下両端に顕著に認められる。これは両端に強い力の加わったことが予想され、石器の縦断面が凸レンズ状に近い形を呈すこととも深い関連が示唆される。以上の特徴を有する石器としては、これまで「曾根型石核」、<sup>註(6)</sup> 截断面のある石器と同素材、ビエス・エスキュー」と呼称されているものに近似している。これらの石器は旧石器時代から縄文時代晚期にかけて出土しているようで、機能についても石核説・彫器説・複形石器説などの諸説が提起されている。九州の縄文時代の遺跡では長崎県深堀遺跡や福岡県大道端遺跡、柏田遺跡において少数であるが類似する資料がある。

さて、この石器の用途については形態的な特徴および両端に観察される使用痕と判断される痕跡等から「石製の楔」を考えておきたい。またこの機能を想定する理由として以下の事も考慮したいと思っている。当地点出土の石器の組成では第1次的な生産具と考えられる石鎌・尖頭器の占める割合が低くそれに対して解体・調理あるいは加工工具と推定される第2次的な石器が極めて高い比率を占めていることである。このことは石以外の素材を用いた道具類の存在を予想させ、同時に加工工具としての道具の発達とも符合するものと考えられる。そこでその一つとして当然木器類が挙げられ、その製作過程で焼製石斧をはじめ石錐や彫器、それに刃器や搔器削器の一部があてられ、同様に複形石器の使用も十分に予測される。さらに四箇A地点の特殊泥炭層から後期後半の「刀のつか（漆器）・容器状木製品」が実際に出土しており、それらの資料から木器類に対する高い加工技術が窺え、さらに各種の木器類の存在を予想させる。九州での縄文時代の低湿地の調査は開始されたばかりであるが、今後この種の発掘が進む中で多数の木器類の出土が期待できるものと考えている。

**石斧** 当地点における石器の大半は剝片石器で占められていることは再三述べた通りであり、それ以外の石器としては未完成・破損品を含めて15点の石斧を特記することができる。石斧の大半は蛇紋岩製の磨製あるいは半磨製であり、打製石斧は僅か4点のみである。九州の縄文時代後期後半～晚期にかけては、台地上に立地する遺跡を主体に多量の打製石斧の出土が知られていることと極めて対照的であり興味がもたれる。この現象が同時期の低地に立地する遺跡の一つの普遍的な特色として把握できるか否かは判断できないが今後の課題である。

J-10 i 地点の石器類については、四箇A地点の一部として考え、隣接し、しかも時期的にも接近している四箇東遺跡などの石器類の整理を踏えた上で改めて考察したいと考えている。

弥生時代の遺構はJ-10 i 地点から住居址と溝のほかピットがあり、J-11 a 地点からも溝が検出されている。住居址から出土した複形土器（48図-2）、器台（48図-6）、ノミ形石器（72図-5）、砥石（73図-8）と、溝（M-2）の複形土器（47図-6・48図-1・5）Pit

… 3 の壺形土器 (47図-3・8、48図-4)、Pit-44の広口壺 (47図-3)、壺形土器 (47図-7) を図示したが、いずれも弥生中期のものである。J-11 a 地点の溝の出土遺物も弥生時代中期で、四箇遺跡B地点から検出された住居址、溝などの時期と一致し、微高地の上に広がる弥生時代中期の集落遺構の一部があることをしめしている。これらの資料も四箇遺跡B地点の資料整理をもって検討しなければならない。

このほか J-10 i 地点では夜臼式土器のかたわら弥生時代前期の壺形土器や壺形土器、後期の甕・高杯・器台・台付鉢などが出土している。また J-11 a 地点からも弥生後期後半の甕・高杯・器台のかたわら古墳時代前期の壺形土器が含まれていた。J-10 h 地点でも弥生後期の甕が出土している。これらはいずれも洪水などによってもたらされたものと思われるものである。昨年度調査した J-10 a ~ f 地点からも夜臼式土器のかたわら弥生時代前期・中期・後期・古墳時代前期の土器が出土しており、昨年度のまとめを追認する結果を加えた。<sup>20(4)</sup>

本年度の調査は 1 月 19 日によく終了したが、現場の調査と資料の整理に追われ、慌しく報告書の作成を迫られるといった状況で、資料整理の時間を十分に持つことができなかつた。また狭い範囲から数多くの遺物が出土したため、遺物の説明を簡潔にし、できるだけ多くの資料を紹介するように努めたが、限られた予算のためなお取録できなかつたものがある。

このような不備な点は今後、関連する同地域の調査や四箇遺跡の資料整理の中で補足していくことに努めたいと思う。別府大学の賀川光夫・橘昌信先生の指導助言をはじめ多くの人々の協力を得てよく報告書の刊行にこぎつけることができた。記して感謝の意を表したい。

- 註(1) 福岡市教育委員会「福岡市西区四箇周辺遺跡調査報告書(1)」(P.88~89) 福岡市埋蔵文化財調査報告書  
第42集 1977年3月
- (2) 熊本県菊池郡氷水町教育委員会『三万田東原一調査概報』 1972年2月  
富田東一「三万田式土器の文様」「九州の原始文様展—縄文土器にその原点を探る—」 国録所収  
佐賀県立博物館 1977年1月
- (3) 河村道雄「ピエスニスキュについて—岩手県大船渡市墓遺跡出土資料を中心として」  
『東北考古学の諸問題』所収 1976年10月
- (4) 註(1)前掲書 P. 93参照

# 図 版



発掘作業風景（上J-11a地点、下J-10i地点）



(1) J-12a 地点発掘風景



(2) J-10h 地点AT全景



(1) J-11a 地点 A T 土器出土状态



(2) J-11a 地点 C T(溝)全景



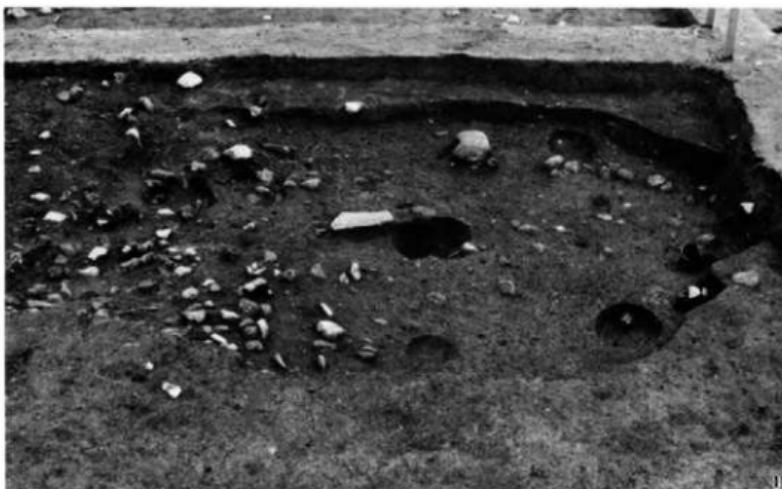
(1) J-10 i 地点全景

(東から)



(2) J-10 i 地点 2・4 区全景

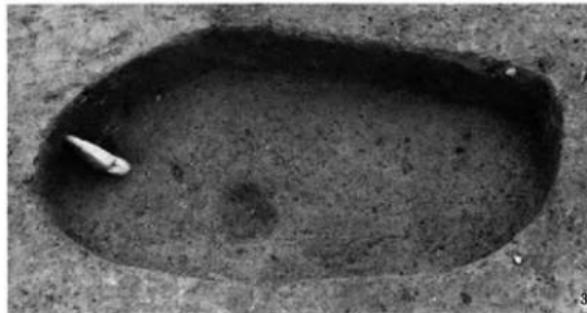
(西から)



1. J-1

2. D-2

3. D-1



J-10 i 地点住居址・土塙全景



(1) J-10 i 地点の溝(M-1)全景

(北から)



(2) J-10 i 地点の溝(M-2)横断面

(南から)



J-10 i 地点土器出土状態



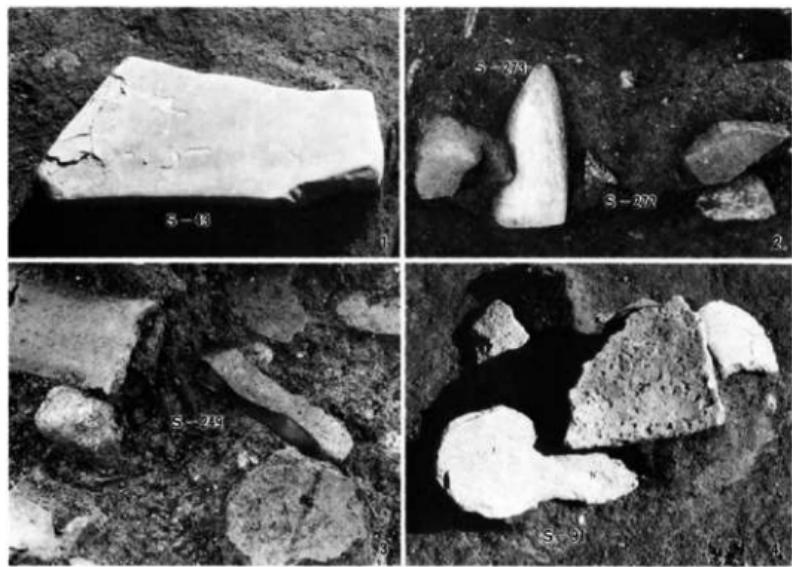
(1) Pit-19の土器出土状態



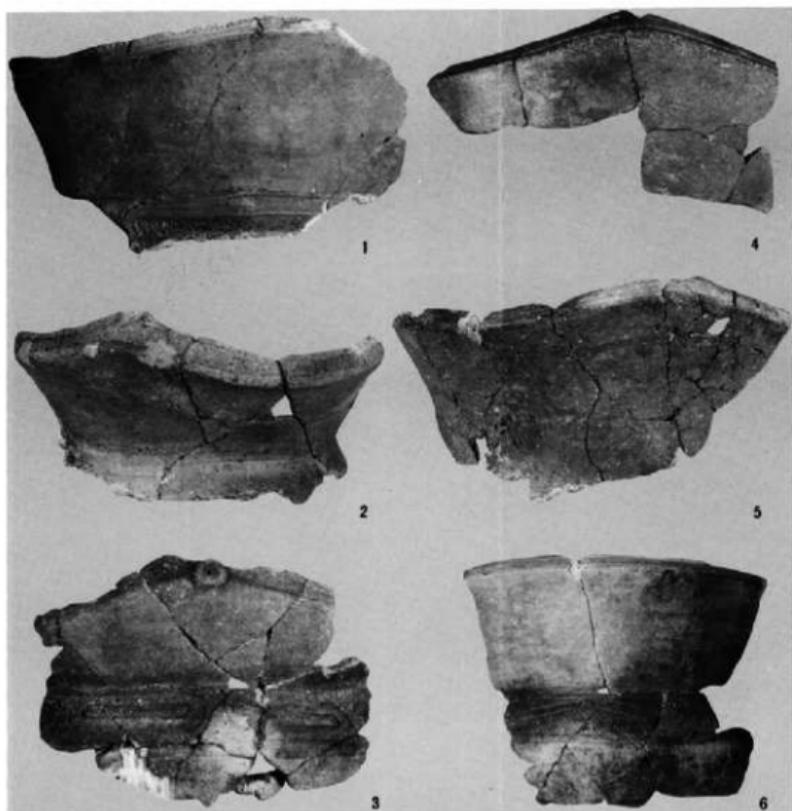
(2) 構製土器出土状態 (P-1050)



(1) 粗製土器出土状態 (P-1350)

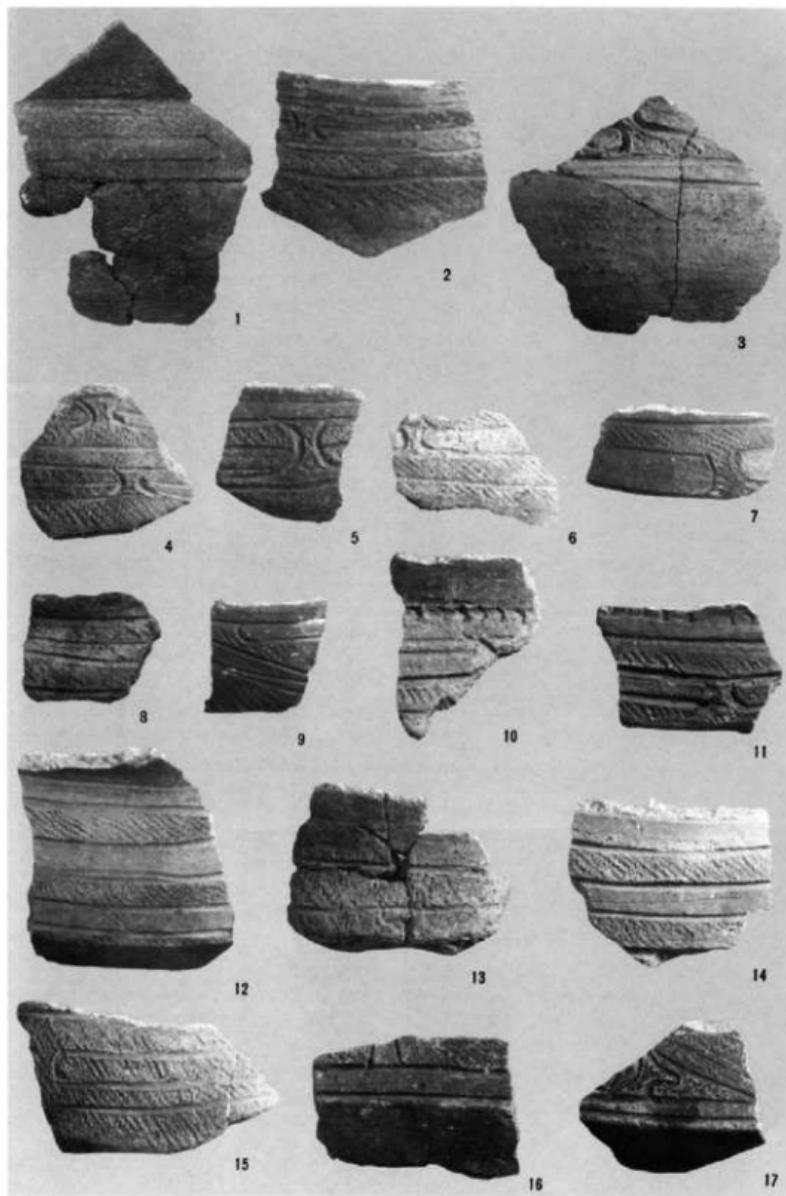


(2) 石器出土状態

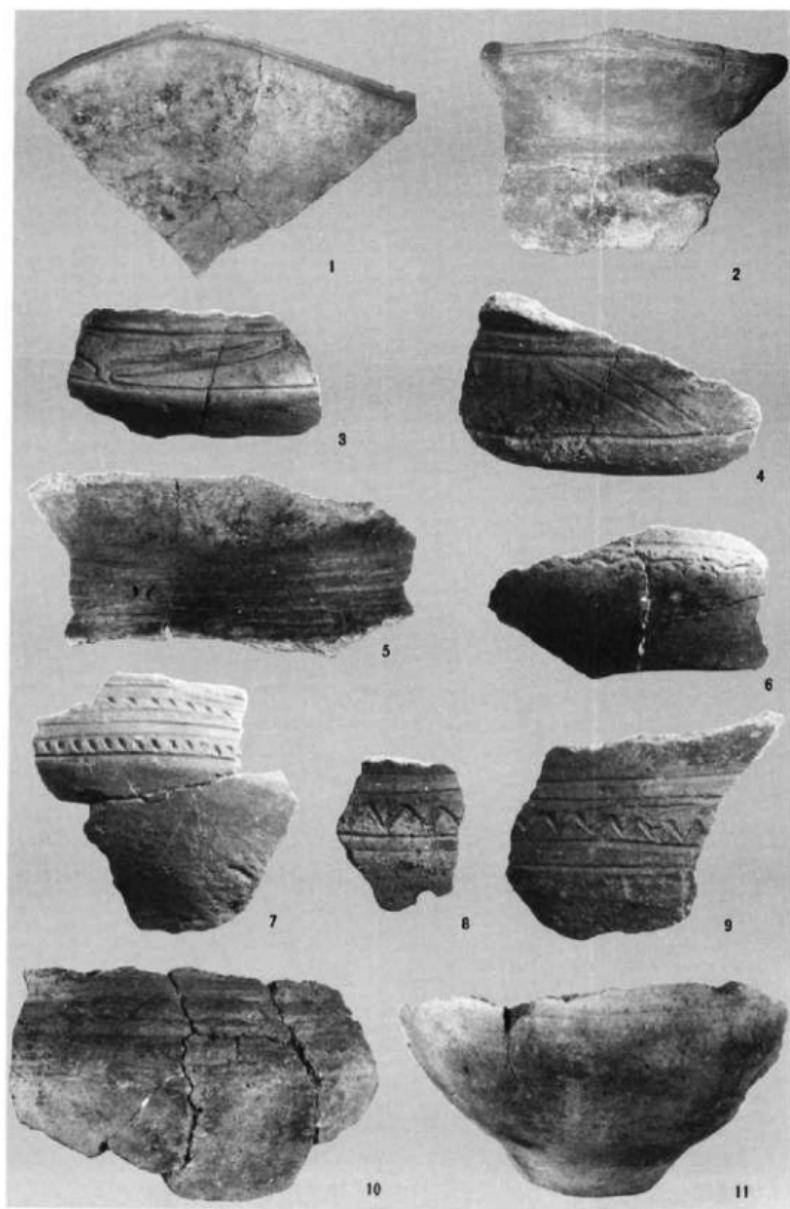


6 の拡大写真

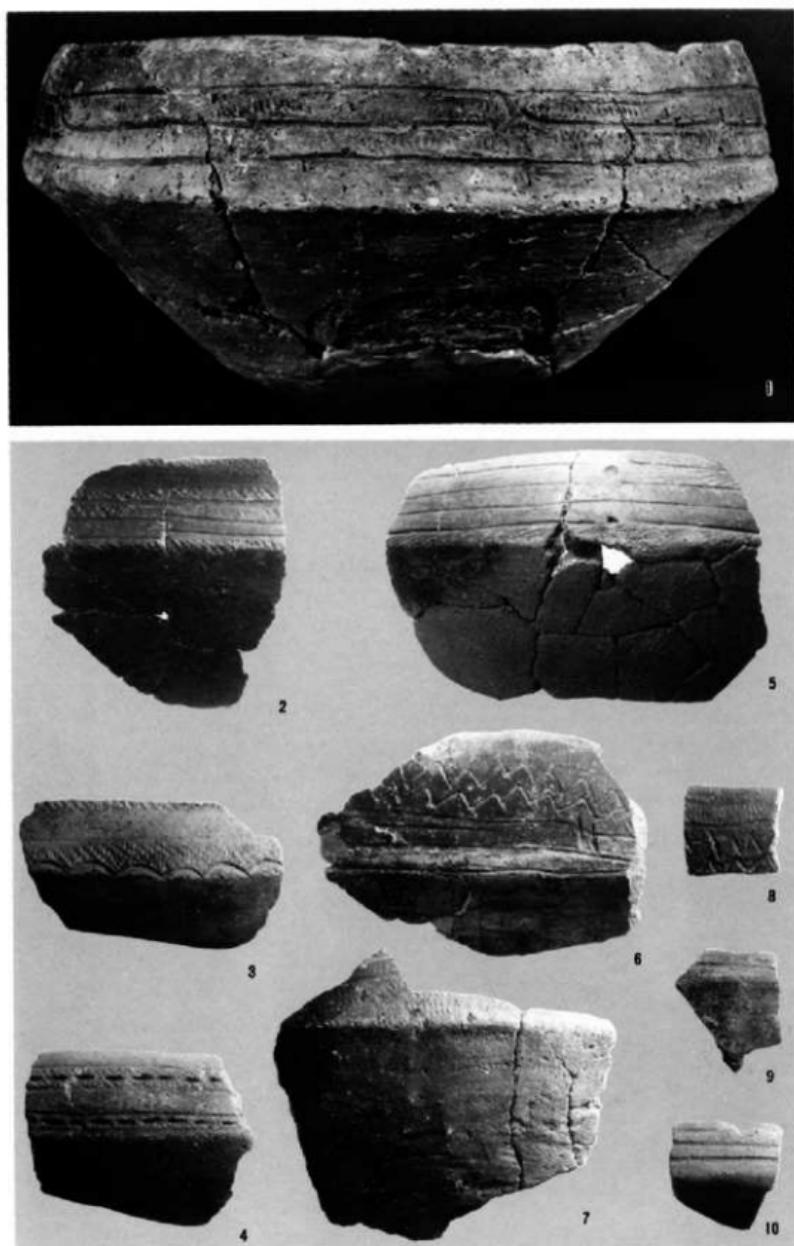
精製磨消繩文土器-1



精製磨消繩文土器—2



精製沈線文土器



精製浅鉢形土器



1 P-884-894

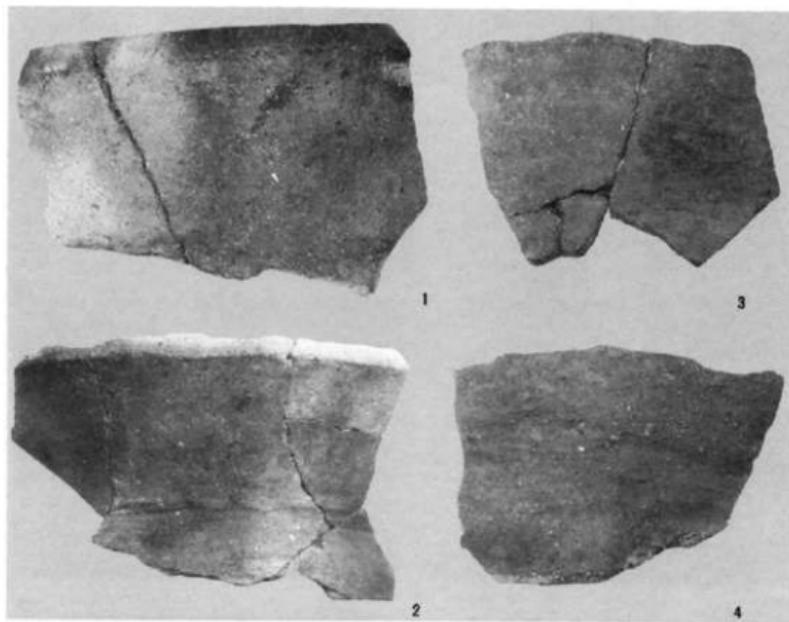
2 P-1299

3 P-1001

4 P-1382

精製土器

(約1/2)

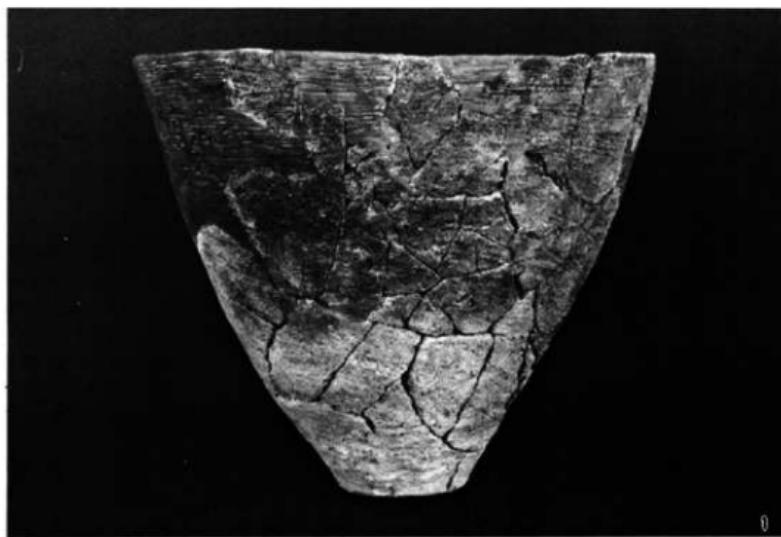


精製無文土器



精製深鉢形土器 (P-316 · P-911 · P-912 · P-913)

(縮尺1/2)



1



2

粗製深鉢形土器 (1 P-1350 2 P-1050)

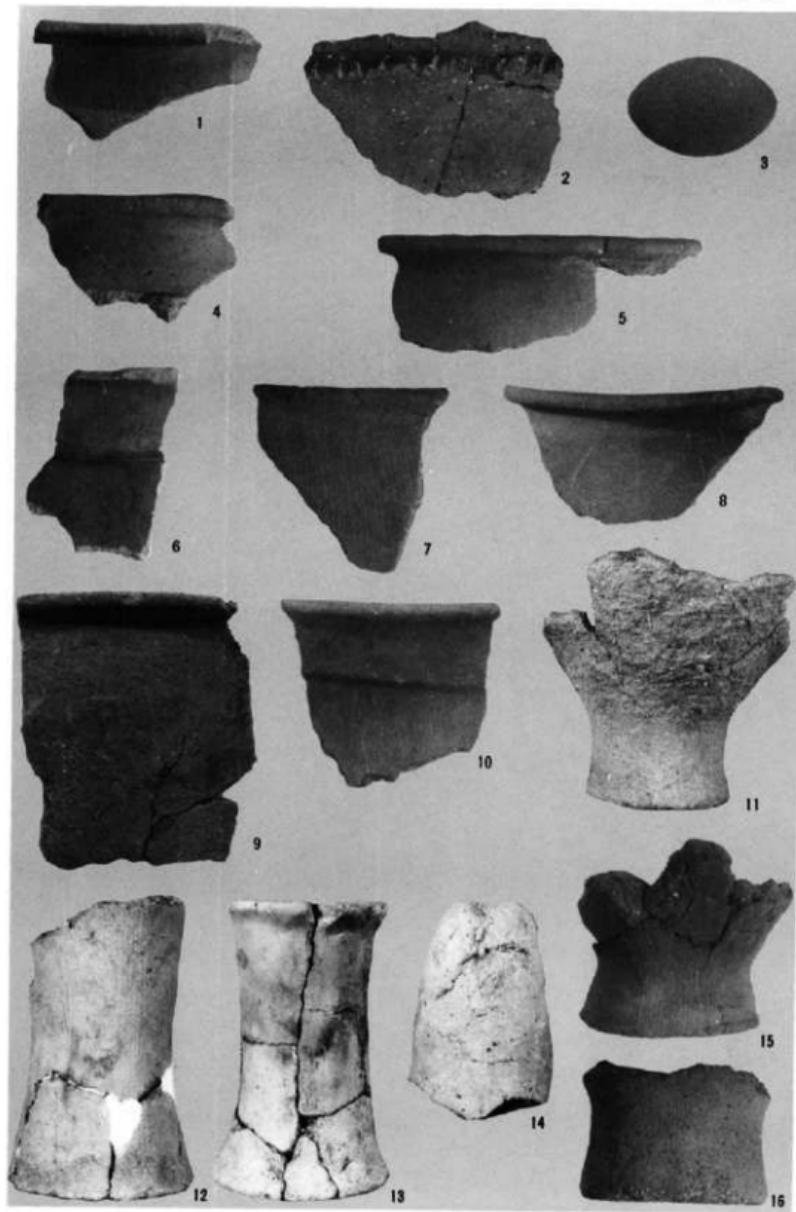


(1) 粗製淺鉢形土器 (P-924 約1/2)

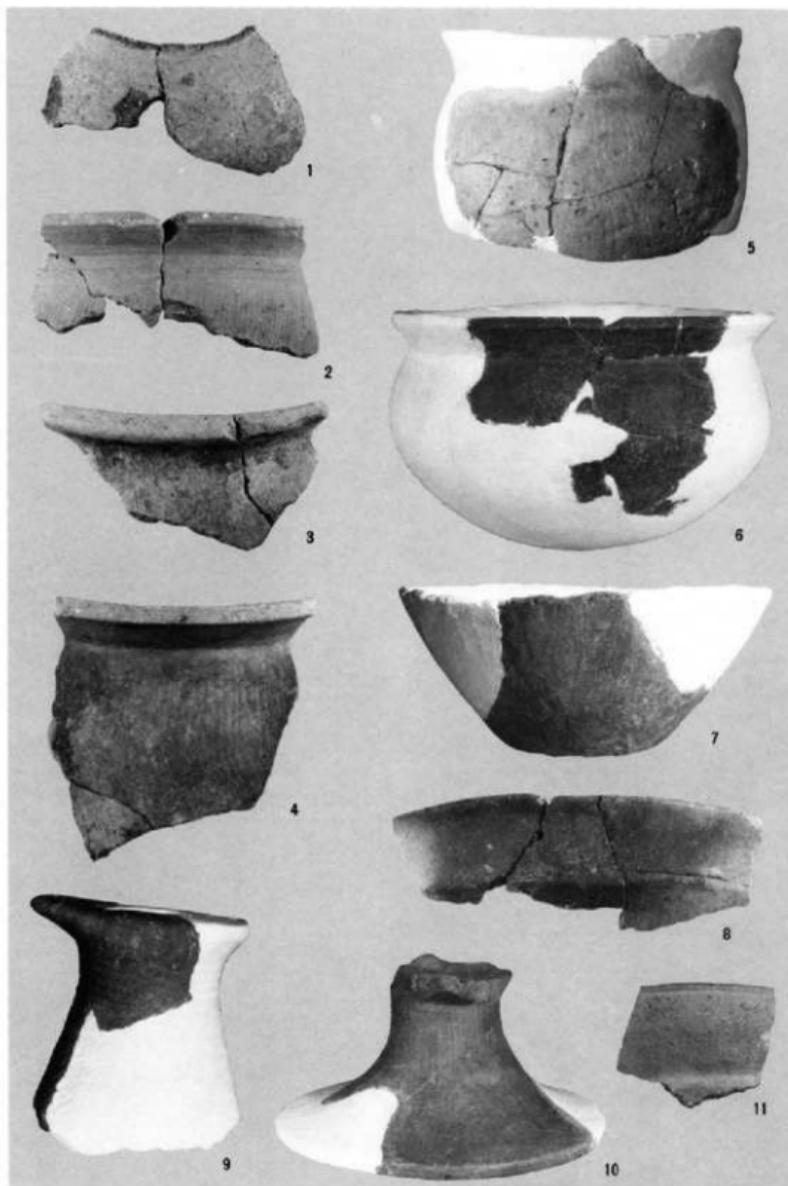


(2) 弥生時代壺形土器

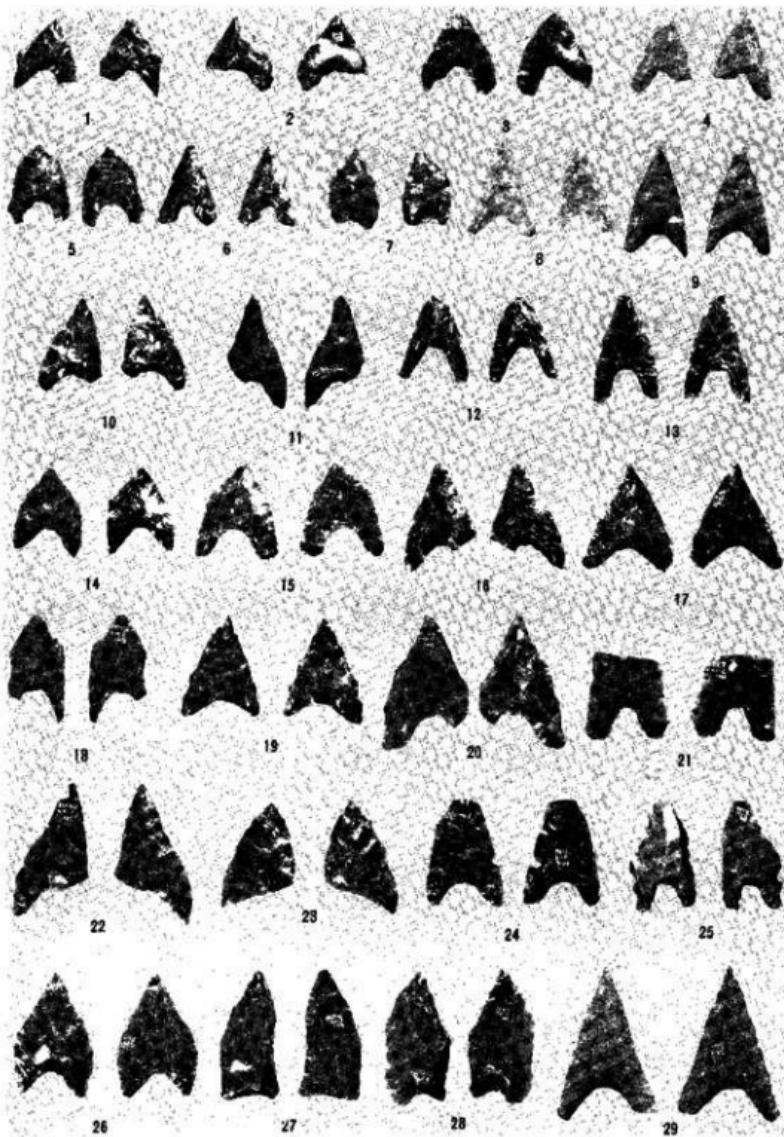
(P-1492 約1/2)



J-10 i 地点出土弥生土器

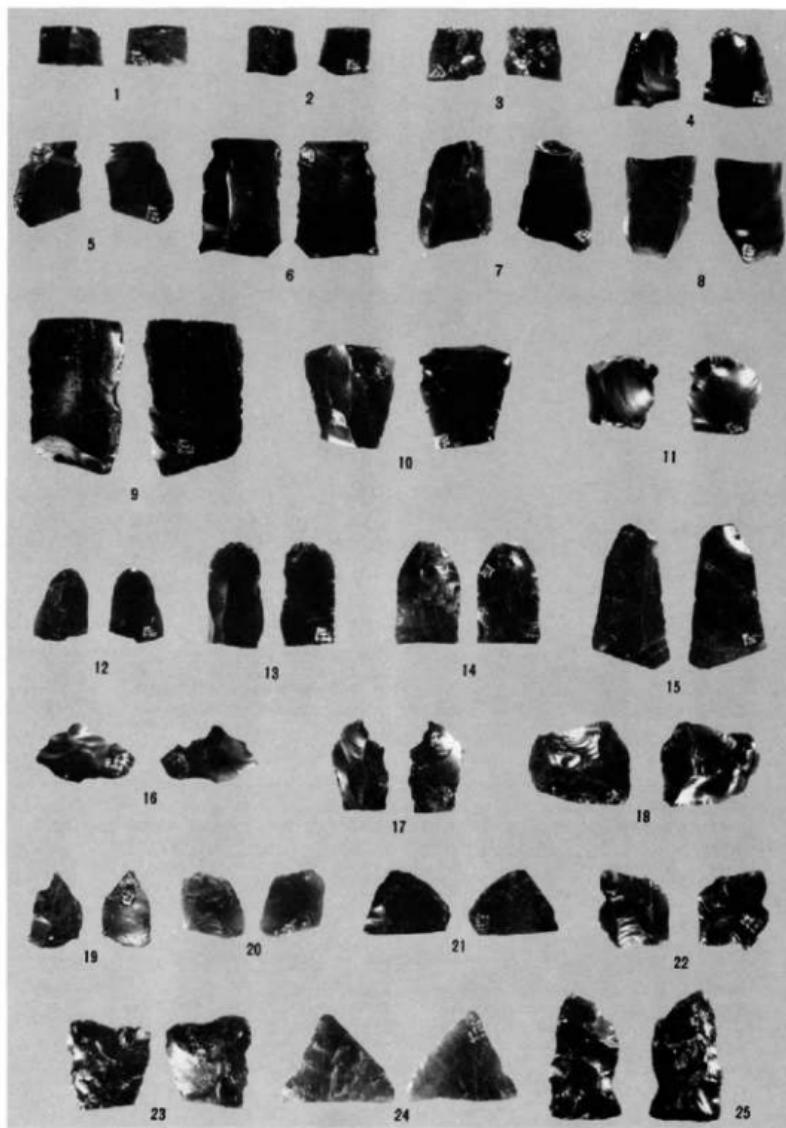


J-11a 地点出土弥生土器



石鏃

(縮尺2/3)



サイド・ブレイド

(縮尺2/3)



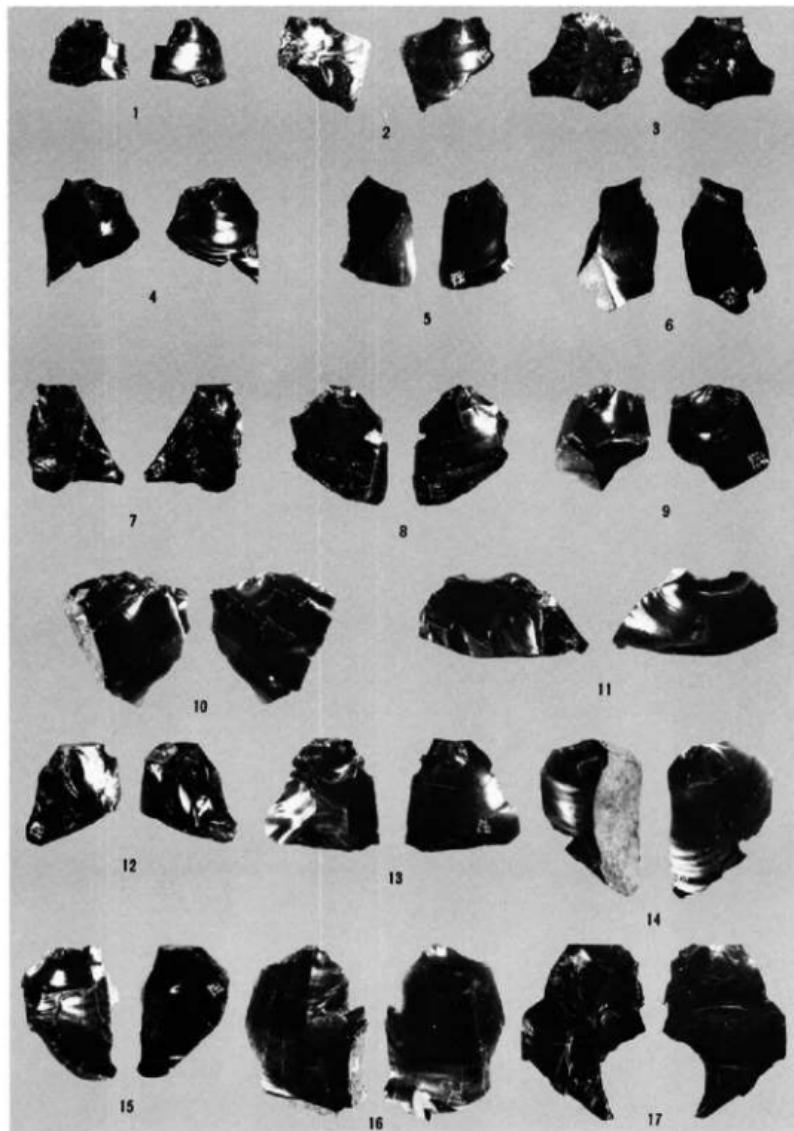
刀器

(缩尺2/3)



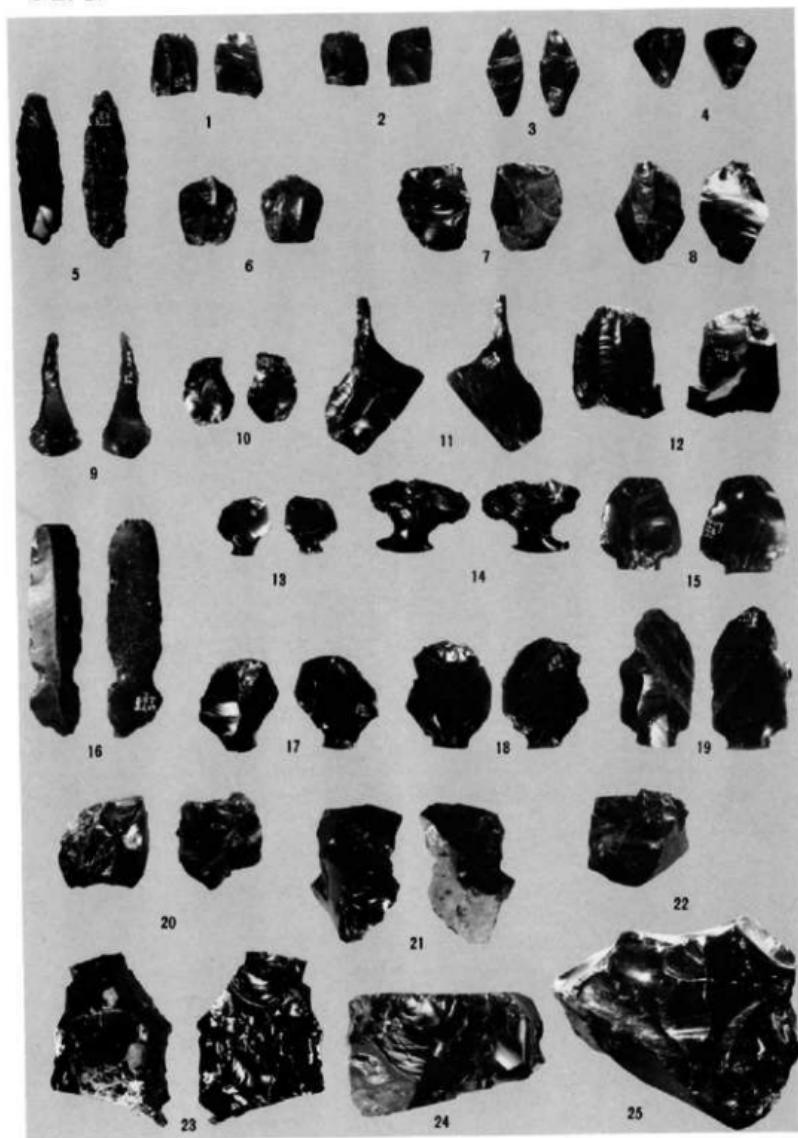
刀器

(缩尺2/3)



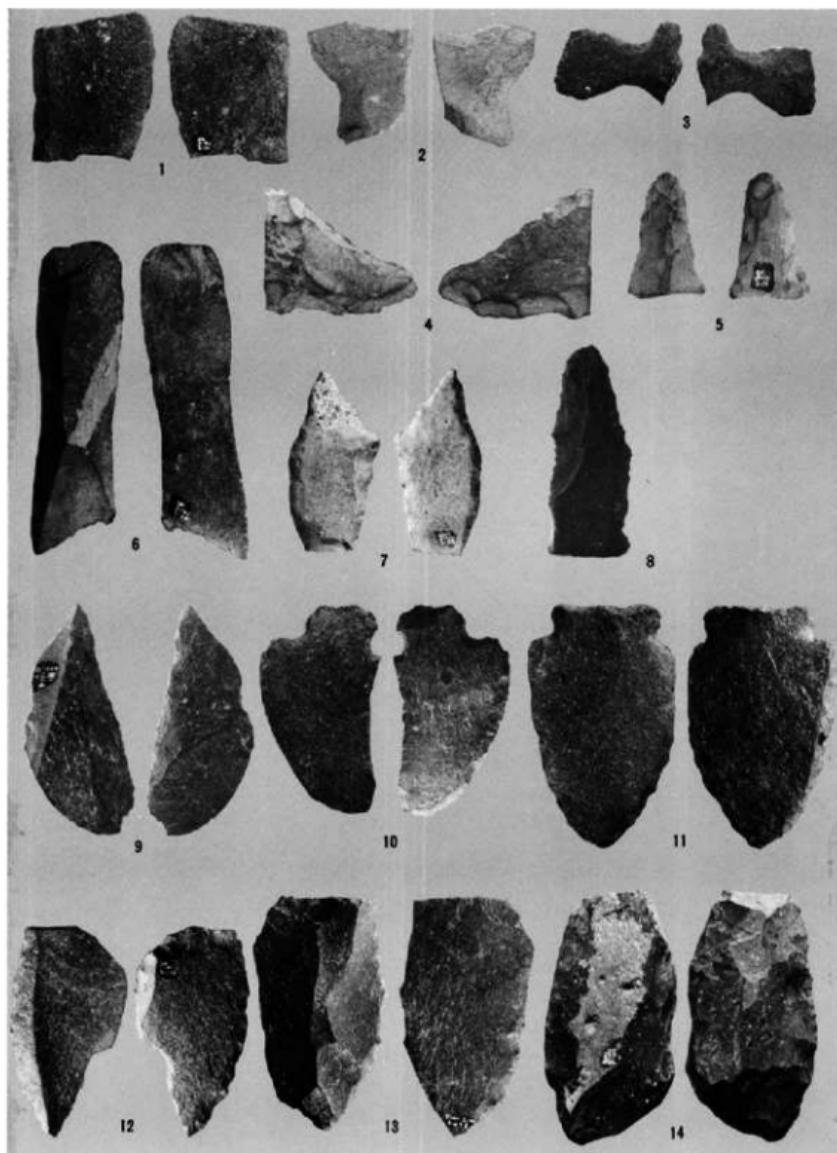
刀器・縱長剥片

(縮尺2/3)



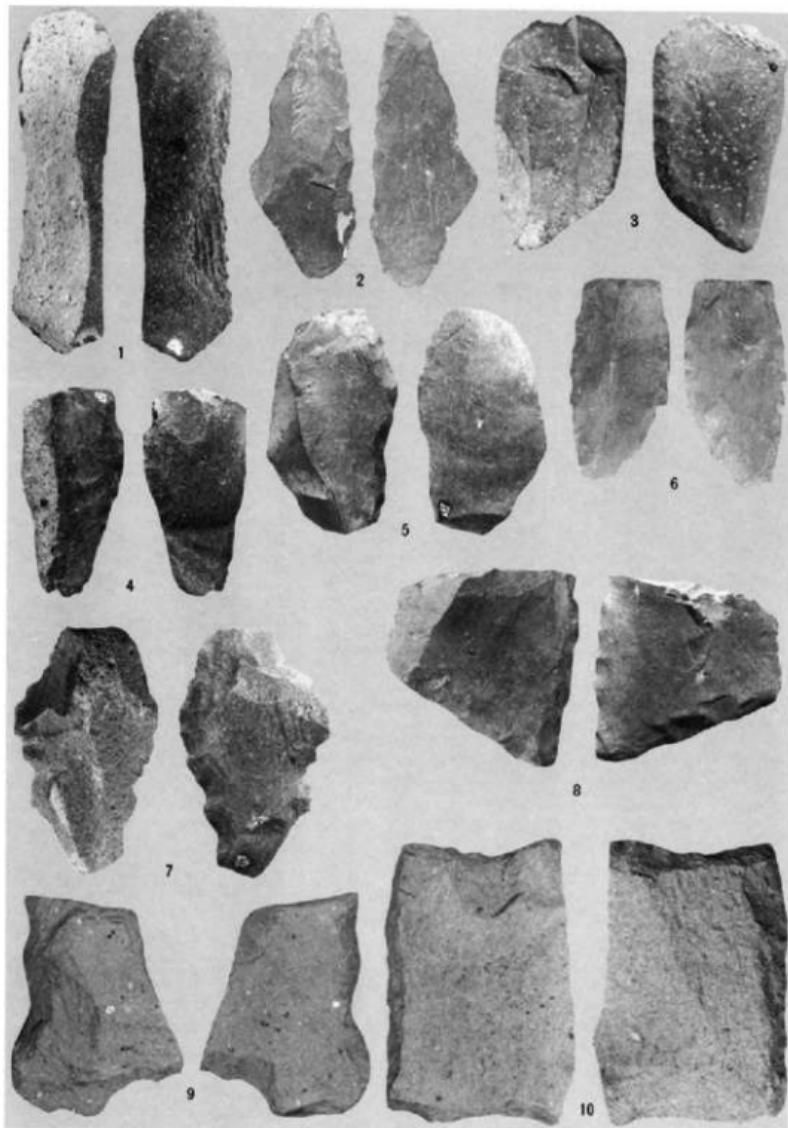
つまみ形石器・石核他

(縮尺2/3)



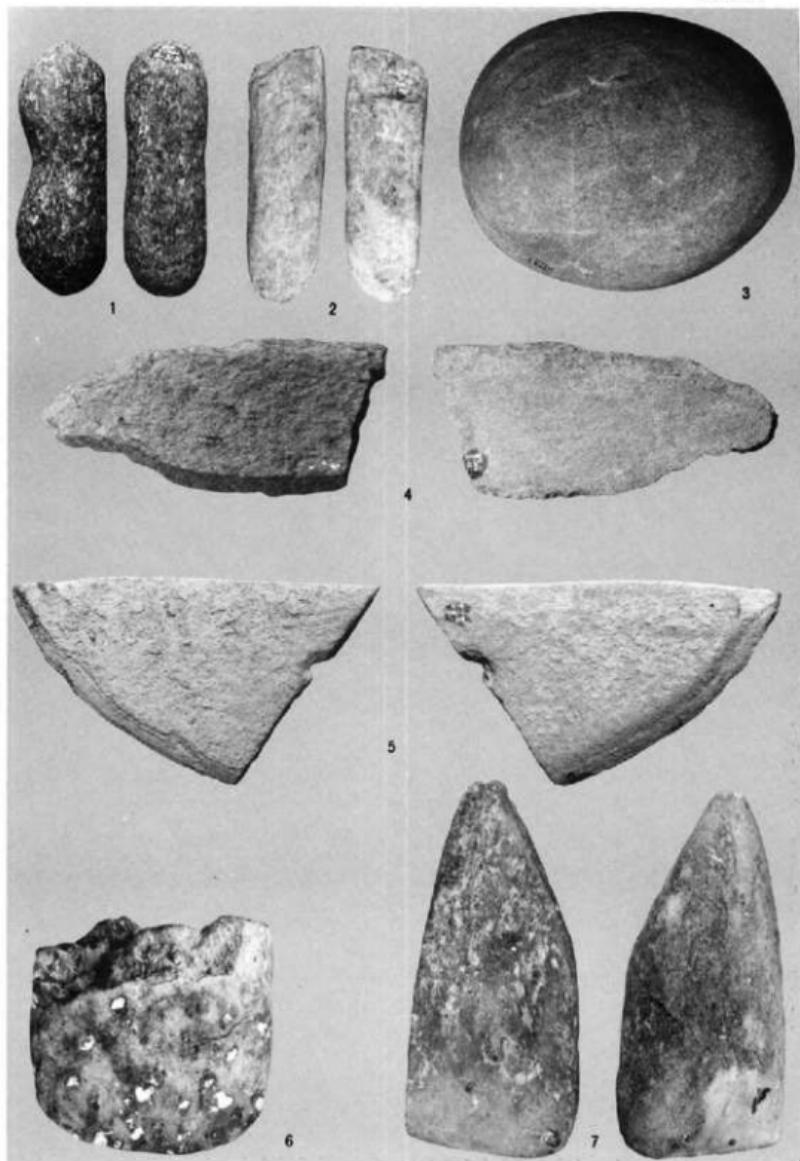
剥片石器（サスカイト）削器・搔器

(縮尺3/5)



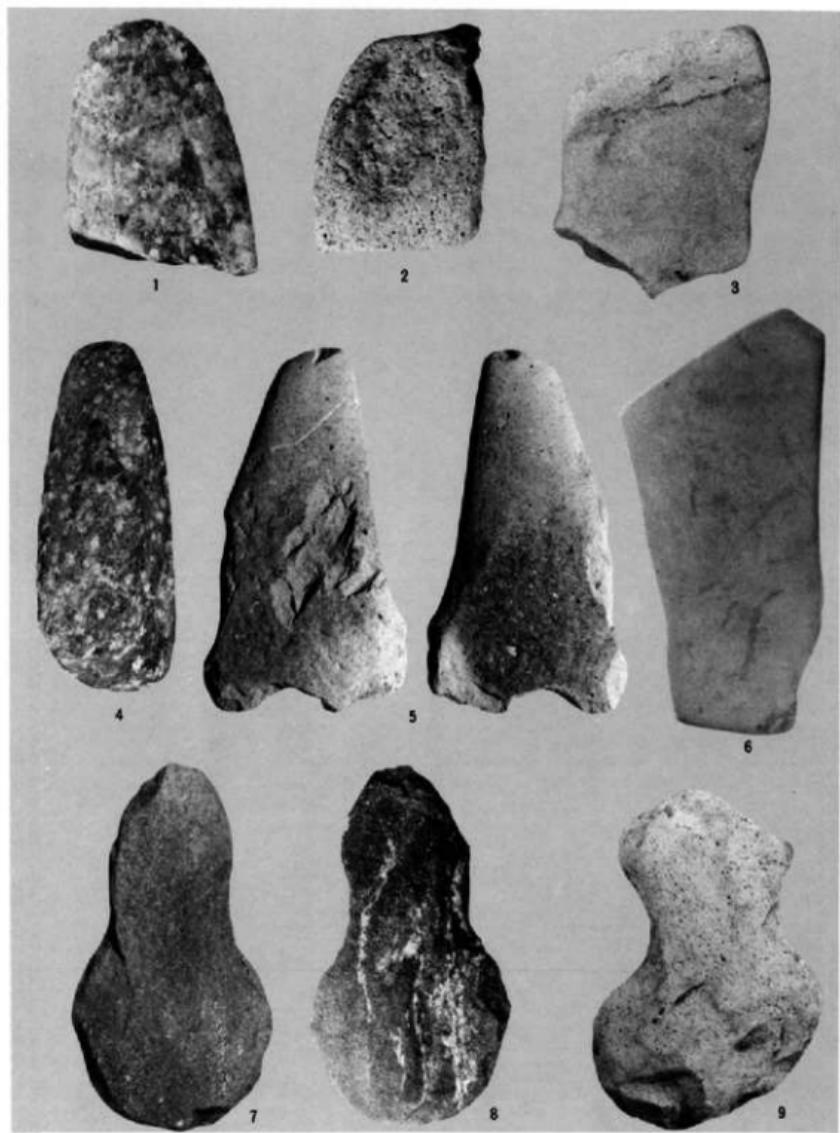
剥片石器（サヌカイト）削器・挫器

(縮尺1/2)



磨製石器

(縮尺3/5)



砾石·磨製石斧·打製石斧

(縮尺1/2)

---

福岡市西区  
四箇周辺遺跡調査報告書  
(2)

福岡市埋蔵文化財調査報告書第47集

1978年(昭和53年)3月31日

発行 福岡市教育委員会  
印刷 株式会社西日本新聞印刷

---

